

つた。

「要らぬ。目隠しは死を恐れるものがすることだ。我々日本人は死を恐れぬ。まして祖國のためには捨てる一命だ。一毛の恐怖もない。目隠しはお断りする。」

將校は舌を捲いて退きさがつた。日は落ちて天地は昏い。夕風が蕭々と過ぎて行く。

横川と沖は叫んだ。

「天皇陛下萬歳。」

「大日本帝國萬歳。」

その聲が、ハルビン城外の暮景を破つて、悠々と響いた。

——死刑時間——

「ねらへ、銃ッ。」

將校の劍が高く上つた。

廿四の銃口が一齊に向けられた。十二は横川へ、十二はへ沖！

横川は胸を開いて自若としてゐる。沖は莞爾としてゐる。

將校の劍が、さつと振り下された。

「うてッ。」轟然！

横川は？ 沖は？

姿はなかつた。白い二本の柱が、暮闇に哀しく立つてゐるばかり、横川は右に伏し、沖は前に

倒れた身動きもしない。

屍だ。あゝ英魂は叫べども返らぬ。

悲しい哀しい屍だ。

### 一太郎やあい

銃砲をあげろよ

出征軍人萬歳 出征軍人萬歳。

海を壓する如き萬歳の聲に送られて、丸龜師團の出征兵をのせた御用船「神州丸」は、今靜か

に多度津港の埠頭を離れ、満洲へ向け出發したところであつた。防波堤の上には、見送りの群衆が手に手に小さな日の丸の旗を打ちふりながら萬歳を叫んだ。「一寸ごめんよ、ごめん下さいませよ。」

この時、人々の間を掻き分け引き分け、遠慮會釋もなく、やはり見送りに來てゐた小野田香川縣知事のまん前に駈出して來たのは、木綿の風呂敷を腰にまき、着物の裾を高々とまくりあげた一人の老母であつた。腰の間にはさんでゐた淺黄の手拭をとると、

「一太郎やあい。一太郎やあい……一中隊の一太郎……岡田一太郎はどこぞウ」と叫んで、石垣を踏み上らんばかりに二三歩進むと、前よりも高く、

「一太郎やあい……その船に乗つてゐるなら鐵砲をあげて見せろよウ。」

聲は神州丸に達したと見へ、後甲板に此方をむいて整列してゐる中の一太郎が、鐵砲をとつて頭上高く差し上げた。

「おう、一太郎そこにゐたか。親一人子一人ぢやとて、家の事は心配するでねえぞオ。一生懸命天子様に御奉公申上げるだぞオ……」

老母は手拭を夢中に打振つた。

「解つたら、もう一度鐵砲をあげて見せろ。」

鐵砲の先にはハンカチが結びつけられて、高く左右に打ちふられた。

「おう、それでいゝだ、それでいゝだ。おつ母は家で待つてゐるからなア……お前は御國のためめに働いて、大勝利でかへつてくろよウ……」

神州丸は次第に遠ざかつて、甲板上の兵隊の姿は、たゞ一つの黄色い點としか見へなくなつた。老母は張りつめてゐた氣力が一時にぬけたものか、その場につたり坐つて、にじみ出る涙を手拭で押へた。居合せた小野田縣知事はじめ、多くの人々は誰一人として、この老母の言葉に感動しないものはなかつた。小野田知事は靜かに老母に近づいて、

「お婆さん、あんたは何處の人ですか。」

「私ですか、私は豊田村の者でございますよ。」

「今日は息子さんの見送りに見えたのですね。」

「さうでございます。うらの悴が出征しましたでね。」

「息子さんのお名前は。」

「岡田一太郎といひますだ。」

「さつき、貴方は親一人子一人だと云はれましたね。さうですか。」

「さうでございますよ。一太郎は私の一人息子ですよ。」

### 此の母この子

此の感心な老母の名は、岡田かめと言つて、多度津から五里の田舎、香川縣三豊郡豊田村の山里に住む百姓であつた。一太郎はその粹で、一人息子である。

親一人子一人の貧しい百姓。その一人息子の一太郎に動員令が下つて、丸龜師團へ入營したのは明治三十七年七月一日の事であつた。それから二ヶ日経たないうちに、戦地へ出征することになつたので、一太郎は早速母に手紙を出した。

通知を受取つたかめは、五里の山道を丸龜まで一太郎に面會に出て來た。

行進ラツバは、勇ましく營門から響き渡つて來た。歩調を揃へて兵士達は營門をくり出して來

た。

（一太郎はどの邊にゐる。）

かめは伸びあがり伸びあがり見送つてゐた。

「おゝ、一太郎、そこにゐたか。」

かめは、一太郎の姿を見つけて駈けよつた。

「おツ母さん。」

武装いかめしい一太郎と、腰に風呂敷包をまきつけた老母とは、手を取り合つた。

「なあ、おツ母さん。おらが若し戦死したら、おらの骨を持つて清正公様にお参りしてくれよ。」

おらは、おツ母さんの病氣の時、清正公様にお願ひしたことがあるだから。」

「あゝいゝとも。」

戦死後の事まで語り合ひながら、多度津までやつて來た。波止場は數千の見送人の雑踏であるふと、かめが横を見ると、家族の者が出征兵に氷砂糖をやつてゐるのを見た。

「一太郎や、一寸待つてろ。おらも氷砂糖を買つて來てやるだから。」

かめは急いで氷砂糖を買ひに行つた。その内に

出發の時刻が迫つて 兵士は全部神州丸に乗込んだ。一太郎は幾度も振かへつたが、母の姿は見へなかつた。そのうちに合圖の汽笛と同時に船は徐々に動き出した。

「おらに氷砂糖をくれようと思つて、おツ母は……」

一太郎は母の姿を思ひ浮べてポトリと涙をおとした。

その時防提に現はれた老母の姿！ その絶叫、一太郎は眼早く發見した。

「おツ……おツ母だ。」

母の言葉はかすかながら耳に入つた。云はれるまゝに一太郎は銃を高く差し上げた。

「………解つたら、もう一度鐵砲をあげる。」

一太郎は、手早くハンカチを筒先に結びつけ、高く高く差しあげて、防波提の人影が見へなくなるまで打ちふつたのであつた。

### 廢兵一太郎

出征した一太郎は 佐野中隊長の從卒となつた。そうして十月三十日旅順の總攻撃に参加した。十一月廿三日佐野中隊長が負傷し病院に送られたので、一太郎は第八中隊に編入替へとなつた。乃木將軍からの命令を受けたのが廿五日、翌早朝總攻撃が開始された。

この激戦で一太郎は、左背部に貫通傷をうけ野戰病院に送られた。そこで手厚い看護をうけてゐたが、やがて内地へ送還されることになつた。一太郎は善通寺の豫備病院に送られた。老母のおかめは早速面會に行つた。

「一太郎や、お前ようまあ怪我位でかへて來たな。」

「おツ母さん、お前も無事だつたか。」

「あゝ、おらは大丈夫さ。お前の怪我はどうだえ。」

「大した事はねえ。俺早く快くなつて、もう一べん戦争に行くつもりだよ。」

「いゝとも、行つて來い。おらの事は心配はねえだから。」

歸つて來た早々、一太郎は再び出征の事を語り合つた。

翌三十八年三月、一太郎は退院し、二月十九日再び戦地へ出て行く事になつた。

「おツ母さん、では行つてくるよ。」  
「御國のためだ。」

天子様の爲だ 何度でも行つて働いて来い。」

一太郎は元氣で出て行つた。今度はもう生きて歸れまい。さう思つて懐には母の寫眞を抱いて行つた。一太郎が再び出征すると、かめは故郷の靈場は云ふまでもなく、阿波や攝津の神社佛閣を渡る隅なく巡拜した。

そのうちに日露戦争も無事終結を告げて、一太郎は同年十一月十八日目出度く凱旋した

「これからは、おツ母を安樂に暮させるやう一生懸命働くだよ。」

さういつて一太郎は、家を興す事に努力したが、不幸にも戦争で受けた傷のために両方の手が痛み出して、思ふやうに働けなかつた。その年の冬を越して翌年の春になつたが、手の痛みは益々はげしくなつた。四月一日には戦功によつて一時金百五十圓を下賜されたが、

手の治療の爲め 善通寺の大島病院に入院して、恩賜金は全部治療に注ぎ込んでしまつた。病院を出た時、一太郎の両手には完全な指は三本しかついでゐなかつた。

「おツ母さん、俺がこんなになつて了つて、お前に何時までも苦勞かけてすまん。」

一太郎は悲痛な思ひがするのであつた。

其後、實に七年の長い間、一太郎は手の病に苦しめられた。その間一太郎は妻を迎へた。その妻もよく一太郎につかへてくれたので、一太郎は母と妻とに心から感謝してゐた。

村の在郷軍人會では義援録といふ帳面を作り、廢兵となつた一太郎のために、義捐金を募り、その金を一太郎一家に贈つた。

斯ういふ事實が、東京の新聞によつて世間に傳つた時、東京では岩倉男爵を始め多くの人々が義捐金を集め、全国各地から同情金が寄せられ、三百圓近くの金が集つた。

一太郎の村では、村長始め有志の者が集つて、信用組合から資金を借り出し、田畑四反を買入れ自活の道を立ててくれた。また村長の發起で一太郎後援會も出來、漸く長年の苦しみから安定する事が出來た。

### 最大の光榮

大正十一年十一月 攝政宮殿下にましました  
今上陛下は、四國の大演習に成らせられた。

その月の十七日午前、御野立所に御統監あらせられ休戦の後、愛馬山吹に召され、御下山に相成つた、時に一太郎(四〇)母かめ(七一)の二人は、小野村長に伴はれて村を出で、三里を徒歩して御野立所の東麓にあたる託間村六松の三叉路にあつて殿下をお迎へ申上げた。

「おツ母さん、攝政宮殿下の御前に入るのだから、不敬にならないやうにせんといかんよ。いゝかな。」

「うん、判つとるよ。有難いことだ。有難い事だ。」

老母かめは、軀は壯健であるが耳が遠くなつてゐた。

十時二十分、御下山になつた攝政宮殿下には、前記の三叉路に御差しかゝりになつた。早くも兩人を御覽になり、山吹を止めさせられ、奈良侍従武官長にお尋ねになつた。武官長は、

「これが一太郎やあいの本人でございます。」  
と申上げた。殿下は親子をみそなはされ、

「尋ねて見よ。」とのお言葉があつた。武官長は親子の者にむかひ、  
「殿下の仰せである。向給は幾つか、丈夫であるか。」  
と尋ねた。が、

老母の耳には 聴きとれなかつたので、小野村長が代つてお答へ申し上げた。

攝政宮殿下には御微笑あらせられ、御首肯になつた。老母も一太郎も身に餘る光榮に感激して  
思はずも落涙した。武官長は、

「折角養生せよ。」と言ひそへた。

攝政宮殿下は、母子に御會釋を賜り御發足になつた。老母かめは、

「うるはしい殿下を拜み、もう思ひのこす事はございません。御禮に千ヶ寺詣でに参りませう。」  
と云つて、眼をしばたいた。一太郎は、

「かゝる光榮に浴しましたのも、全く皆様のお蔭であります。」  
と、村長に伴はれて、いそぐと歸村した。

### 軍馬と萩原翰卒

#### 砲兵の苦戦

奉天大會戰の幕は切つて落された。敵の猛將リネウキツチ大將の指揮する第一軍は、其の司令部を康大人山附近に置き、其の陣地の堅固なる事は、文字通り金城鐵壁の觀があつた。何しろその防備工作に殆んど半歳を費したといはれるのであるから、無理もない。我が第一軍司令官黒木大將は、三月二日近衛師團に命じて、唐家屯高地に進撃せよとの命を下した。だが進撃は實に困難だつた。其處で近衛師團長淺田中將は、進撃に先きだち、部下の將校を集めて、

「一たび占領せし地點は、如何なる情況の下にたつとも、全滅に至るまでこれを死守せよ。」と申し渡したのであつた。

月無く、霧深く、四邊は暗愴として、三月二日の夜は深い眠りに陥ちてゐた。左右の連絡を保ちつつ前進することは頗る困難ではあつたが、細心相戒めて沙河の氷上を渡り、午前三時を以て唐家屯部落を占領した。

これより更に兩聯隊は、北方高地に向つて進撃を開始した。三日の拂曉までには第二線の敵陣地を進略して、直ちに本防禦陣地に肉迫した。しかし乍ら、露軍が數ヶ月を費して築き上げた本防禦陣地は、さながら要塞の觀を呈し、おまけに此處には約二個師團の露軍が集中し、機關砲を以て應戦してくるので、到底進むことは出来なかつた。

戦ひ今や酣にして、すでに兩聯隊は豫備隊を使ひ盡して、全部敵陣地の基脚に嚙じりついて天明を待った。

歩兵の突撃は夜明と同時に、益々困難となつて來た。その時歪嶺山、狄々山の我が砲兵は盛んに應戦し、殊に十五珊白砲は、第一線の我が歩兵を曲射し、速射弾は、戦線と旅團司令部との中間道路を搜射し、完全に我が糧食彈藥の補給を遮斷したので、兩聯隊は遂に死地に沈淪して了つた。

### 主なき大砲

この時、近衛輜重兵大隊は、奈良大佐指揮のもとに、猛烈なる銃砲火を肩して機關砲、及び彈藥を運搬することになった。

苦戦、惡戦——味方の砲兵陣地は敵弾のために枯草が燃へ、半面山火事となった。物凄いな音響と共に炸裂する砲弾、白煙が濛々と立昇れば、其處には幾多の勇士が折重なつてバタ／＼と斃されるのだ。

砲列の附近には、もう誰一人無事な兵はゐないのだ。戦死、重傷者の續出である。これでは砲ありといへども使用することは出来ない。この惡戦難戦の中に、輜重兵は銃火をあびながら活動するのだつた。中にも、

萩原輸卒の活躍 は口ざましかつた。

「おー。」

萩原輸卒は、さう叫ぶとバタ／＼駆け出した。其處には主なき一門の砲が、車輪を損じて空し

く打ち捨て、あつたのだ。

「さうだ。こいつを射つてやれ。」

萩原輸卒の脳裡には、堅い自信が閃めいた。もとより砲の操作は知らないのだ。だが、祖國に盡す真心は天に通じたのか、彼は立派にやり遂げて、彈藥を補充して、第一彈を發射した。

「うむ。やつた。やつた。」

萩原輸卒は雀躍りした。前方を見れば白煙濛々たる中に、露軍は算を亂して逃げて行く。

「よし、もう一發、ぶつ放してやるぞ。」

萩原輸卒は狙ひを定めた。途端轟然たる爆音と共に、敵弾が飛び來つた。

「あッ……」

萩原輸卒は不幸、敵弾に見舞はれどつと打ち倒れた。

「うむ……ざ……さん念……」

悲痛のうめき聲……その時、傍らにゐたのは彼の愛馬武藏號である。主人が倒れたのを見ると、彈藥箱をグワ／＼と振りながら、蹶を逆立て、聲高く嘶いたが、やがて主人の身を案ず



るが如く静かにその側に立ちつくした。

擔架に乗せられて 萩原輸卒は、間もなく野戦病院へ送られた。

愛馬は主人に別れるとは知らず、擔架の後から首垂れて、しほくといつて行く。哀れにもいじらしい姿……

萩原輸卒は、此の勇敢なる働きによつて、至上なる光榮たる感状を拜受したのであつた。

### 愛馬「武藏」と邂逅

日露の平和克復 して、春秋こゝに五星霜、萩原輸卒は、今は故郷にかへつてゐた。或る秋の日彼は商用を帯び重き荷も背負つて、廻り峠といふ難所に差しかゝつた。

何處かで蟲が鳴いてゐた。

道傍の萩の花がホロ／＼と散つた。

その時、峠の下の方からドウドウといふ馬を追ふ馬子の聲が聞へて來た。とやがて一頭の駄馬が太い材木を山のやうにつんで、馬子に鞭打たれながら山路を登つて來るのであつた。

動かうともしなかつた。

萩原はハツと思ひ乍ら馬の顔をじつと見た。

「おゝ武藏號だツ。」

つか／＼と傍にかけよつた萩原は、思はず馬の首に抱きついた。思へば奇しき廻り合せである萬里異郷の空、雨の日風の夕、硝煙彈雨の中で、辛苦を共にしたあの武藏號ではないか。

萩原は愛馬の、今はみるかげもない變る姿に、さん／＼と涙をこぼすのだつた。

馬子は、呆氣にとられて見てゐたが、腹立たしさうに、

「お前さん、何をしてゐなさるだ。」と言つた。

「馬方さん、この馬はね、私が戦争に行つた時、連れて行つた馬なんだよ。」

「えッ……戦争に……」  
 「さうなんだよ。久しぶりで會つたが、よく忘れずにゐてくれたよ。どうぞ馬方さん、可愛がつてやつておくんないよ。」  
 「ふーむ。あんたが連れて行つた馬かい……ふーむ。」  
 行手を急ぐ馬子は、手綱をグイと引いた。ドツ、ドツ、ドー、馬は歩み出した。  
 萩原は愛馬の後姿を見て、新しい涙に頬をぬらした。  
 大粒の雨が、ポタリ／＼と落ちて来た。  
 ヒヒヒン……と苦しい嘶きが、次第に遠ざかつて行く。萩原は、それでも雨の中に、じつと立つてゐた。

## 永井喇叭卒

### 首山堡の大激戦

石原聯隊長 は司令官から、夜明けまでには是非とも、首山堡の西方にある九十九高地を占領せよとの命を受けた。時は、明治三十七年八月三十一日。  
 五六日降りつゞいた土砂降りの雨で、道はまるで泥沼だつた。砲臺などは淺瀬に乗りあげた船も同様だつた。さういふ困難な道を、命を受けた石原聯隊長は、腿までズブリ／＼と入る泥沼の中を進軍するのだつた。  
 敵は用捨なく、どん／＼弾丸を浴びせかけてくる。味方の兵は、その皮にバタ／＼倒されて行くのだ。戦友をふり返る暇もなく、屍を踏み越へ踏み越へ進撃、又進撃だ。  
 それを指揮する聯隊長石原大佐の危険はいふまでもない。今も、聯隊長の右手にゐた村山副官が、敵弾にあたつて斃れたばかりだつた。然し、豪膽な聯隊長は、きつと前方の敵を睨みつけた

まゝ、顔色一つ變へなかつた。黙々として突立つてゐる。その時、その重い唇は、破れ鐘のやうな聲によつて開かれた。

「ラツバ卒は居らぬか。突撃ラツバだッ。」

喇叭卒永井芳太郎は、この時左腕に二發、左右の腿に四ヶ所の重傷をうけて、バツタリ倒れたのであつた。

「畜生ッ。」

永井ラツバ卒は倒れ乍ら、齒がみをして口惜しがつた。しかし、この重傷では起つ事は出来さうもない。

「聯隊長殿、ばんさい。」

五六歩先に立つてゐる石原聯隊長の姿を仰ぎながら、必死の聲をふりしほつた。だが、その聲は、それにも増して激しい砲聲にかき消されて、勿論聯隊長の耳には入らなかつた。

「ラツバ卒は居ないか。突撃ラツバだッ。」

石原聯隊長の叫び聲がきこへて來た。

「はいッ。」

鮮血の中に身を伏せてゐた永井ラツバ手は、その聲を聞くと、忽ち勇氣を振り起して起き上らうとした。しかし兩脚の負傷がそれを許さなかつた。

「あゝ残念だ。」

「おゝ、お前はやられてゐるのか。」

聯隊長は始めて氣がついて駈けよつた。

「聯隊長殿、脚をやられました。立つ事が出来ません。」

「うむ。」

「しかし、なかに脚の一本や二本やられたつて、ラツバは吹けます。」

と、いふが早いか、肩にかけたラツバを口にあて、漸死の息をこめて吹き出した。

一曲の「突撃譜」 唳々として、全軍に響き渡る突撃譜！ この壯烈なラツバ卒の行爲を見て、日本男子として感奮しないものがあらうか。

「それ突撃だッ。」

悲壯なラツバの音に勇躍した全軍は、怒濤のやうに九十九高地めがけて殺到した。

「お、進んで行くな。」

永井ラツバ卒は、全身の息を、口一つに集めて吹きつゞけた。けれど滾々と流れ出てやまない鮮血は、次第に氣力を失はせて、やがて遠ざかつて行く大砲の響きと共に、意識も朦朧として行つた。

### 不名譽の捕虜

其から何時間 たつたか、何日たつたか、永井喇叭卒は判らなかつた。

ふと氣がついて見ると、自分は粗末な寢臺の上に横臥させられてゐた。その上全身は繃帯で包まれてゐるのだつた。

「おや、自分は野戰病院へ送られたのかな。」

だが、それにしても四邊の狀況が少し變だつた。そしてよく注意して見ると、そこは敵の野戰病院らしく、軍醫もロシア人らしかつた。

「あつ、俺は捕虜になつたのか。」

永井喇叭卒は、思はず胸をどきんとさせた。

「然し、それにしても少し變だぞ。俺は確かにあの突撃の喇叭を吹いた筈だ。そして味方は進軍した筈だ。とすれば敵に捕はれる筈はない。俺は負傷したので頭が變になつたのかも知れん。いや、そんな馬鹿な……」

その時、赤髯の軍醫が入つて来て、物をも言はず繃帯を取りかへやうとした。

「何をやるのだ。」

永井喇叭卒は怒鳴つた。軍醫はせうら笑つて、お前は捕虜だといふ事を手真似で説明した。

「そうか、それではやつぱり俺は捕虜になつて了つたのか。」

あゝ、何にも知らぬとはいへ、軍人として最も

不名譽な捕虜！ どうして、俺はそんな情ない事になつたのであらう。永井喇叭卒の眼には涙があふれた。

「俺はたとへ捕虜になつたとて、日本軍人だぞ。敵の治療なぞうけるものか。さあ、こんな繃帯

なんぞすつかり外してくれ。死んでもいいのだ。いや、死ぬ方がましだ。」

永井喇叭卒は、ビリ／＼と綱帯を破きはじめた。だが重傷の彼には、思ふやうに手が動かさな  
いのだ。いら／＼するばかりだった。

「蓄生ッ、捕虜なんかなる位なら、一層死んだが増した。」

永井喇叭卒は、絶へず怒鳴りつづけた。

その次の朝——突如！として病院近くに砲聲が聞えた。と、同時に病院内は俄にざわめき出し  
だ。傷病兵たちは再び擔架に乗せられて、何處かに運び出されるのであつた。永井喇叭卒も、大  
勢の手で擔架にのせられた。

「嫌だ。死んでもいいのだ。捕虜になる位なら死なしてくれ。」

永井喇叭卒は、どうしても動かないのだ。危険はいよ／＼急迫してゐる。病院の窓には流れ弾  
丸がバラ／＼飛んで來た。

「ウワァ……………」

ロスケ共は妙な聲をあげて、たう／＼永井喇叭卒を一人おきざりにして逃げ去つて了つた。

やがて、すさまじい突貫の聲が、砲聲に交つて亂れた。永井は、もうちつとしてゐられなくな  
つた。彼は這ふやうにして病院の外へ出て行つた。そして、じつと向ふを見ると、あゝ、烟硝の  
間に高く高く光り

輝く日本の聯隊旗を先頭に、押しよせてくる味方の軍隊——然もその先頭に立つ逞しい軍馬に  
跨がったのは、石原聯隊長だつたではないか。

「おゝ、永井喇叭卒か。よく無事でゐてくれたのう。」

「聯隊長殿……………而目ありません。私は捕虜になつてゐました。」

「いや、それは恥づるに及ばずのぢや。お前のやうな勇士を敵の捕虜にさせたのは、俺の罪なの  
ぢや。だからさう言はれると俺はつらいのだ。」

「何と……………おつしやいます……………」

「いや、それは三日前の事ぢやよ。例の九十九高地の突撃は、俺の聯隊は殆んど全滅でうとう  
たう退却を餘儀はくさせられたのぢよ。何しろ千百に餘る兵が二三百になつたのぢやから……………  
その爲に一時引揚げねばならなかつたのぢや。すると、山の上にあつた。敵が追撃して來てなあつ

は、、、、」  
「あ、それで判りました。その時は捕虜になつたのです。」  
「さうぢや、俺はそれで、再び今日、こゝを攻撃したんだ。若し今度も、この前の如く失敗したら、俺は腹を切つて司令官や戦死者の諸君にお詫びする覚悟であつた……。」  
と、この時潮のやうな萬歳の聲がわき上つた。石原大佐は満足さうに、自分も帽子を高くふつた。

永井喇叭卒も莞爾と笑つて、  
「大日本帝國萬歳。」と叫んだ。

### 召 集 令

#### 貧しい鐵道工夫

富士の裾野の鐵道工事 に働いてゐる工夫達の中に、青木友吉と呼ぶ若い工夫があつた。數年前

まだ故郷の富士根村に住んでゐた頃、両親にも死なれ妻にも死別して、彼の手には生れて四ヶ月しかたゝぬ嬰兒が残されてゐたのであつた。

友吉は、世に頼る者もない貧しさに、食を求めて、今は線路工夫となつてゐた。友吉は嬰兒を抱き乍ら、工事場に通つた。嬰兒はミルクを口に含ませ、半纏に包んだまゝ草むらの中に寝かせて置いた。

仕事中に泣出されても、断けて行つて抱いてやる事も出来ない。そんな事をすれば親方に怒鳴りつけられるのだつた。

「友公、氣の毒だなあ。」

仕事半ばに、不覺の涙にくれてゐる友吉に、かういつて言葉をかけてくれるのは、片眼の清公だけだつた。

もう一人、友吉に同情を寄せてゐる女があつた。それは歌子といふ親方の娘だつた。歌子は村の有力者の息子、伏見健之助のところへ嫁ぐやうに、父が婚約を結んであつたのだが、彼女は氣の毒な友吉を見捨て行く氣にはなれなかつた。

或夜、伏見健之助が歌子の家を訪れた。  
日露戦争で、愈々、

召集令が来たのです。歌子さんのお話は、是非とも出征前に決めて頂きたいのです……」  
歌子の父は困った。

「娘は仲々の我儘者でして……しかし、きつと貴方に差上げるやうに致しますから。」

と、苦しうに言つた。伏見は歌子が友吉に同情してゐることはよく知つてゐた。然し、今の親方の言葉に安心して歸つて行つた。

その夜は月の美しい晩だつた。

青木友吉は、外に出て一枚の號外を買つて読んで見た。號外には静岡の聯隊にも動員令が下つてゐることを知らせてあつた。青木はそれを読んで嘆息をもらした。

彼は静岡第三十四聯隊の豫備兵であつた。帝國の軍人として華々しく出征することは、本懐だつた。けれども自分が召集されたならば、東西も知らぬ頭はない子はどうなるであらう。さう考へると彼は吐息をもらさずにはゐられなかつた。

彼は青い月の光を浴びながら、纏る乳房を持たぬ幼い我が子を眺めて、悲嘆の涙にくれた。その時、歌子が訪れて来た。そして號外を覗き見ながら、

「召集されたら困りますわぬ。」

と、同情しつゝ言つた。

「召集されて戦地へ行くのは本懐ですが、この子のことを思ふと、どうしてよいか判らなくなり  
ます。」

「私が、その赤ちゃんのお母さんになつて上げませう。」

だが、歌子と伏見との結婚談——それを思ふと悲しかつた。

「貴方のお心はうれしく思ひますが、親方は許してくれませう。」

さういつて暗然とした友吉の面には月に涙が光つてゐた。

子を捨てる親

日露の戦雲は 日毎に急を告げてゐる。そして遂々青木友吉の所へも召集令が届けられた。

豫て覺悟はしてゐた友吉ではあつたが、召集令を手にした時は、流石に心は暗くなつてくるのであつた。

「俺は出征して行くのが、決して厭いはしくはない。しかし、後に残るこの子のことを考へると……心がぶつてくるのだ。」

離れ難い、何物にもかへられぬ親子の情に、友吉は熱い涙を呑むのであつた。

一命を御國に捧げる決心で、彼は家財道具を全部賣り拂つて、出發準備をした。だがこの幼い子供の處置にどうしたらよいであらう……

外には月が青く、遠くの方からさゞめきの聲が聞えて來た。たぶん伏見の家に村人が集まつて酒宴でもしてゐるのであらう。

涙が友吉の眼から滲み出た。友吉は思案の末に、遂に頑固な我が子を捨てる決心をしたのである。彼は子を抱いて起ち上つた。懷中には、たつた今書いた

妻子に添へる手紙 がしのばされてゐるのだ。

子供を捨てるには、あまりに外は明るい月の夜であつた。友吉は、何も知らずやく／＼眠る我が

が子の寝顔に、又深い溜息をもらし乍ら、首垂れて了つた。

夜の鳥が、何處かで血を吐くやうに鳴いた。

ふと、その時背後に人の足音がした。友吉はハツとして樹かげに身をひそめた。若い女がその前を通り過ぎて行つた。

「あッ……」

友吉は危ふく呼びとめやうとして、ぐつと喉まで出かゝつた聲を殺した。

「歌子さんだ。確かに俺の家へ訪ねて行くのだ……親方が物のわかつた親切な人なら……」

の子は、あの人に頼めるのだけれど……」

歌子の後姿を見送つて、友吉は涙を手で拭つた。

「許しておくれ、坊や。」

友吉は、幾度か、我が子の顔に顔をつすつけて、聲を忍んですゝり上げるのだつた。

## 出征の日



貧乏はしてゐても 青木友吉は、帝國軍人としての精神を忘れてはゐなかつた。彼は軍服に身を固め、雄々しい姿で、御殿場へ駈けつけた。停車場は歡呼の聲に湧き返へつてゐた。この日は丁度、青木と一緒に伏見健之助も静岡の聯隊へ出發することになつてゐた。

人々は手に手に日の丸の小旗を振りかざして、そしてその中に、伏見健之助の姿が見へた。

伏見の華々しい出征に引かへて、自分は何といふ淋しい門出であらう。昨夜捨てた我が子の泣聲が、まだ耳に残つてゐる。友吉は待ち合室の隅に小さくなつてゐた。するこ、

「友公、友公。」

と、呼ぶ聲がきこへた。ハツとして起ち上ると、群衆を掻き分けるやうにして、親方がやつて來たのである。見ると親方は、昨夜捨てた我が子を抱いてゐるではないか。しかもその幼い子の手に、小さい

日の丸の旗 が握られてゐるではないか。そしてその後から歌子の顔も見へてゐた。

「友公……友公は何處にゐる。」

「おツ……親方。」

友吉は叫びながら親方の方へ駈けよつた。

「お、友公……俺はお前の見送りに來たんだぞ。この子を見てやつてくれ。お前を見送る日の丸の旗を持つてゐる。この子は俺が立派に育てゝやるから、心配せんで戦地に行つたら手柄を立てゝくれ。」

「親方どうもすみません。」

「いや、友公、俺こそお前に許して貰はねばならねえのだ。俺は今日までお前に對して、あまり無情すぎた。だが昨夜俺は伏見さんのお祝ひに呼ばれて行つた歸る道で、この子を拾つたんだ。そして、この子の懐中から出た手紙を讀んで泣かされた。今までのことは、どうか、恨まねえでくれ。」

「いえ、親方……有難う存じます。」

「友公……歌はお前が凱旋するまで、何處へも嫁にやらねえからな。」

「御恩は決して忘れや致しません。」

「友公、この子を抱いてやれ。」

友吉は、親方の手から我が子を抱きとつた。父に抱かれた子は、嬉しいのか、父親の顔を見てニコ／＼と笑ふ。友吉は又涙を誘はれた。と、この時、どや／＼と五六人の若者が待合室に入つて来た。

「友公、貴様の見送りに来たんだ。」

それは同じ工事場で働く工夫達であつた。片眼の清公は昂奮して、

「今朝は貴様が出征して行く日だと思つたから、仕事を休んでやつて来たんだ。」

「有難う。いろ／＼お世話になつたな。」

「なあに……そんなことはあるものか。」

と、言つて片眼の清公は、一緒に来た仲間の工夫達に向つて、

「さあ、ある丈の錢を出しな、

友公への錢別だ」と言つて帽子を出した。

「よし来た。」

「そう、あり丈けだよ。」

氣の早い若者達は、威勢よくポケットや腹掛から、錢を掬い上げて、一錢残らず清公の帽子に投げこんだ。

この有様を見た親方は、黙つたまま清公の帽子の中へ十圓紙幣五枚を投げ入れた。片眼清公は吃驚して、

「親方、これは本物ですかい……」

「この野郎、殴るぜ。」

清公は龜のやうに首をちぢめた。

### 眠れ我が子よ

南山の占領 された日は、明治三十七年五月二十五日である。戦は未曾有の激戦であつた。

この激戦の日、ラツパ卒として戦線の中にゐた伏見健之助はしきりに進軍ラツパを吹奏してゐたが、突如敵弾は飛んで来て彼を斃した。それを眼のあたり見てゐたのは青木友吉であつた。

「伏見君、しつかりしろ。傷は浅いぞ。」

友吉は、直ぐ様断けよつて、しつかりと抱起した。

「おゝ青木君か、すまない……………」

「何を言ふのだ。」

「青木君許してくれ……………昔のことを……………」

「許すも許さないもない。君と僕とは砲弾の中をくりぬけて来た戦友ぢやないか。」

「有難う。よく言つてくれた。忘れない……………それから歌子さんによろして傳へてくれ給へ。」

弾丸は急所を貫いてゐたのだ。伏見は息を引取らうとした。

「青木君ラツバ……………ラツバ……………」

「さうだ。今は進軍中だ。」

さう叫ぶと、友吉は伏見のさしのべたラツバを受けて、伏見に代つて進軍ラツバを吹き鳴らした。伏見は友吉に抱かれたまゝたうとう死んでしまつた。けれども友吉は何時までもラツバを吹きつづけてゐた。しかし、それもやがて聲も微になり、ハタとやんで終つた。

その日の黄昏頃、伏見健之助と、青木友吉とが重なり合つて、

弾丸に胸を貫かれ てゐるのを、戦友によつて発見された。

満洲の野では、かうした悲壯な戦死のあつた頃、遠く日本の富士の山麓の村では、青木の残して行つた幼子が、歌子の背に負はれてスヤ／＼と眠つてゐた。

ねんねんころ／＼ねんねしな

坊やはよい子だねんねしな

歌子の眼からは涙がほろり／＼と落ちた。

蟲が知らすのか、歌子は青木の身の上がしきりに案じられてならないのであつた。

### 乃木將軍の血涙

#### 全滅また全滅

一ヶ月か二ヶ月で陥落すると思はれた旅順口は、八月に入つても陥落しなかつた。しかも一晩のうちに三千の兵士が、たつた五十人になつてしまつたやうな激戦がつゞき、明治三十七年八月

末の第一回總攻撃には、全滅した聯隊すら少なかつた。

「俺の悴を生かして返せ。」

「乃木の馬鹿ッ、そんな無駄な戦死をなぜさせるのだ。切腹して罪を國民に謝せ。」

さういふ激しい手紙が、日に日に將軍の卓上へ送りつけられた。しかしその頃の將軍の苦心を國民の誰もが知らなかつたのだ。乃木將軍が司令官として到着した時は、南山の激戦で半年分の砲彈を撃ちつくしてしまつて、今は大砲の彈丸が足らなかつたのである。製造が間に合なかつたのだ。彈丸がなくなつて、どうして戦争が出来やうぞ！

「國民には、この苦心が判らぬのか。」

「蓄生ッ、戦死だ、戦死だ。」

司令部に詰めた參謀將校達は、地剛駄踏んで叫んだ。しかし將軍はどんな惡罵にも、どんな厳しい手紙にも、一言も言はなかつた。

「俺たち親子三人が戦死すれば、いく分か申譯も立つのぢや。」

かういつて、ちつと唇を噛んでゐた。

夏が過ぎて秋が来た。それも東の間、滿洲の厳しい冬の寒さが襲ふて来た。戰場は氷雪にとざされてしまつた。第三軍司令部は十一月になると柳樹房といふ小部落にまで進んだ。

「第一師團全滅。」「第九師團全滅。」

来る報告々々、一つとして日本軍に有利なものはない。

「うむ。」乃木將軍は、支那人家屋の汚い部屋の中にたつた一人椅子によりかゝつて、參謀達の報告を聞いたが、その度びに眼には涙が滲んでゐた。

そして參謀達が立去ると、將軍は冷たい部屋の隅に敷いたアンペラの上へごろりと寝て、頭から外套をすつほりとかぶるのであつた。外では、はげしい砲聲や、銃聲が絶へ間なくとどろいてゐた。

### 三人枕を並べる覺悟

將軍の次男保典少尉は、兄の勝典中尉が戦死したので、若もの事があつては將軍に氣の毒であるといふので、友安旅團長は師團の傳令使といふ比較的安全なところへ務めさせることにした。し

かし、これを耳にした保典少尉は不平でたまらなかつた。

「名譽多き野戦隊小隊長より、殆んど非戦闘員に等しき職に轉することに候間、直接敵に接して、兄上様の仇を報いんこともなし得ず、且つは何の特別の技能を有せざる私が選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位置に赴くは、他同期生に對し心苦しく云々……或はこの御話の儀變更相成らざるや、一寸御伺い申上候——以下略」

保典少尉が、かういふ手紙を軍司令官である父將軍に出したのは、それから間もなくであつた流石に我が子ぢや 將軍はこう呟いて、程なく保典少尉は旅團長安満少將の副官に交送されたのであつた。

ごう、ごうツといふ寒風は、天地をゆるがして、おんおんたる砲聲、銃聲は朝から夜に入つても絶へなかつた。

「俺と保典とが戦死すれば、陛下に對し奉つても、國民へもお詫びができる。」

將軍は灯もつけない部屋の中で、たつた一人になると、何時もかう呟いた。と、その時、「閣下。」と部屋の外に立つて呼びかけたのは白井中佐であつた。

「誰です。」暗い部屋の中から將軍が言つた。

「白井であります。」

「うむ、何か用事が出来ましたか。」

「はッ、戦況を御報告に上りました。」

「さうか、一寸待て。」

將軍はマツチをすつて、机の上にある一本の蠟燭に灯を點けた。やつれたこの老將軍の姿は淋しく浮き上つた。白井中佐は思はず頭をたれた。

「聞かう。中佐何處の戦況ぢや。」

「二百三高地であります。」

「ほう、どんな風ぢや。」

「また失敗といふ電話が只今参りました。」

「うむ、戦死者はどれ位あつたか……」

「は……まだ判らないのであります……それから閣下、その……」

こゝまでいふと中佐は、きゆつと、

唇を噛みしめた。その臉には、どうしたのが涙が光つてゐた。

「中佐……どうしたのぢや。」

「閣下……閣下……御息の保典少尉は、たつた今三百三高地で名譽の戦死をなさいました。」

「おゝ保典が……死んでくれましたか。」

「はい……少尉は塹壕の中を走つて、傳達のため進んでゐる時、額に敵弾を受け即死いたしましたさうでございます。」

もう、これで二人切りの令息を戦死させてしまつたのである。將軍の心中を思ふと、白井中佐は泣かすにはゐられなかつた。耐へても、言葉は咽喉に詰つてしまつた。將軍はじつと身動きもせず、この報告を聞いてゐたが、やがて靜かに中佐の方へ向けて、

「さうか。」かう、言つたかと思ふと、ふツと蠟燭の灯を消してしまつた。

中佐は、暗いところに立つたまゝ、軍服の袖で涙をふいた。チリチリ……電話の鈴はけたくましく鳴つた。中佐は足音のせねやう、そつと部屋を出て行つた。それは明治三十七年十一

月二十八日の夜のことであつた。

「保典さん、よく死んでくれました。これで多くの將士を戦死させた俺もいさゝか申譯が立つた。残るのはこの父希典だけぢや。追つて行くぞ。親子三人、皇國のために枕を並べる。こんなうれしい事が又とあらうか。」

將軍は暗い部屋の中で机にもたれてかう呟いたのである。それは何と悲壯な覺悟であつたらう

### 死所を求める奉天戰

第三軍は 明治三十八年一月一日に旅順を陥落させるとすぐに、奉天の戦ひに進んだのである。

乃木將軍はこの戦ひでは、いつも砲彈の落下する所へ馬を進めた。

「將軍は戦死なされるおつもりだぞ。」

「さうだ。そんな事があつてはならね。」

幕僚達は氣が氣ではなかつた。

ど、ど、どうん！ すぐ間近く敵弾は破烈した。

「閣下御危うございます。」

「どうか、後方の司令部から御命令を下して下さい。」

「いや、俺は砲彈の降る所に立たんでは指揮はでけんおや。捨ておいてくれ給へ。」

何をいつても將軍はきかなかつた。陛下の御爲め、國民への申譯のために、將軍は死場所を探してゐるのだ。砂や小石は風と共に將軍の體に吹きつける。

「閣下火を焚きますから、どうぞおあたり下さい。」

高粱の殻を拾ひ 集めて、火を焚きつけて將軍を誘つた。

「ありがたう。しかし俺一人火にあたるにはでけん。あれを見よ。兵士達は寒風の中に戦つてゐるではないか。」

將軍は鞭をあげて、味方の戦線を指さした。

「はッ………では外套だけはお召になつて下さい。」

「いや、俺は寒くない。」

かういつたかと思ふと將軍は、ひらりと愛馬に打ち跨つて手綱をきゆつと引しめ、更に前方の

戦線へ出やうとするのだ。驚いたのは幕僚達で、ばら／＼と將軍の前に立塞がつて大手をひろげた。

「閣下、何處へいらつしやるのです。」

「どうぞ、おとどまり下さい。」

「危険であります。」と聲を揃へて言つた。

「いや、俺は戦線を見廻はるのちや。放してくれ給へ。」

今日明日で奉天の戦ひは終る。さうしたら、旅順で、

死におくれた身を どこで死所を求めることが出来やう。

「閣下………それはなりません。」

幕僚達は、何といつても將軍をやらうとしなかつた。そして、かうしてまで死に場所を求める將軍の心中を思ふと、一齊に涙ぐんでうなだれてしまつた。

「あゝ、まだ生きてゐなければならぬのか。國民に乃木は申譯がない。多くの兵を旅順で殺したのは俺の罪ぢや。」

將軍は唇をかんで、しよんぼりと馬から降り立つた。戦ひにやつれた老將軍の頬には、絹糸のやうな涙が光つた。  
將軍を仰ぎ見た多くの幕僚たちも、聲をしのんで男泣きに泣いたのであつた。

### 砲煙彈雨を駈け抜けて

#### 戦場の兄弟

敵が死守する遼陽城を、一擧にして衝かんと明治三十七年八月二十六日、我が日本軍は東の空の白みそめた曉から、猛烈な攻撃を開始した。

「安次、愈々命を捨てる時が来たぞ。俺はこの一戦で華々しく戦死するかも知れぬ。然しお前は卑怯な真似はしちやいけないが、助かるものなら助かつて凱旋してくれよ。」

「兄さん、何を言ふのです。兄さんが戦死して、弟の私が生きて歸れませうか。兄さんは長男です。兄さんは兩親や弟や妹達の將來を見てやる義務があるのぢありませんか。勇ましく戦

ふのは勿論ですが、助かるものなら兄さんこそ助かつて下さい。その代り私が花々しく戦死をいたませう。」

「何をいふのだ。この世に先に生れたのは俺だぞ。だから俺が死ぬのは當然だ。お前こそ生残れ今はもうぐすくいつてゐる時ぢやない。さあ一緒に進軍しやう。遅れると帝國軍人の恥だ。」

「兄さん。」

「何も言ふな。さあ進め。」

兄は松本良一、弟は安次、東京市麹町區平河町の雜貨商の兄弟で、共に近衛聯隊の兵卒である。

敵もさるもの、我が軍の攻撃に對し猛烈なる應戦を開始した。肉を引裂く彈丸の唸り、大地も裂けるばかりの砲彈の破裂……時のたつにつれ戦ひは益々猛烈になつて來た。敵も味方も、人馬も、續々と倒れ、

肉は飛び血は流れて、滿洲の野は血の海かとはかり……松本良一、安次の兄弟は互ひに勵まし合ひながら進軍したが、何時か離れくとなつてゐた。兄は弟を安じながら砲煙彈雨の中を勇



ましく活躍してゐた。と、その時一人の戦友が良一の側に駆けて来た。

「松本、安次君がやられたぞ。」

「えッ、弟が。」

「行つてやれ、行つて傷の手當をしてやれよ。」

「いや……俺は行かぬ。弟は御國のために死んだのだ……」

兄弟の情！ 弟のところに駆けつけて、せめて慰めの言葉の一つもかけてやりたいが、厳しい軍律の中ではそれも出来ぬ。良一はそのまゝ進軍せんとした時、

「松本、待て。」

と呼びかけたのは中隊長であつた。

「何ぞ見てやらぬ。例へ助からぬにしても、綱帯位はしてやれ。お前の弟ではないか。」

「はッ……」

「俺はお前に命令するのだぞ。お前も弟も帝國の軍人だ。天皇陛下の軍人だ。見殺しにしては不忠だぞ。」

「有難うございます。」  
「行けッ。」

「はッ。」

良一は矢庭に駆け出した。そして、算を亂して倒れてゐる戦死者の間を探し廻つた末、やうやく弟の姿を見出した。

「安次、しつかりせい。傷は浅いぞ。」

「おう……兄さん。」

「そんな事で御國に御奉公出来るか、しつかりせい。」

剛ましの言葉に安次は、むつくり起き上つた。

「兄さん、濟みません。」

「おう、立てるか……しめた。お前の傷は浅いぞ。」

仇は必ず討ちます 安次の傷は案外浅かつた。良一は弟の片手を肩に乗せ乍ら、  
「安次、遼陽を占領するまでは、死んではならぬぞ。」と剛ましました。

「兄さん、決して死なぬ。大丈夫だ。」  
「うむ、よく言つた。さて行かう。」  
その時、ピュツ……と飛んで来た敵弾は、「呀っ」といふ間に、良一の胸を射貫いた。良一はバツタリ倒れた。

「兄さん……やられましたね……だが大丈夫、傷は浅いですぞ。」

「駄目だ。水……水……。」

安次は、水筒の水を兄の口に移した。

「有難う……安次、俺にかまはず進んでくれ。俺はここで戦死するのは本望だ。」

「でも……兄さんを見捨ては行けません。」

「何を言ふ。助からぬ俺を看護する間に、何せ一人でも多く敵を倒さぬか。」

「それではせめて繃帯でもしませうか。」

「馬鹿な、死んで行く人間に繃帯はいらぬ。早く行け。」

「は……はい……それでは兄さん、兄さんの仇はきつと討ちます。」

安次は立ち上つた。この世の別れだと思へばホロリと涙が頬を流れた。  
「では兄さん行きます。」  
「待て安次、俺の弾丸を持つて行け……俺の分まで働いてくれ。」  
安次は、急いで兄の弾丸を身につけた。折から夕闇について聞へて来るのは、勇ましい進軍ラッパの音だつた。

### 花と共に背囊

遼陽城は遂に不落 かくして二十六日は空しく暮れた。

二十七日は、朝から大雨が沛然と降つた。雨の中を味方の兵士は、變り果てた戦友の死骸を黙々と運んだ。やがて死骸が山と積まると火がつけられた。線香も手向けの花一本だにない戦場での火葬が営まれた。

今しも火葬場に運ばれて来た擔架の主、それを覗き見たのは山本安次であつた。

「おう兄さん。」

我を忘れて安次は死骸に抱きついた。血のにじんだ軍服姿のまゝ、良一は無惨な最後を遂げてゐたのであつた。

「兄さん。弟です……安次です。」

然し兄の靈魂は再び戻らう筈もなかつた。氷のやうに冷たくなつた兄の死骸を抱いて、安次はたゞ涙ぐむばかりだつた。昨日までは

露營の夢も 枕をならべて見た二人であつた。故郷の母への便りにも二人は名前をならべて書いた。それが今は、兄は祖國のために名譽の戦死を遂げたのである。

だが安次は、歎きの中にも奮然として叫んだ。

「兄は御國のために死んだのだ。この上はたゞ、兄の仇とも思つて、露助と戦はねばならぬ。」

そして、その翌日、安次は中隊長に向つて、

「お願いがあります。戦死した兄に、遼陽城の陥落を見せてやりたいと思ひますから、兄の骨を背負つて行くことをお許し下さい。」と願ひ出た。

「よろしい、許してやるぞ。兄もさぞかし喜ぶだらう。」

中隊長の眼には、この

美しい兄弟の情合が、どんなに美しく涙ぐましく映つたらう。

安次は、中隊長の許しを得ると、早速火葬場に行つて、兄を骨を拾つた。それを大切さうに布に包み、自分の背囊の中を入れたのだつた。それを見てゐた中隊長は、何處から手折つて来てか一本の夏草の花を手にして来て、

「その背囊に、これも入れてやれ。」

と言つて、安次の手に渡した。安次は中隊長の優しい心にたゞ咽び泣くばかりであつた。

### 天地もゆらぐ萬歳の聲

時は来た遼陽を落せ 何處からともなく全軍に響き渡る聲！

士卒の血は躍り立つた。

九月二日の日夜頃——砲々と響き渡る進軍の喇叭の音が響き渡つた。

「兄さん、いよいよ時が来ました。兄さんの仇を報する時が来ました。私は體のつゞかきり戦

ひます。どうか、私を見護つて立派な働きをさせて下さい。」

安次は、背囊の中の白骨に向つてかういつた。安次の傷は既に癒えてゐた。彼の胸には、兄の仇を報ひ祖國の名を輝かす忠魂義烈が高鳴つてゐた。

今こそ、兄と二人の働きをする時だ。一步一刻を遅れても、兄の靈に對して申譯がない。

銃を構へた安次は、砲煙彈雨の中をくぐりぬけ、くぐりぬけ、誰にも遅れじ劣らじと、恨みは深き遼陽城目がけて、突進又突進した。

總攻撃の夜襲は見事に成功した。

九月三日の夜更けになつて、さしもの敵軍も遼陽城を支へることが出来なくなつた。

突如として、火の手は遼陽城の眞只中からあがつた。敵は自ら城に火を放つて、後陣さして退却をはじめたのである。

「突撃！ 突撃！」

味方の勇氣は火のやうに燃へ上つた。怒濤のやうな歡聲と共に敵を追つた。烈しい衝突は闇の中で演ぜられた。敵は算を亂してバタ／＼倒れた。

「占領。」「占領。」

味方は先を争つて城内に突進して行つた。かくして遼陽城はまったく我が軍の手に歸したのである。天高くへんぼんとして、日章旗はひるがへつた。曉闇を破つて、天も破れるばかりの歡呼の聲に、滿洲の野にどよめいた。

「萬歳、萬歳………天皇陛下萬歳。」

兵士達は銃を振り、帽子を振り狂喜亂舞した。ここかしこに戦友達は抱き合つたまゝ、嬉し泣きに泣く姿！ その中にあつて安次は靜かに背囊を下した。

「兄さん、遼陽は落ちました。我が軍は大勝利です。喜んで下さい。」

兄の白骨を抱いて、安次は嬉し泣きに泣いた。遼陽城頭に戦勝ラツパが高く鳴り渡ると、夏の晨はほのぼのと明けそめて行くのであつた。

# 鬼大尉の切腹

## 九月二日の拂曉戦

下弦の月は既に落ちて 人影もまだ定かならぬ、九月二日の拂曉、日露の激戦は愈々酣に、此處遼陽の總攻撃の日は来た。

この日、遼陽停車場占領の任務を受けた歩兵大尉那谷清太郎は、一團の健兒を率いて、鐵道線路に沿ふて急進した。

「進め、一氣に陥せッ。」

劍をふるつて陣頭に立つた那谷大尉は、朝霧を破つて命令した。早くも見てとつた敵兵は、鐵道線路を肩當りに、豆を煎る如き銃丸を浴びせかけた。一人、二人、味方は斃れた。

「おのれ露助。」

「それ、突つこめ。」

潮とばかりに、鐵道線路をとび越えた。と、またしても前進を遮る鐵條網。何に萎ッ！ 雨と注ぐ彈丸をもともせず、先頭の一隊は、目にもとまらぬ早業で、鐵條網を破壊した。

「それッ、進め、敵に息を吐かせるな。」

味方の屍を乗り越へ踏み越へ、むらくとばかりに敵壘近くに押寄せた。距離も僅かに三十メートル、今こそ！

「突滅。」

天地を轟かす那谷大尉の命令。切先揃へた我が兵は、ワツとばかりに

敵壘目がけて 雪崩れこんだ。流石の敵兵も、この物凄い突撃に浮腰立つてさつと退いた。

「それッ、敵は退くぞ。此の機を移さず全滅しろ。」

那谷大尉は軍刀を稻妻の如く閃めかして、

「進め、進め」と、先を争つて逃げる敵を追ひまくるのであつた。この時突然、

「あッ、しまつた。」

只ならぬ大尉の叫びが、兵士達を驚かした。そして大尉の姿が消へた。

「おう、大尉殿がやられたぞ。」

この勇敢なる上官を殺しては、戦友に申譯が立たぬ。従卒武田一等兵は血眼で大尉の姿をさがしたが、墨々と斃れた屍のあたりには大尉の影は見えない。

「大尉殿、大尉殿。」

尙も探し求めて進んだ。と、目前に悪魔の口のやうな恐ろしい狼狽が、敵こそ來れと待つてはないか。

「あッ、さては。」

従卒はその口に駈けよつた。そして、

「大尉殿、那谷大尉殿。」

従卒は聲を限りに呼びつゞけるのであつた。

卑怯極まる露兵

勇敢なる那谷大尉 はまさしく、その狼狽に落ちたのであつた。しかもその窶には卑怯極まる露

兵が、先の鋭く尖つた杭を隙間なく樹て、あつた。何で耐まらう、大尉は杭に腰を貫かれ、窶の底に叩きつけられた。

「無念ッ。」

と一言、暫らく立つ事も出来なかつた。けれど氣丈な大尉は、鮮血迸る傷口を確かり押へてうむとばかりに立ち上つた。そして狼狽から這ひ出さうとしたが、一丈もある窶から、どうして負傷の身で出られやう。

「畜生ッ、敵を眼前にして、窶の中で死ぬるかッ。」

無念の齒嚙も物凄く、きつと上を睨んだ時、

「那谷大尉殿。」と従卒武田一等卒の顔が覗いたのである。

「おう……武田か……此處だ、此處だ。早く上げてくれ。露助奴こんな穴をこしらへやがつて」

「待つて下さい。直ぐです。」

「さあ、掘まつて下さい。」

大尉は銃をしつかり握んだ。

「早く引つばつてくれ。」

大尉は外へ出ることが出来た。武田一等卒は早くも大尉の負傷を見て、顔色を変えた。

「大尉殿、大變な負傷です。」從卒は聲をふるはせた。

「なに、かすり傷だ。さあ、突撃するんだ。一刻も争ふ場合だぞ。」

聲は元氣だ。軍刀を振かざし、

「進め、進め。」

だが、心は幾ら焦つても、深傷に足の自由が利かなかつた。

「大尉殿、無理です。退却して下さい。」

「馬鹿ツ、これ位の傷で退却できるか。」

「けれど、大尉殿。あなたは大切な體です。お願ひします。どうぞ退却して下さい。」

幾萬の敵も恐れぬ勇敢な從卒も、涙を流して願ふのであつた。その聲は悲痛だ。だが大尉はきかぬ。

「黙れツ、部下を見殺しに出来るか。卑怯者になれといふのか。馬鹿奴、さあ進むのだ。俺は何處までも進むぞ。日本軍人は進むことより知らないのだ。」

と、二三步前に進み出たが、またばつたり倒れる。

「あッ………危い。」

「えッッ。進め、進め、全滅しろ。」

軍刀を杖に立ち上つた大尉の姿は、血にまみれ、繪にも筆にも盡せない物凄さがあつた。

### 苦戦・血路を開け

逆襲 かくする内に加勢を得た敵軍は、捲土重來の勢ひで逆襲をして來た。

我が軍がいかに勇敢であるとはいえ、目に餘る大軍に、無勢の味方は忽ち敵の包圍に落ちてしまった。雹の如き一斉射撃を浴びせられた。悲痛な叫びは、其處此處に起り、戦友は將棋倒しになつて、残るは僅かに數名になつてしまつた。

その數名が命とたのむ彈丸さへ、今は盡きはてた。

「弾丸をくれ。弾丸をくれ。」

あゝ、これ程悲しい叫びがあらうか。たゞ一人の敵さへ射つことが出来ず、自分のみすく敵弾の的にならねばならぬのだ。

「弾丸をくれ。せめてもう一人殺してやりたい……それさへないならば……」

と、重なり合つた戦死者の中から、

「弾丸……弾丸をやるぞ。」と細い聲がした。

「おゝ弾丸があるか。」

「取つてくれ、俺はもう手がきかぬ。此の弾丸で俺の仇を討つてくれ。」

「よし、今討つてやるぞ。死なずに待つてゐろ。」

しかし、その弾丸も僅かしかないのだ。忽ち味方の銃聲は止んだ。そこへ、

敵は肉迫して来た。僅に残る味方を、轟殺にしやうと攻め立てるのであつた。

せめて、一方の血路を開いて、兵卒だけは落してやりたい。

「獨立の行動をとれ。血路を開いて退却せよ。」

うとはしない。

「早くせぬか、愚圖々々してゐると犬死だぞ。」

大尉があせつて聲を嘶ましても、一人も答へる者もない。兵士たちの顔には、決死の色がまだ

くくと浮んでゐるのであつた。

「何ぞ命令に従はぬか。」

大尉は三度叫んだ。

「大尉殿を見殺しにして、我々が退却出来ますか。」

兵士は異口同音に叫んだ。

「馬鹿を云へ、俺はどうせ助からぬのだ。お前達は早く退却して、本隊に歸れ。死ぬばかりが忠

義ではないぞ。」

「たとへ退却しても、本隊に歸りつくまでには、敵弾に倒されるにきまつてゐます。背後から討

たれたくはありません。」



「どうしても退却せぬか。」  
「退却しません。」

一軍全滅

那谷大尉は、どつかと大地に座つた。

「さうか、どうしても退却しないのか……」

大尉にも、もうこの上部下に退却を強ひる勇氣はなかつたのだ。

「判つた。皆よく言つてくれた。それでこそ、日本軍人だ。いさぎよく死ね。」

そして、心靜かに皇國の萬歳を祈つた。

空を眺むれば、朝陽はほのくくと昇りはじめてゐる。

「お……」

大尉の双眼に涙が浮んだ。衆寡敵せず、遂に敗れて此處に死する、勇者が最後の涙である。

兵卒一同は固唾をのんで、大尉の死の床を見守つた。

「先へ死ぬぞ。」

従容として大尉は胸のぼたんを外した。

「お心靜かに……」

最後の名残り、將士は互ひは顔見合せた。

「天皇陛下萬歳。」

聲の下から、ぐさりと軍刀を腹に突き立てた。

血潮は花と散つた。みんな首をたれて、勇士の最後を見送つた。

「うむ……」

ギリ／＼と軍刀をかき廻す……

「それ、大尉を手本にせよ。」

「死にそこねて、敵に笑はれるな。」

兵卒たちは、我劣らずと胸掻きひろげた。

「天皇陛下萬歳。」

「大日本帝國萬歲。」

さしも激しい銃聲も、しばらく鳴りをひそめた。

そして、萬歳の聲と共に、勇士たちは見事に自決したのである。

一軍全滅、あゝ雄々しくも、亦悲壯な極みではないか。時に明治三十八年九月二日の午前六時。

### 乃木將軍と田村二等卒

#### 決死の白禪隊

胡沙吹く風 は骨を刺し、劍の霜は牙へ渡る十一月二十五日、我が軍は旅順の背面にあたる。白山を奪取すべく、之が特別任務に當らしめるために、第七、第九、第一、第十一の各師團から一騎當千の精英を選抜して決死隊を編成した。

隊員は各大隊から四十七人づゝをとり、其數總て二千人。いづれも肩から白木綿襪をかけさせたので、それをそのまま白禪隊と名づけた。

突撃の日と定められた二十六日、各隊の白禪隊は松樹山の麓の集合地を集つて、ここで夜になるを待つこととなつた。

やがて夜、午後八時となつた。忽ち命令は下つた。

「突撃！」

全軍は疾風の如く突進した。工兵は竹竿に火薬を付けて鐵條網を破壊する。歩兵は蕪地に進んで行く。かくて一度敵の胸壁内に躍り入つたが、敵は機關銃を亂射して、バタバタ味方の兵を撃ち斃したので、もうこれ以上進むことは出来なかつた。そこで一時間の休戦命令が下つた。

この時、第十一師團司令部は、松樹山の左翼に前進し、土屋、三浦の兩將軍は師團司令部を率ゐて、第一線に出て指揮をしてゐたのである。と、この師團司令部の前へ、

白禪をかけた兵が バタバタと駆けて來たが、司令部の將校を見ると、驚いて飛鳥の如く逃げ出した。

これを見つけた副官が、

「待てッ。」と呼びとめた、

「はい。」

兵士は立停つた。

「お前は白襟をかけてゐるが、何のために此處へ来たのか。」

けれどその兵士は、口を噤んで答へなかつた。

「何ぞ黙つてゐる。その譯を云へ。」

「はい……けれど……その譯をいふことは出来ませぬ。どうぞ、このまゝ放して下さい。第一線に戻ります。」

「此處をお前は何處だと思つてゐる。師團司令部だぞ。うむ、さては戦争が恐ろしいので逃げて来たのだらう。さういふ弱い奴は斬つてしまへといふ命令だ。どうぢや、斬られても譯をいはぬか。」

烈しく問ひつめられて、その兵卒は、もう包み切れなくなつて、

「實は、親の所へ金を送りたいので参りました。」

「何に、金を……」

副官は兵卒の身で金を送るといふのを訝しく思ひ、尙種々と訊ねてみた。すると、この兵卒こそ實に世にまれな孝行兵士であることが判つた。

### 孝行兵士

田村龜吉は歩兵第十二聯隊第十二中隊の歩兵二等卒で、愛媛縣温泉郡上山村の生れである。

七歳の時、母に死別れ、父親の手で育てられて来たが、家が至つて貧しいので、龜吉は幼少の時から百姓を手傳ひ細々とその日を送つてゐた。ところがどういふ不運か、貧苦の中に父が病にかゝつて半身不随となつて了つた。龜吉は其の後は我身一つで懸命に働き一家の生活を支へて来た。それに父は性來の酒好き、病身ではあるが、毎日酒がなくてはゐられなかつた。龜吉は稼ぎの足りない日には、自分が食はないでも、父には缺かさず酒を飲ましてゐた。

日露の戦争が始まる前年、龜吉は兵に徴されて入隊した。龜吉は病父の上を氣づかつたが、村役場で、

「心配するな、父の面倒はみてやる」といつてくれたので、龜吉は安心して隊へ入つた。

病父の生活 については、もはや心配はないが、併し好きな酒まで村役場で飲ましてくれることはない。龜吉は他に何の楽しみもない今の父の身には、せめて好きな酒なりと飲ませば、さぞ心淋しいことであらうと、隊から給與される僅かの俸給は如何な事があつても遣はず貯へ、戦友のシャツを洗つては、一枚一錢づゝもらつてそれを蓄め、これで酒をお上りなさいと送つてゐた。孝行ほど人を動かすものはない。龜吉の此の篤行を班長も班付きの上等兵も見て、實に氣の毒だといつて、日用品をいろ／＼と與へたので、龜吉は日用品を買ふ要もなく、俸給もシャツの洗ひ賃も、一錢も使はず病父の許へ送ることが出来た。

しかるにやがて戦争は開かれ、旅順の風雲はゆくりなくも龜吉を拉し去つて、病父を一人故山の月に泣かしむることとなつた。

田村二等卒は、戦地に來ても父のことは一日も忘れなかつた。しかし、今は戦友のシャツを洗ふどころではない。自分のシャツさへ洗ふ暇さへないので、一文だに余分の金を得る道とはない。が、戦争中には二錢づゝ多く給與されるので、この零細な金をためておいては郷里へ送つてゐた。

送金は出來ぬのであるが、龜吉は旅團司令部にゐる同郷出身の上等兵吉田某に頼んで、密かに送金を取計らつて貰つてゐたが、その吉田とても兵卒であるから、送金は出來ぬ筈だが、機才のきく人として、うまい方法を考へて野戦郵便局の手をへて送金してゐたものと見へる。

### 乃木將軍の情

一錢二錢と貯えた金を、龜吉はどうにかして送りたいものと、一時休戦となつたのを幸ひに、吉田上等兵にたのまうと、ここまで來た所を副官に見つけられたのである。

龜吉は言つた。

「私は決死の白襟隊に加はつてゐます。今度こそはこの命を投げ出さねばならぬ時です。戦死すれば今ここに持つてゐる金は父へ永遠に送ることが出来ません。それが残念です。」

並みゐる將校は、この話をきいて互ひに顔を見合せ、

「實に豪い奴ぢや。」と感心した。中には涙をのむものもあつた。

ところへ乃木司令官が司令部巡察に來た。將軍は副官に向つて、

「この兵は何か。」と訊ねた。副官は、據なく仔細を報告すると、部下に對して優しい將軍は、「さうか、その金は俺が預つて司令部から送つてやらう。併し今後は決して金など送ることはならぬぞ。」

と云はれた。威嚴の中に温情の籠つた

將軍の言葉 が田村二等卒の耳には慈悲深い父の聲のやうに響いた。將軍は更に田村に向つて、

「お前が此處へ退つて來たのを中隊長は知つてゐるのか。」

「中隊長に申しましたら、早く行つて來いといはれました。」

「それならよい。早く隊へ歸つて働かなければならん。」

田村は喜び勇んで、將軍に金を預けて第一線に引返した。將軍はその金に、自ら澤山の金を足して、それを司令部に命じて田村二等卒の郷里へ送らせた。

日を経て、田村二等卒の郷里の役場にその金と書面とがとどいた。

村長助役等が立合で開いて見て驚いた。

「どうだ、まあ宗右衛門は偉い倅を持つたものだ。師團長や軍司令官兩閣下の御目にとり、金

まで足して送つて下さつただ。かういふ兵の出たのは第一この村の名譽である。早く宗右衛門を呼んで喜ばしてやらう。」

宗右衛門は、村長からこの話をきいて、ハラ／＼と涙をこぼした。

「倅……すまねえ……お前が戦地で食ふ物も食はずに貯めた金を、これまで俺はみんな酒にして飲んでしまつたのだ。許してくれ。これ龜吉、俺は禮をいふぞ。」

### 禁酒した宗右衛門

倅の孝行 と、人々の情とに感じた宗右衛門は、ここに禁酒の二字を教へられて書き、之を額にして鎮守様におさめた。

好きな酒はふつつりやめ、乃木將軍から贈られた金は大切に保存し、倅が無事に戦地から歸る日を待つた。

さて、田村二等卒は、その後數度の戦に参加し、二三ヶ所の傷を被つたが、明治三十九年三月、輝く榮譽を荷ふて凱旋した。

父は病をおかし伊豫の三ヶ濱へ出迎へた。龜吉はその後勳功によりて、金鵄勳章功七級、白色桐葉章を授けられた。

其後、宗右衛門は一生の思ひ出に、どうか東京見物をして見たいといふと、親孝行の龜吉は、父を東京見物につれて行くことにした。

上京した龜吉親子は、先づ第一に乃木將軍の邸へお禮に行つた。將軍は二階からおりて來られ「まあ上れ、よく訪ねて來た」と、氣軽く應接し、いろ／＼と親切に言葉をかけてくれた。

やがて、暇を告げて玄關に降立つと、大將夫人が志だといつて金を紙包にして宗右衛門に渡した。親子は、將軍夫婦の慈悲深さに感泣して、振り返り／＼立去つた。

その後、乃木將軍が伊豫の松山に行つた時、將軍は龜吉の孝行なことを土地の人に段々と聞いて、若干の金を與へた。

龜吉は、その金を資本にして松山市に菓子店を開いたといふことである。

### 償勤兵大西源太郎

#### 母に誓ふ

運送船「仁川丸」は、今宇品港を出帆した。この「仁川丸」に送られて行くのは、第二軍奥司令官の下にある第十一聯隊の勇士達であつた。

今しもこの「仁川丸」の甲板を、山口少尉がコツ／＼と靴音も軽く歩いて行くと、大きな通風筒の蔭に、一人の兵卒が悄然とうなだれ乍ら、淋しく海を眺めてゐるのが眼に入つた。

この兵卒は、大西源太郎といふ償勤兵で、山口少尉の部下であつた。償勤兵といふのは不名誉極まる名前で、軍隊で罪を犯した兵卒は、衛戍監獄へ入れられる。その監獄で送つた日數だけは軍隊の勤務が出来なくなるから、満期除隊で同年兵が歸休した後も、残つて入獄中だけの日數を勤めるのが償勤兵である。

この大西源太郎もその一人で、除隊も出来ないでゐる所へ、日露戦争が始まつたのだ。

「おい、大西ではないか、どうした」  
山口少尉が呼びかけた。大西は黙つたまゝ敬禮をしたが、すぐに又うなだれて了つた。少尉は側によつて行く。

「お前に話したいことがある。俺はさつきこの船が宇品を出帆する時、お前の母に會つて来た」  
「えッ、少尉殿本當ですか」

「本當だ。俺はお前の母からたのまれたことがある」

「母が来たのですか。私も一目でもいゝから會ひたうございました」大西源太郎は、さういふと  
「嘘をしばたゝかせるのであつた。少尉はそれには答へないで、ボンと大西の肩を叩きながら、  
「おい、お前は實にいゝお母さんを持つてゐるな。お前の母はかういふたぞ。監獄に入れられるやうな奴でも、我子と思へば心にかゝる。せひ隊長様にあつて、忤のことをお願ひしたいばかりに、遠い山の中から汽車にゆられて出て来ました。今度の戦争は御國の一大事ぢやといふから忤も今までの不心得を詫びるつもりで、戦地で手柄をたて、御國のために名譽の戦死をするやうに、言ふて聞かせて下さりませ。この母の一生の頼みぢやといふてな。私は忤にはあひません、

戦地で骨になればその時は喜んで迎へてやると、よく聞かせて下さりませ……と、大西、お前の母に言ふてゐたのだ。お前は立派な働きをしなければならぬぞ。お前が不名譽な憤動兵だといふので、語り合ふ戦友もないといふならば、俺がお前の友達になつて上げやう。心を落とさずに一生懸命にやつてくれ」

慈悲深い山口少尉の言葉は、生れて始めて知る人の情けであつた。

「判りました。私はきつと母の言葉に誓ひます」

大西二等卒はシク／＼泣き乍らさう言つた。

### 大隊旗を擱んで

得利寺の激戦は六月十三日に開始された。敵と戦闘してゐるのは、第八聯隊の一大隊を率ゐる武藤少佐の一隊であつた。この一隊は第一線までを占領して、第二線間近く攻めよせたが、敵も第二線を奪はれてはと、必死となつて銃火を浴びせかけて来た。この時田中伍長は、飛び来る敵弾に胸を貫かれて、大隊旗と共にバツタリ倒れた。

敵は大隊旗を奪はうとしてか、猛烈に一斉射撃を送ってくる。そのために味方はバタ／＼斃された。そして敵陣地から大隊旗目がけて駈けよつた来た兵がある。恰度その時、そこまで進軍して来たのは山口少尉の一隊だった。

「それッ、大隊旗を奪はれるな。」

山口少尉が指揮して、猛烈な射撃を送つたので、大隊旗を持つて逃げ出した敵兵はバツタリ打ち倒された。

この時、山口少尉の前につか／＼と一人の兵が立つた。

「少尉殿。大隊旗を敵の手に渡すは残念です。私があゝの旗を取つて来ませう。」

「何にッ、お前が。」

と、驚きの眼をみはつた相手、それは大西二等卒であつた。大西の眼には

盡忠決死の尊い輝きがあつた。

「よし行け」

「はッ。」

と答へた大西は、脱兎の如く懸濠から飛び出して一目散に駈け出した。と、忽ち敵の一斉射撃がはじまつた。

弾丸のやりに駈けて行く大西は、やがて大隊旗の側まで駈け、大隊旗を掴んだ。とたんバツタリ倒れて了つた。

「やッ。」

味方の驚き、皆息をのんだ。一分、二分、身動きもしなかつた大西二等卒は、その時突如として跳ね起きた。そして大隊旗を手にしたまゝ、脱兎の如く、我が陣地に向つて駈け出した。

「わッ。」

我が陣地からは歡聲があがつた。大西二等卒は弾丸一つうけないで、我が懸濠へ飛込むことが出来た。

「うまくやつたぞ、大西……出来したく。」

山口少尉は、かういつて大西を抱いた。



### 決死の斥候兵

大石橋の斥候準備を整へながら、我が軍が小紅基堡に陣をかまへたのは、七月十一日のことであつた。

そして、總攻撃の前に、敵偵察の將校の斥候を出すことになつた。この時、この決死の斥候に選ばれたのが山口少尉だつた。山口少尉は部下から二十人の決死隊を募つて、黄昏迫る頃勇んで我が陣地を出發した。

高梁を縫ひ、雜木林を這ひ、暮れ果てた曠野を北へ北へと進んで行つた。遠くの方で銃聲が響くだけで、四邊は静かだ。と、この時突如！馬の蹄の音が耳に傳はつて來た。

「停れッ。伏せ。」

一同は、草の中へ身をひそめた。

間もなく、その前に現はたのは二十騎余りのコザツク騎兵だつた。彼等も何處へか斥候に出かけるらしい。息を殺して我が斥候隊が忍ぶとも知らず、

コザツク騎兵の一隊は、彼方へ姿を消してしまつた。

「残念だが、我等には他に目的があるのだ。」

「見遁してやらう。」

決死隊は、それを見送つて咳くのであつた。

やがて一同は起ち上つて、再び前進をつゞけた。すると再び足音が聞えて來た。一同は又もや地に這つた。山口少尉のみが密林の丘にのぼつて行つた。

ところが驚いたことには、暗中に肅々として進む敵の大縦列、約一個師團ばかりの大軍が、我が軍の中央目ざして夜襲をするものと思はれた。

山口少尉は驚いて、丘を駆けおりて、太田といふ上等兵を呼んで、

「お前は卒一人を連れて、全速力で中隊に歸り報告しろ。大平嶺南方を八時三十分、敵兵約一個師團が、我が陣地の中央目かけて夜襲をかける模様あり。もし中隊に歸れなかつたならば、何處でもいゝ、我が軍に報告しろ。よいか。」

「はッ、行つて参ります。」

重任をうけた太田上等兵は、一人の卒と共に飛ぶやうに南をさして駆け出した。かくして山口斥候隊は、再び前進して雑木林をぬけた。すると、今度は眼前に敵の後部隊を発見した。しかも不意だったので、忽ち敵に発見された。山口少尉はやむなく覺悟を決めて「折敷けッ 射てッ」と號令した。と、十八挺の小銃は一せいに火蓋を切つた。敵はバタ／＼倒れたが、多勢を相手に長く戦ふは不利である。大死するのは斥候の目的ではない。機敏に退却して暗の道を、やうやく安全の地點までのがれた時、山口少尉は、南波伍長を呼んで「お前は卒三名を連れて、今発見した敵の動靜を兵力を本隊に報告しろ。俺達はこれから敵の先頭部隊を追つて敵兵に近づいたら、高粱穀へ火をつけて敵を照明してやる。」

「はッ、行つて参ります。」

四人の部下は、まつしぐらに暗に姿を消して行つた。

## 燃へる 高粱

夜襲を期して 進軍した敵の前面に當つて、突如として高粱穀が燃へ出した。火は四ヶ所から、

燃へ上つて、天を焦がすばかり、暗所にひそむ敵の大軍はことごとく照らし出されてしまつた。我が陣地からは忽ち銃聲が物凄く起つた。火炎の附近に山口斥候隊を発見した敵兵は、激怒して潮の如く押しよせて來た。「火を消さすな、火を守れ。」

山口少尉は必死になつて叫んだ。

焰々と燃へる大火柱は、天をこがすばかりに輝きを増した。敵兵は愈々狼狽して、我が軍に迫らんとした。

果然、大格闘が開始された。然し何といつても我が軍は少數だ。多數の敵を相手に銃剣をもつて戦つたが、四方八方から潮の如く押し寄せてくる銃剣のために、そこそこに打ち斃される者が續出した。

血潮滴る剣を 握りしめ、幾人、幾十人の敵を斃した山口小尉も、遂に力がつき、そこにバツタリ倒れた。

この時、敵の怒れる剣が何十本となく追つて來て、少尉を背後から貫かうとした。途端「待て

ツ。」と叫びながら一人の兵卒が脱兎の如く駈よつて来た。それは大西二等卒であつた。大西は山口少尉の上に蔽ひ重なつて、身をもつて亂刃の下に少尉の身體を守つた。

やがて敵の夜襲の計劃は破れ、二千あまりの死骸を捨てて敵兵は退却してしまつた。

翌朝高梁穀の焼け跡から発見された山口少尉隊の全部の屍骸の中に、一將校の背に蔽ひ被つて自分の背に數十の劍を受けながら死んでゐた一兵卒の死體が発見された

これこそ償勤兵大西二等卒の最後の姿だつた。大西二等卒の獻身的行動によつて、山口少尉は九死に一生を得て野戦病院に送られた。

だんだん傷が快方にむかつて行く、或日山口少尉は純白のベッドの上で、大西二等卒の母の許へ手紙を書かうとして、巻紙をのべた時、宇品港へ會ひに来た大西二等卒の、あの老いた母親の姿を思ひ浮べて、ハラ／＼と涙をおとした。

「さて、何と書かうか。」

山口少尉は、涙ぐんだまゝ筆をとつて、いつまでも思案に暮れてゐたが、やがて巻紙の最初に書かれたのは、

「母よ許せ」の四文字であつた。

### 高崎十五聯隊

#### 千二百高地

千大山を占領 した中央縱隊は、右縱隊が千二百高地に於て進退に窮してゐると聞き、千田卓幹大佐の率ひる歩兵第十五聯隊を先發として、救援に赴かした。地の利悪しく加ふるに深夜、且つ探照燈眩しく、行動に不自由を感じ、同隊も亦苦戦に陥り、進退の自由を失つて、これ亦隙に潜んで夜を明すことになつたのである。

惱ましき夜は明放れた。

前にも後にも收容する事の出来ない戦友の屍が累々と横はつてゐる。血は草を染め土を染め軍帽は飛び頭紐は千切れ、服は裂け銃は折れてゐる。死に切れず重傷に苦しむ者もある。

「おい、待つとれ、今擔架隊が来るぞ。」

と、一時の氣休めを云つてやる。どうして此の彈雨の中に擔架が来るものか。

「萬歳、天皇陛下萬歳……。」

と云ひつゝ、ぶつと血を吐き出して眼を閉ぢたまふで、兩手を合せてゐる。

「どうした。」

「ま……末期の水を飲ましてくれ。」

「うん。」

水筒外せば 彈が貫いてゐて一滴もない。

「おい誰か水をやれ」と呼べば、淋しげに水筒を差出すのは小隊長、

「小隊長殿……これを。」

「あゝ、末期の水だ、充分に飲ましてやれ。」

と、慈愛の籠つた言葉。あゝ若しその小隊長も、腰に敵彈を受けてゐなかつたならば、瀕死の

卒に縋つて一言なりとかけてやりたかつたらうに、小隊長も自由を失つてゐた。

「おうい、小林、しつかりせい。水は小隊長殿が下さつたぞ、充分に飲め。」

「おう、忝けない。よろしく……」こくり／＼と眼を閉じたまふ、息もつかずうまさうに飲込んで、笑ひ乍らがつくり首を垂れたそれが小林一等卒の死であつた。

夜が明けて攻撃を再び開始しやうとする時、夕べの雨雲が遂に豪雨と變つた。煙雨濛々として何物をも辨じ難く、爲に味方の遙か後方の砲列からの援護射撃は全然無効である。

豪雨は容易に歇まず、地隙には泥海が流れ込み、防水具の用意のない全兵の困難は一通りでなかつた。餓へは糲を嚙んで漸く耐へ、渴は地隙の泥水を飲んで凌ぎ、全身は水にぬれて、僅かに首を泥水の面に現はして一日を耐へた。

かくして又待ち遠き黄昏は野山を閉じ、荒涼たる戰場の上を覆つて夜が來た。探照燈は例の如く閃々と地隙の残兵を伺をするかと思守つてゐる。壘上には銃を擬し、砲を扼して、寄らば放たんと満を持してゐる。

暴風雨の前の静寂か。千田中佐は起ち上つた。そして悲壯な聲を振りしほつて言つた。

「我等は今躊躇すべき時ではない。今夜こそ、必死を期して此の高地を奪取しなければならぬ。我等の生命は凡て大元帥陛下に捧げてある。己の生命を捨てるのではない。國家のため大君のた

め、お預かりしてゐる全身を投じて、一擧に本高地を奪取するのだ。日本武士は、萬死に一生をも期してはならない。最後の見苦しい行動があつてはならない。死んでくれ。死んで呉れ。勇敢に、そして自分を守つてくれ。」

血涙共に下るの概が含まれた訓示であつた。將士は悉く奮然と勇躍して起ちあがつた。どの顔どの顔にも、勇猛果敢な氣宇が溢れてゐるではないか。

夜十二時、機熟するや、千田中佐は全軍に突貫の命令を下した。

### 先陣の老武人

此の時擔架に乗つて 陣の先頭に立ち、部下を應いて最先きに突貫する老武者があつた。少佐田中次郎その人である。田中少佐は、聞へたる豪の者であつたが、脚氣のために起居不自由となつて、後方病院にあつたけれど、國家の安危に關する大難關に際して、晏如としてゐるのは心苦しいと、擔架に乗つて、再び千田中佐の軍に加はつたのである。年時に五十一歳であるにも拘らず士氣は益々旺なるものがあつた。

この時同じく後より勢ひ込んで駈け出したのは、鷹木大象中尉であつた。

かくして尖兵の必死隊は光弾の下、猛射亂撃の下に、屍を積み重ねてひるまず、斃るれば替はり、斃るれば替はり、遂に鐵條網を切開いて海嘯の如く押し寄せたのである。

時は八月十五日午前五時、激戦五時間にして、漸く障礙物の一たる鐵條網は破壊された。息をもすかせず、折から後方砲臺陣地からの援護射撃が効を奏したと見た千田中佐は、最後の大突貫の命を下した。鷹木中尉は擔架の田中少佐を駈けねけさま、

「先陣一番乗り御免。」

と叫び、血なまぐさい日本刀を眞向に振りかざして、敵前二十メートルまで突進し、

勇躍壘壁を躍り越へんとする時、大尉津久井平吉が追ひすがつて抱き止め、

「あぶなう。」

「はなせ。」

「いや、此處であなたを死なせることは出来ぬ。又死ぬ所はいくらでもあります。深入りしてはなりません。」

「此の場に及んで何を言つてゐるのだ。俺は戦死を覚悟でゐるのだ。死んだら我が遺族へ傳へてくれ。」と叫んで、一氣に塙壁を躍り越へ、敵壘深く突入り、突入り、數多の敵を斬りまくつたが遂に亂刃の中に名譽の戦死をとけて了つた。これを見た中尉の従卒須藤一等卒も、その後を追ひ敵壘目掛けて飛入つて、奮戦突進したが、須藤一等卒も遂に倒れた。

「退くな。退くな。跳り込め、飛び込め。」

千田聯隊長は先頭に立つて、阿修羅王の如く必死となつて叫ぶ。血は幾百幾千の傷口より滾々と流れ、地を染め草を染め、屍は築いて壘に及ぶばかりであつた。

「救せ。」と、心に詫び乍ら、戦友の屍を踏み越へて、我劣らじと争つた敵壘に飛び入る。此處彼處では再び銃剣を揮つて大格闘が開始されるのであつた。剣を失つて銃を逆手に、勇を鼓して臺尻で敵をなぐりとばすものもある。津久井大尉は重傷を負ふて昏倒した。河合大尉も、橋本大尉も、中山中尉も、何れも悲壯な戦死。そして老少佐田中次郎は如何にしたか？ 戦ひ激烈となる中に従卒は何れも斃れて、擔架を擔ぐ者はなく、心は矢竹にはやるけれど、病の身の自由にならず、遂に強られて一卒の肩により野戦病院に送られ病篤くなつた。

### 血と肉を以て占領

戦は益々激烈となり、右倒れ、左傷つき、白兵戦は容易につきず、我が軍ために利あらず、次第次第に味方の將卒は枕を並べて討死するのであつた。腕を折られ、足を挫かれ、立ち居の自由を失つた戦友は、

「俺の仇を取つて呉れ。」と叫ぶもの、半死半生の境に呻きつゝあるもの、今や瞑目せんとする者邊りは戦友の屍を以て地を蔽ふばかりの、不利又不利に陥つたのであつた。

千田中佐の部下は傷つかない者は僅かに四十四名にすぎなかつた。惡戦苦闘の状は實にかくの如く慘憺たるものであつた。

「此壘を破らねば、我等は此處に死ぬのだ。銃の執れる者は耐えて銃を持って、銃を支へ得ぬ者は劍を持って、必死に此の壘を陥せ。汝等の命は貰つたぞ。鬼神の如く叫んだ千田中佐は、眞先に刀をひつさげ、再び三度び敵壘目掛けて勢ひ鋭く突貫する。傷つき倒れたものも亦起き上つて、ワア〜と喚聲をあげて突入し、火水になつて戦ふさまは、凄風自から生ずるの様である。

敵壘は陥ちた！ 千二百高地はかくして、完全に陥ちたのである。然し勇猛なる千田中佐も傷つき淋漓たる鮮血は寸断された軍服を染めて、凄愴の氣の迫るものがある。一千二百メートルの壘上高く朝風にへんほんとして翻る日章旗！ 何と勇壯でたのもしきことよ！

傷ついた身を杖に杖について壘上に起ち上り、眺むれば、右も左も後も、壘上壘下死屍か或は重傷の軍人にあらぬはなく、寸隙の地もなき程に折重なる敵味方の屍には、背となく頸となく、顔となく、胸となく、斑々たる血痕がその忠勇を語り顔に凝固してゐるのだ。

風は腥い。朝の風は戦地を殊更に冷たく吹き渡る。萬歳が、萬歳が、高崎十五聯隊萬歳の聲が、丘草の麓に到着した後續部隊の中から、どうくどとあがる。高崎十五聯隊が、血と肉とを以て占領した千二百メートル高地は、高崎聯隊の名譽を永遠に傳ふべく、高崎山と命名された。

時に明治三十七年八月十五日——

### 北砲臺の肉弾兵

皆な死んで呉れ

満月が白銀山の上高く昇つて、旅順の要塞と市街を真晝のやうに照し、陸も海も間として聲なく、深い眠りに沈んでゐた。ところが、その静けさは、忽ち破られた。曉の霧を破つて響く勇しいラツパの音、そして、一時に撃ち出す數百門の大砲の唸り聲！ 即ち日本軍の旅順總攻撃が始まつたのである。八月の末頃、我が軍は次第に要塞附近に押し寄せて、山といふ山には、我が兵がべつたり喰ひ附いてゐた。そして一步一步山上の敵の陣地に向つて詰めよせた。

その山を越したら旅順の市街は、直ぐ目の下になるのである。敵もさるもの、「よし、来るなら来い。みな殺しにしてやるぞ」とばかりに、山上で大砲や機關銃を構へて手ぐすね引いて待つてゐる。だから、漸く敵の陣地に近づいたかと思ふと、ドドド……ンと、撃ち出す大砲、それから機關銃などのために、バタバタ倒されてしまふ。

百人行けば百人斃れ 千人行けば、その千人が殺されるのだ。

「第×師團全滅。」

「第××聯隊全滅。」

かういふ悲しい報告が、次から次へと司令部へ傳へられた。司令部は柳樹房にあつた。司令長

官は乃木將軍である。將軍は手拭で頭に鉢巻きをして、幾日も眠らぬ眼を赤く充血させ乍ら、一本の蠟燭の下でじつと考へに耽つてゐる。

「バルチック艦隊は日本海へやつてくる。それに北の方で日本軍と戦つてゐるロシア軍は、次第に兵を増して旅順まで一氣に押し寄せて來やうとしてゐる。今の内に早く旅順を陥れてしまはなければ、とても我が軍の勝算は見られないだらう。一體乃木將軍は何をしてゐるのか。」

「乃木大將では駄目だ。司令長官をやめて了へ。」

内地からの手紙が、將軍の机の上には山と積まれてゐた。將軍は副官を呼んで命令を下した。

「旅順は早く陥して了はなければならぬ。この上は各隊みな全滅の覚悟で、無二無三敵陣地に迫つて行くより外に道はない。もう皆、此處で死ぬつもりでやつて貰ひたう。」

突撃効なし

日本軍の猛烈な攻撃が開始された。兵士達は唯死ぬためにばかり敵陣地めがけて進んだ。

北砲臺又は二龍山の空壕では左右に敵を受けるので、両方から亂射亂撃の雨を浴びせられた。

我が兵は、體中蜂の巢のやうに弾丸を受けてバタバタ倒された。死骸はやがて全山を埋める。つの上にも又死骸が重なるのだ。攻めて行くものはどん／＼その死骸を踏み越へて行く。すると、下の方でまだ半息のある重傷者が、苦痛の叫び聲をあげる。軍服も破けるかと思はれる程膠れ上つた死骸を、まるで米俵でも踏むやうにして兵士達は、後から後からと突撃した。が、それも遂に効がなかつた。唯それは山谷を埋めるる死骸の數を多くしたに過ぎなかつた。

「我が師團の數回の突撃も全く効なし。今や残兵を集めて最後の突撃を行はんとす。」

もはや多くの兵士も死に果て、残り少なくなつた我が軍は、最後の突撃によつて、共々戦死する覺悟でかういふ悲痛な報告を司令部に送つた。

「唯死んでくれといふ司令長官の命令だから、自分達は死に、行くのだ。成功不成功などといふ事はもはや問題ではないのだ。唯命令を守るために自分達は突撃し、そして骨を山に曝すのだ。」

將校達は部下に向つて唯さう言ひきかせるだけだつた。

「死ぬ」といふ命令を下す司令長官の心中は、熱湯を呑むの思ひがするのであつた。しかし「唯命令を守るために自分達は死に、行くのだ」と言ひ聞かせる將校達の心の内は、そして、それを



聞く兵士達の心の内……その思ひは何んなに悲壯なものであつたらう。

幾百幾千の死骸が山を築き、その間に手や足を失つた負傷者が唸つてゐる。その中を司令長官乃木大將が首うなだれたまゝ歩いて行つた。

「よく戦つてくれた。有難う。」

大將は口の内で呟き乍ら、それらの無様な死傷者に向つて頭を下げた。

「司令長官殿、願ひがございます。」その時、一人の上等兵が、乃木大將の前へ来て言つた。

命を棄てゝ

將軍は立停つて その上等兵を見た。

「うむ、何か用か。」

「はい……かうして尋常なことを致して居りましたは、仲々敵を打破ることは出来まいと存じます。甚だ差出がましようございますが、私一人の命を捨てゝの願ひがあるのでございます。」

「うむ、言ふて見い。」

「もはや、地上から攻めて行く事は殆んど不可能となりました。晝は敵の眼が光り、夜はまた探照燈が照り、雨雲と降りそゞ弾丸のために近附けば、もうそこに倒れるより外はありません。」

「うむ……」

「それで地下に横穴を掘つて、敵陣地の丁度下まで行けるやうにし、そして我が爆薬を持つて行き、敵陣地の下でそれを爆発させたいと思ひます。」

「それでは然し、お前の命はないぞ。」

「左様であります。私は、その爆発と同時に命をすてる覚悟であります。」  
それを聞くと、乃木大將は感謝の面持で、

上等兵の肩に手を置いた。

「よく言つてくれた。實はさういふやうな事を僕も一度考へたのぢや。然し流石に部下に命令する氣になれなかつたので、今まで黙つてゐたのぢや。氣の毒ぢやがそれではやつてくれるか。」

「はッ、必ず巧くやつて御覽に入れます。」

眞に、それは日本男兒の意氣であつた。司令長官の許しを得た上等兵は、直ちに仲間の兵卒達

に手つだはさせて、味方の陣地から敵砲臺の真下まで届く坑道を地中に穿つた。  
敵砲臺といふのは即ち北砲臺であつた。坑道が出来上がると、いよいよ上等兵は仲間の兵士達と別れを告げて、爆薬を小脇に坑道に入つて行くのであつた。

尊い犠牲

坑道の入口に來た時、上等兵は用意して來た長い綱を出して、一端を片方の足に結びつけた。それを見た一人の戦友が聲をかけた。

「おい、谷本上等兵、その綱は何だ。」上等兵の名は谷本清吾といつた。

「これか、あは、うゝ。では君に一つ頼むとするかな。砲臺の爆破と共に俺は死んでしまふのだが、實をいふと、死骸だけはやはり君達戦友の手で葬つて貰ひたいのだ。それで、かうして片足に綱をつけて置くから、爆発がすんだら、すぐにこの綱を力一ぱい引いてくれないか。さうすれば、俺の死骸が君達のところへかへつてくるだらうからな。」戦友の目には、新しい涙が湧いた。「よし、承知したぞ。」

「では頼むよ。」

谷本上等兵の姿は、早坑道の中に滑へて行つた。今は只坑道の入口にある綱がスルスルと伸びて行くので、谷本上等兵の進んで行くのが判るだけである。その綱の伸びるのが止まつた。

一秒、二秒、三秒……坑道の入口にゐる戦友は固唾を呑んだ。その時！

轟然たる爆音と共に、さしもの砲臺の前の部分だけが爆破した。

「萬歳。萬歳。」軍中からは、どつと歓聲が上がつた。その間に坑道の入口にゐた戦友は、大急ぎで綱を手ぐつてゐた。

「あッ。」戦友達は皆眼をみはつた——何といふ無様な死骸！それは、全く人間の形を止めてゐないボロボロのやうなものであつた。然し皆は、直ぐ様、そこに整然と列んで、幾百幾千の命に代つて自分一人を犠牲にした勇士、谷本上等兵の骸に對して最敬禮をしたのであつた。

決死の攻道作業

攻道中の蠟燭

敵の頑強な防戦 によつて、第一回、第二回の旅順總攻撃は、意外なる不利に了つた。軍司令部では更に攻路作業の進歩を圖つて、銳意激勵して、やうやく敵壘に接近する事が出来た。そこで、我が包圍軍は十月廿六日を以て第三回の總攻撃を開始することとし、第一師團を以て軍の右翼とし、松樹山方面に第九師團を中央軍隊として二龍山方面に、第十一師團は左翼として東鷄冠山北砲臺に向ひ、中村少將は別に一隊を編制して松樹山補砲臺を攻略して、一舉にして旅順に闖入せんとした。二十五日午後から、海陸重砲隊の砲撃は開始せられ、二十六日拂曉に到つては、更に各師團の野砲隊もこれに應援し、砲火を開き、歩兵の前進を援護したので、砲聲殷々として天地を震撼し炸煙濛々として天空を蔽ひ、其の壯烈實に鬼神を泣かしむるものがあつた。軍の右翼隊たる第一師團は、旅團長友安少將を右翼とし、後三羊頭村に向ひ、更に中央隊と連結して、二〇三高地に 馬場少將は歩兵第一旅團及び近衛工兵小隊を隨へて中央に備へ、更に右翼隊と共に二〇三高地に向かはんとし、牛島大佐は歩兵第三聯隊を率ひて軍右翼となり、渡邊大佐は歩兵二聯隊、野戰砲兵第一大隊の一小隊、四十七ミリ速射砲隊、戦利砲隊及び工兵第一大隊を率ひて松樹山を攻撃した。この時工兵伍長塚越源太郎は渡邊大佐の下に屬し、幾回の苦戦を経て來たが

第一回も第二回も 盡く味方の不利に終つた。そして今度は第三回の總攻撃である。是非とも一舉にして之を奪取しなければならぬと、その意氣込はすで九外を呑むの概があつた。松樹山攻撃が開始されて、胸膺下攻道の掘鑿作業を命ぜられた工兵第一大隊の一部は、幾多の危険を冒して、あらゆる難苦をなめつゝ作業に従事したのである。塚越伍長は、この時戦友六名と共に攻道の掘鑿に従つたが、之れを見た敵は、間斷なく上から爆彈を投下 して作業の妨害を試みた。しかし幸ひにその爆彈の多くは至つて小爆彈に止まり、大した損傷もうけなかつた。十二月二十一日迄に於ける攻道の作業人員は下士以下七名であつたが、二十二日から更に四名を加へて十一名に増員し、その日左方へ支攻道を設け始めた。作業の時間は無論晝夜兼行である。前記の工兵は六時間交代で暗い攻道の中で鶴嘴や、スコップを揮つて奥へ奥へと攻路を掘つて行くのであつた。次第に深さが増すにつれて、暗さは暗く、空氣は稀薄になつて來て、息苦しいこと夥しい。だが外部には送氣装置がしてあるが、その効も次第々々に薄弱となつてくる。眞暗な坑路内、一種の火影を便りに作業をしてゐるが、空氣の稀薄になるに従つて、然焼作用を助ける酸素の缺乏は

あはや幽かな蠟燭の焰を今にも奪ひさらうとする。  
 風なきに明滅する一點の光明は、何の暗示であらう。外にはこゝを先途と戦ふ兩軍の矢叫び、  
 一進一退、兩軍陣地の奪還は數秒の猶豫もなく、血を流し、肉を積んで、今や戦は酣である。

## 塚越工兵伍長

敵は間斷なく、爆彈を投下した。その度に多少の損害を受けるので速かに修理を施しては作業を進めるのである。二十三日午後六時——塚越伍長は上等兵以下十名と共に交代して作業に従った。やゝもすれば窒息するやうな坑道内から、休息がてら外氣を呼吸して來た工兵達は、勇氣百倍、一生懸命の作業をつゞけてゐた。と、この時、敵の投げこんだ爆彈は坑内に於て轟然たる大音響と共に炸裂した。その破片は運悪くも塚越伍長と傍にゐた小隊長に的中した。

塚越伍長は打倒れて、そのまゝ、人事不省に陥つた。小隊長の負傷は顔面の上部であつたが、直ちに攻路を飛び出して中隊に報告した。小隊長の報に驚いた中隊長は、それツといふので部下の下士卒三名を選抜して坑路内の強行偵察を命じた。命を受けた三名は、戦友の生死を氣づかひ乍

ら、死を決して攻路内に立ち入つて見れば、塚越伍長は頭を出口の方に向け打倒れ、最早蟲の息となつてゐるのだつた。

「おーい……おーい……塚越伍長。」と耳に口をあてゝ呼んで見たが何の答へもない。口に手を當て見れば、まだ息はあるやうだ。兎も角も大隊本部まで連れて行けといふので、坑道から連れ出し、應急手當を施して、衛生隊に引渡すべく擔架にのせて、第四野戦病院へ急いだ。

大隊本部から第四野戦病院へは約一里の里程がある。この日は十二月もすでに後數日を餘すのみとなつて、冬の曠野には寒風が吹き荒んでゐた。擔架に乗せられて行くうち、昏々たる眼りの中から、ふと我にかへつた塚越伍長は、

「あつツ。」と呟いた。——おゝ俺はまだ死んでゐなかつたのか……

吹きすさぶ風が、顔面へ冷たく吹きつけるのだ。塚越伍長は五體を凍掻かうとした。だが重傷の體は自由にならなかつた。そして、伍長は病院へ擔ぎこまれたのだ。暫くして、

「伍長、工兵伍長」と、耳のそばで呼ぶ者がある。氣がついて見ると、傍らに軍醫官が立つてゐた。此處は第四野戦病院の庭である。夜はふけたらしく、天空には數多の星が寒さうにきらめい

てゐた。カツと眼をひらいた塚越伍長は、軍醫官にむかつて訊ねた。

「どうして、私は此處へ来たのでせう。」

「尤もだ、君の負傷は大分重いから何にも知らなかつたのは當然だが、君は松樹山砲臺胸橋下攻道作業中爆弾のために負傷したのだ。然し幸ひに生命だけは取止めることが出来るから、氣を儘にもつて療養するのだ。」

「で……他の戦友はどうなりました。」

「君の部下は即死した。」

「さうでしたか。塚越伍長の頬には、ボロ／＼涙がこぼれた。その時、十二月末の夜の風が、病院の天幕をはた／＼と吹きまくつて、塚越伍長の枕に冷たい音をたてた。

伍長は、この時の功によつて軍曹に進み、名譽ある感状を拜受したのである。

### あ、仁平山

#### 逆襲する敵

仁平中佐の戦功が、抜群であつたことは、首山堡に於ける橋中佐、旅順に於ける廣瀬中佐と並び稱せられる武功を有しながら、比較的仁平中佐の名の知れないのは誠に遺憾である。仁平大隊の苦戦に依つて占領せられたる揚城塞の高地に、特に仁平山といふ名稱の附けられた一事に徴して見ても、如何に中佐を中心に部下の大隊が苦戦したかが窺はれるのである。

新發田歩兵第十六聯隊の第一大隊長としての仁平中佐は、各所の戦鬪に於て勇猛の武者振を示して「仁平大隊」の名は、早く已に人の注目する所である。

明治三十七年十月十三日、中佐の屬する歩兵第十六聯隊は、砲戦の結果を待ち前進を起さんと準備中であつたが、午前十一時頃より揚城塞の東北約千メートルの高地の敵兵は、漸次増加したらしく、高地の斜面を昇つたり、降つたりする者著るしく多く、正午頃から八家子東北高地に對する敵の砲撃は非常に烈しくなつた。しかし、午後零時半頃になると、我が砲火の威力も亦大いに發揮せられたと見へて、南蛤礮塘南方鞍部附近の敵の砲兵約十六門は、その射撃を變更して、我が砲兵第三中隊に轉向したので、彼等の砲戦は再び猛烈となつた。

仁平中佐は、午後一時頃敵の歩兵約一旅團が揚城塞東北高地の北麓に潜伏してゐることを偵知し

たので、機を失せず之を聯隊長谷山大佐に報告した。聯隊長は恐らく敵が、これを以て逆襲するに相違ないと判断したから、その第二大隊をして仁平中佐の攻撃に協力することを命じ、八家子にある第三大隊を仁平大隊の後方に近接させた。

この少し前、仁平中佐は、第四軍の最右翼の後備兵第十一旅團から「敵の歩兵約一旅團揚城塞東北約千メートルの高地北麓に集合す」との通報に接したので、其後搜索を行つて、當時揚城塞東方一八二高地上の敵は歩兵約一中隊に過ぎないから、先づその高地を占領して、その後方の敵に對し、機先を制してやらうと考へ、第二、第三中隊を第一線に、第一、第四中隊を第二線として、砲兵第五中隊の援助を受け、一八二高地に向つて前進を始めた。時に午後二時三十分であつた。然るに目的とする高地附近は、地形思ひの外險難で、

敵の火力は激烈を極め、死傷者は續出したので、遂に第三中隊を以て一八二高地の南方凸稜に達して高地上の敵と對戦、第二中隊も亦同高地に向ひ前進せしめた。

仁平大隊は、第一中隊を第三中隊の右翼に増加して、南蛤碼頭南方鞍部附近の敵の砲兵を射撃させ、又第四中隊を第三中隊の右翼に展開して、共に一八二高地及びその南方稜線の敵に向ひ前

進させ、午後二時五十分頃、第二中四中隊は萬難を排し、同高地稜線附近に達した時、敵の歩兵約二大隊は二中隊ばかりのものを第一線とし、此の高地の北側の麓から登り來り、我が前方約五十メートルの地に達したので、兩中隊は猛烈に射撃を開始し、多大の損害を加へたものではあるが敵は後方から、絶へず増加して來て、火力は益々盛んとなり、しかも有力なる砲兵の援助を恃んで、動やともすれば、一躍其の唯一の稜線を越へて我が方へ亂入せんとするの勢ひが見へた。

### 大隊長の戦死

大隊の生残者は見る／＼うちに少なくなつて、勇敢なる仁平大隊長の叱咤激勵を中心として、各々位置を確保し、最後の一人となるまでは、一旦占領した高地は敵に渡さじと、大勇猛心に勢立つてゐる。だが敵の勢は益々増加するばかりだ。かくして標高一八二高地の一角に取つて、三十八時間の長い間、食ひもせず休みもせず、激戦を交へた仁平大隊は、敵の直射と側射にあふて損害山の如く、午後三時頃には約百名ばかりを餘したのみだつた。この時、大隊長仁平中佐は、すでに數ヶ所の創傷に遂に起つことが出来なくなつた。残念ではあるが、死んで行かねば

ならないのであつた。のるかそるか、此の沙河會戰に於ける我軍の先途を見届けることなしに、彼我の争奪點となつた此の高地で、死なねばならぬ中佐の胸中はどうなであつたらう。

「どうしても、この高地を敵に渡してはならぬぞ。」

これは中佐が最後まで、くり返した悲壯な叫びであつた。

「やれツやれツ、思ひ残しのないやうに確乎やれツ。」

だが、隊長の一命は助からぬ。長時間の、

奮戦に數ヶ所の重傷を食した隊長は、顔面蒼白に變じ、瞳にかゝる白い霧を右手で拂ひのけやうとしては、その都度目をひらいて、

「なに此處を敵に渡すものか。」と呟號した。

だが遂に大隊長は倒れた。到底快復の見込はないのであつた。

大隊長が胸部に貫通銃創を受けて人事不省に陥つたのは午後三時頃であつた。この時は揚城塞を中心とするこの附近は激戦の絶頂であつた。今や大隊の生残者は百の上を幾らも越へてはゐなかつた。この時大隊長の戦死は少なからぬ打撃ではあつた。けれど戦線に於ける忠勇なる部下は

それがために動搖を起すやうな事はなかつた。遂に、負傷者もその痛みを押し包んで散兵線に入り、どうしてもこの難境を切りぬけねばならぬと、彈丸の二發や三發うけても、それがため綱帶所へ駆けつけるやうなことはしなかつた。殊に第四中隊の如きは、中隊長も小隊長も曹長も全部死傷し、軍曹高頭七五三が、負傷を包み中隊の指揮を執つてゐた。軍曹も一時昏倒したのであるが、頼みに思ふ幹部はなくなり、仁平中佐さへ戦死ときき、俄に這ひ出し死者狂ひに戦線に駆けつけ、全身血塗磨の如くになり、奮闘したのである。

### 仁平大隊 萬歳

既に大隊長を失ひ、少なからぬ打撃を受けたことを敵も知つたのか、四度大逆襲をかけて来た。

しかし、この時(午後五時頃)遂に第三中隊が援兵としてやつて来たので、この戦況は急に活氣を呈し、午後五時三十分、遂に一八二高地は我が軍の有に歸した。

壘上高く揚げられる日章旗——萬歳の聲はその下から上つた。

軍司令官黒木大將は、開戦以來勇名を馳せた仁平中佐の死を悲しんで、兩眼に涙をうかべた。

そして、仁平中佐のひきひた歩兵第一大隊に感状を傳へた。  
岡崎旅團長は現場で之れを読み上げ、全軍の作戦を容易ならしめた中佐の殊勲を賞へられた。  
此の時中佐は全く人事不省に陥つてゐたが、軍司令官より  
感状を賜はつた。その辭を耳にして、中佐は靜かに兩眼を開き微に唇をうごかしたが、これぞ  
中佐が感謝の意志表示だったのである。

### 豪勇内田鬼軍曹

#### 鐵條網破壊

土城子附近の高地にあつた我が軍は、一齊に行動を起して、水師營の敵陣地を攻略すべく進軍した。明治三十八年八月二十日午前二時のことである。  
と、早くもそれを偵知した敵軍では、各砲臺の探照燈を集め、光弾を發射して我が軍の上を照し、晝よりも尙明るい間を、機關銃を亂射し、小銃を集注するのみならず、附近の各砲臺からは大小砲の林をつくつて砲煙を送つて來た。これにも屈せず味方の勇將猛卒は、突進、また突進、

其の夜の明け方には水師營市街に潜行し、茲に攻撃の準備を整へ、前方に聳え立つ第一堡壘に向つて猛烈な強襲を試みたが、味方は多大の損傷を蒙るばかりで、殆んど一寸の陣地をも占領することが出来ず、その日も暮れてしまつた。そして我が歩兵第三聯隊三大隊は大隊長重傷を負ひ戦線を退き、弘前第十一中隊長が代つて指揮を取ることになり、二十一日午前一時得意の夜襲突撃をもつて、敵壘を占領せんと、第一大隊の二個中隊と力を合せて力闘したが、突撃隊が彈雨を冒して壘前に張られた鐵條網に迫るか迫らない内に、筒口を揃へた八門の敵機關砲の掃射及び地雷の爆發によつて、大隊長代理弘前大尉以下、第九第十兩中隊長其他の將校下士卒殆んど全部死傷、残る者僅かに五十七名に過ぎざる慘憺たる悲境に陥り、怨みを呑んで退却するより外はなかつた。この戦に殆んど恢復すべからざる大傷疾を蒙つた我が軍は、一時のそ陣地に止まつて警戒を嚴重にすると共に、補充の到着するのを待つこととした。そして九月十八日まで、第十一中隊には大藤大佐が新に中隊長として着任し、兵力不充ながら補充し得たので、再度水師營南方第一堡壘の奪取が企てられた。で、前回の失敗に鑑み聯隊は先づ突撃に先立つて、鐵條網を破壊せんと、その朝第十一中隊に命令を下した。



逸はやくこの命令到着を聞き出した勇士に、我が

伍長内田爲三郎があつた。中隊長大藤中尉の前に進み出て、

「中隊長殿、私は先月二十一日の夜襲に、前の中隊長殿と一緒に戦死する覚悟でありましたが、不思議にも死なず、今日まで生きのびました。それについては今度の鐵條網破壊の任務は、是非私に命じて下さい。八月我が大隊の全滅したのも、あの鐵條網があつたため、私が其の時生き残つたのも、今度その仇をとれといふ事だと思ひますから、是非とも私にやらせて下さい。」

と、決心の色を面にみながらして願つた。これを聞いて大尉は大いに喜んだ。

「實は僕も今その人選に迷つてゐたところだ。内田軍曹が進んでやつて呉れるなら此んな心強いことはない。中隊長も必ず軍曹の成功する事を信じて、此の重大の任務を托する。が敵も鐵條網の効果を認めて、その後一層堅固にしたやうだから、充分の覺悟を以てやれ。それから連れて行く部下は餘り大勢ではいかん。七人ときめやう。誰をつれて行くともそれはお前の自由だ。」

「はい、確にお受けいたしました。必ずやりとげてお目にかけます。」

内田軍曹は喜び勇んで中隊にかへつた。

俺も連れて行つてくれ

喜び勇んで かへつて来た軍曹は、

「おーい、皆、今夜十一時を合圖に敵前に張りめぐらした面憎い鐵條網破壊の大任を俺は引き受けて来たぞ。我と思はんものはこゝへ来て我が配下に集まれツ。」と呼び出した。と、

「軍曹本當か。」と聞いた者がある。

「本當だ。」

「そんなら俺ら行くべい。」と茨城辯で志願する者があつた。

「有難い……齋藤一等卒殿か……あとまだ六人あるぞ。」

「おう、そんなら俺も行く。」

「俺もつれて行つて下さい。」

「さう、大勢でわい／＼言つてもいかん。到着順だ。」

到着順で極める盛況を以て締切つた勇士の面々は、上等兵山下健次郎、同じく手島才助、大野

平吉、小川福太郎、菅澤六右衛門、豊出宗八の六名である。

人選が終ると同時に、萬般の準備に取りかゝつた。十一時の出發には、まだ大分時間がある。各自故郷へ宛訣別の手紙を認めた。

「誰だい。女の寫眞やなんか見ながら手紙を書いてゐるのは。」

「うるさい。俺が子孫に残す寶を書いてゐるのを……止める。」大後は、喧々囂々の陽氣。

愈々出發の時 が来た。中隊長は

「一寸待つてくれツ。」と、命を傳へて中隊全員を整列させ、陣地の出端づれまで一行を見送り、

いよ／＼之から敵地といふ所まで、八人の決死隊の勇士と、全中隊とを相面して整列させた。

「昔聞いてくれ。内田軍曹以下こゝにゐる八名は、今夜鐵條網破壊のため、決死隊となつてこれ

から出發するのである。中隊は一同に向かつて別かれの敬禮をするのだ。敬禮ツ。」

この崇高な月下の訣別 悲壯な光景、この時誰かい、

「チエツ、馬鹿にして、もう死んだ者なんかのやうに、皆して敬禮してやがらア……。」と言つ

たので、一同は思はず吹き出して了つた。敬禮が終ると中隊長は一行の前に一歩進み出て、

「皆の今度の任務は、我が全聯隊の浮沈の分れる所である。最も重大の任務であるから、充分の覺悟を以てやりとげて貰ひたい。然し君等は決して死んでくれるな。無事に任務を果して歸つて来てくれ。これが最後の杯ぢや。一口づつので行つてくれ。」

中隊長は、自ら水筒を取り出して一口のんだ。そして之れを飲み廻すやうに内田軍曹に渡した。惨たる月下の下、最後の水くみ交して別かれを惜しんだ。

一行が別かれを惜んでゐる間に、雲は俄に曇つて来た。一陣の狂風はサツと大粒の雨を落して来た。決死隊はいよ／＼この雨の中を出發して行つた。

### 中隊の名譽

天を拜し地を拜し つゝ一行は突進して行つた。各砲臺は一せいに探照燈に點火し、頻々と光弾を發射して蟻の這ひよるのをも發見せんものと警戒してゐる。この中を内田軍曹以下八名の勇士は全身くしよぬれになり乍ら、四つん這ひになつて鐵條網に近づいた。

そして、愈々これからその破壊に取かゝらうとする時、敵に發見されて了つた。一發鐵條網に

當つてチャリンと異様な音を立てたのを始めとして、機關銃小銃、さては各砲臺から打ち出す砲丸は或は杭に、或は鐵轂の板屋根を打つよりもはげしく降つてくる。天には雷鳴、地には砲聲、鐵火の雨と銃火の霰は、互ひに其の威力を争ふものゝやうだ。だが、この位のことにははじめから覺悟の前だ。死んでも、この鐵條網は壊して仕舞へど、無二無三に作業をつゞけてゐたが、この附近は、恨みも深い八月二十一日、我が軍の全滅となつた所かしこに此處に累々と重なつてゐるは、すべて我が忠勇な將士の死屍である。これらに向つて、「明日は必ず仇を取つてやるぞ。」と、叫びながら尙も切斷を續けた。この時この鐵條網の外に大規模の木製の防禦物のあるのを發見した内田軍曹は、「鐵條網はこれ位にして、こいつを壊して了へ。」と、八人力を合せて大破壊をはじめた。かくと見た敵は、この時味方の小隊なのに氣がつくと堡壘中からどつとどつとび出して來た。しかし敵の出てくるのは一歩遅かつた。軍曹はもう存分に目的の破壊を遂げて、「逃げる」とばかりに山を駆け下つてゐた所であつた。そして無事に夜明け頃には、露營地にかへることが出來た。

「内田軍曹、偉いことをしてくれた。全く中隊の名譽だ。有難う。」  
 中隊長は、涙さへ浮べてゐた。そして交る交る八人の手を取つて喜ぶのであつた。  
 命令一下 直ちに攻撃に着手した。だが、目的は達せられず、漸く堡壘のある山の中腹まで前進したが、敵の筒口を揃へた機關銃のために、何といつても面のむげやうがない。強いて進まうとすれば、百人が百人必ず死ぬのだ。中隊長は一時前進を中止して、第一小隊から下士以下三名を出して、突撃地點の偵察及び地雷の有無を確かめさせやうとした。しかし如何に何でも、この激しい戦闘中、眞晝間、この彈丸をくゞつて行くには、體が鐵か針金のやうな細いものでなければ駄目だ。誰一人として私が行きますと申出る者がない。  
 その時、私を行かせて下さいと申出たのは、  
 内田軍曹 であつた。然し中隊長は  
 「内田軍曹はいかん。誰か外にあるだらう。」  
 と許さなかつた。ところがその誰かゝゐないのだ。内田軍曹はもう我慢が出来なくなつた。  
 「中隊長殿行つて來ます。」といふと、もう散兵線を飛び出してゐた。そして、

「笠原上等兵、谷口上等兵、俺と一緒に行くんだ。續けッ。」と山を登りはじめた。ついで、笠原谷口上等兵が駆け出した。

「内田軍曹、谷口、笠原上等兵しつかりやれ。」八方から味方の聲がかゝつた。

「うむ、やるぞ、今日は晝間の舞臺だ。見てをれッ。」

と許り、三人は敵壘めざして眞一文字に進んで行つた。

俺には弾丸が當らぬ

敵の砲臺から どん／＼狙撃して来た。

足許にブツリと云つたかと思ふと、耳の邊りをシュツ／＼と通つた。危険、實に危険である。

やうやく敵の堡壘の横、山腹の凹地を目がけて三人は、疾風のやうにとび込んだ。穴からヒョイと首を出しては附近を見定めて略圖を書く。また首を出しては見取り圖を引くのである。が、その首を出すことに狙撃の弾丸が、バリ／＼と降ってくる。十何回と首を出したので、やつと一通りの見取り圖が出来た。

さて、歸還だが大變だ。一寸首を出してさへ、弾丸が十五六發づつとんでくるのを、いよ／＼とび出したとなつたなら、待ち構へてゐた狙撃丸が何百發とんで来るか解つたものではない。死ぬ命は惜しくはないが、死んで了つてはこの折角得た略圖を報告することは出来ない。

「南無八幡大菩薩。」

と、内田軍曹は、心の中に念じ乍ら、穴をとび出し、百五十メートルばかり殆んど一ととびに駆けぬけて、そこにあつた窪地へ身を躍らした。

「おゝ、笠原……谷口も大丈夫だつたか。」

「大丈夫です。」

「あッ、しまった。見取圖を落してしまった。」

「それは大變、私が行きませう。」

「いや、俺が行つてくる……待つてゐる。」と、穴を出やうとすれば、二人は、軍服の裾を捉へて はなさない。

「内田軍曹、危険です……略圖は記憶で書けばいゝでせう。」

「いや、大丈夫だよ。俺には弾丸はあたらな。一と走りだ。」  
と、振り拂つて、元来た道を、彈雨の間を再び駆け出した。

あゝ何といふ大膽さであらう。

穴を出て約五十メートルも走つたと思ふ頃、ヒヨイと傍らを見れば、草の中に略圖が落ちてゐる。それを拾つて全速力で走り出したが、やつと二人のゐる穴の中へ歸りついた時は、あまりの皮勞でグツタリ倒れて人事不省になつた。

「内田軍曹しつかりなさい。」

「内田軍曹、水であります。」

谷口上等兵が水筒を口にしていると、ごくく〜と水をのんだ。それでやつと意識をよびもどした。

「おい……笠原……それから谷口上等兵……この略圖を早く、中隊長のところへ持つて行けつ。」と、一と先づ二人を先にかへし、自分は報告さへ終れば、死んでも決して惜しくはないと悠々と味方の陣地へかへつて行つた。

先刻から手に汗を握つて待つてゐた中隊長始め戦友は、一時に萬歳を叫んで軍曹を迎へた。すでに突撃地點の偵察もとげた。地雷埋設の有無も解つた。しかし突撃の機會は來ない。そして、その日も遂に暮れて、翌れば二十日、未明から我が軍の砲兵陣地では、

九十門の大砲は一齊に 敵壘めがけて發射された。

この連続砲撃が數時間に亘つて行はれたので、流石の敵壘も少しは其の勢力を殺がれた。

午後一時、天地も崩れるかと思ふばかりの大喊聲が起り、全軍一齊に競ひ起つて敵壘めがけて突撃した。我が内田軍曹は、この時にも中隊の眞先きに立つて突進し、工兵の架した長梯子を渡つて敵壘に突入した。

そして、その日の二時頃確實に、敵壘を占領し重なる戦友の仇を酬ひたがこの激戦に我軍の傷害は多大に及び、中隊長、高尾少尉負傷、正田特務曹長以下戦死負傷八十四名に及び、健全者は第十一中隊に於ては僅かに三十七名しかなかつた。

敵前で晝寝する

内田軍曹の武勳 は、以上の二三にとゞまらない。その後も各地に轉戦して殊勳を立てたが、最後に是非とも書き加へておきたい逸話がある。

事或は軍人として呑氣すぎるといふ非難があるかも知れぬが、軍曹が如何にその剛膽であるかを尤もよく物語つてゐる挿話の一つである。

時は五月二十五日、内田軍曹は中隊長の命を受けて五名の部下をつれて尙金山附近の敵偵察に出かけた。

そして一行は山間を歩むこと三時間、標高百五十メートルの山頂に登つた時、こゝからは金州城を始め要害無双と傳へられた南山の敵陣地が手に取るやうに見渡された。軍曹は、山頂の草の上に腰をおろして鉛筆をなめながら略圖を認めてゐた。

連れて來た部下は、別に仕事もないので、草原にねころんでゐた。

滿洲の五月は春の眞盛りだ。一行は餘りの心地よさに、うとくとしてゐた。軍曹もいつしかその仲間入りをして、身は硝煙彈雨の戦地にあることも忘れて、すっかり寝込んでしまつたのである。

いゝ心持に寝てゐた軍曹は、

突然横腹を いやといふ程突かれたので吃驚して跳ね起きた。そして、抱へてゐた銃を取り直し前方を透かして見れば、

「しまつたッ。」そこには、銃を手にした敵兵が二三十、何も知らずに寝てゐた一行を取巻いてしまつたのだ。捕虜か、戦死かと覺悟の臍を固めた時、

「内田軍曹。」といふ一言、實際軍曹は百雷の一時に頭上に落ちかゝつた如く驚いた。

「やッ、佐藤中尉殿。」

「どうしたのだ。四時か五時には歸る筈の斥候が、日が暮れても戻らぬ。中隊では大騒ぎだぞ。大隊本部に報告して、中隊長殿は非常の心配だ。何でも敵にあつて全滅したのであらうと、八方へ人を出して搜索してゐるのだ。」

この物音に驚いて目を覺ました部下の四人の兵も、軍曹に引き添ふて不動の姿勢を取り固くなつて立つてゐる。軍曹は只々恐縮する外がないのだ。中尉は尙も言葉をつつけて、

「如何に圖々しくも、斥候に來て敵前で、日の暮れるのも知らずに晝寝してゐるとは、實にたま

けた。聯隊一の呑ん氣者とは貴様のことだらう。」

中隊に歸つても、中隊長は勿論、大隊長にまで大目玉を喰つた。その後

南山の激戦には正面の敵壘に突撃する事になり、中隊の最先頭に起つて、すでに約五十メートル程の近くに迫つて、支那墓地の所までくると、こゝには軍曹より先に來てゐる兵がゐた。

彈丸に打倒れてゐたが、軍曹が近づくと、いきなりその足に縋りついた。

「軍曹……俺あ残念だ。こゝまで來乍ら頂上に登つて萬歳を唱へられないのが残念だ。死んでも死なれない。」と、蟲の息乍ら叫び出す。

「安心しろ。南山は占領したぞ。あの突貫の聲が聞へぬか。」

と、云つたが、もうこの時は、その兵の耳は聞へなかつた。胸部の傷からだら／＼と血汐が流れて、見るまに血を吐いて絶命した。

肩章は確かに一等卒ではあるが、この勇士の襟に記された姓名をまくつて見る暇もなく、ついでに起る味方の突貫の聲に、軍曹は敵壘めざして一番乗りの勇士を見捨てた。いよいよ敵壘に迫つて、いざ飛び込もうとすると、堡壘の中からニョッキリ立ち上つた者がある。

「あッ。」とさがつて見れば敵兵だ。無我夢中で、銃剣握つて突き出せば、物の見事敵の口の中から後頭部へ貫通して、後の土囊を刺すこと五寸餘、敵は聲も立てず死んで了つた。

この戦闘に佐藤中尉は重傷を負ふて倒れた。いち早く之を發見した内田軍曹は、すぐ駆けよつて、中尉を抱き上げ、支那家屋の中へ背負込んで行つて手当を施した。

「中尉殿、しつかりしてください。」

「おゝ、内田軍曹か……」

「中尉殿……先日の晝寝のお禮です。」

「内田、すまない。この恩は忘れんぞ。」と固く軍曹の手を握つた。

硝烟彈雨の戦争ローマンス。兩勇士の面目躍如として眼前に髣髴たるものがあるではないか。

### 悲壯腹一文宇

#### 武運拙し岩崎上等兵

摩天嶺西方高地 時は明治三十七年七月四日、午前二時三十分——戦ひに疲れた我歩兵三十聯隊

の將士は、背囊枕に勝利の夢も酬であつた。と、突如傳令が駈けつけて來た。

「敵の逆襲です。」この報に、陣地は忽ち騒然となり、蹶起した將兵は、銃剣おつとると見る間に天幕前に整列した。小隊長代野吉原特務曹長は、

「敵は夜に乗じて我が小哨吉井小隊を襲はんとす。我が隊は援護の爲に前進すべし。」

と、一同に命令を下した。一同は直ちに出發した。暗々たるの中に靴音高く踏みならして、中隊と小哨との距離約千メートル……前面に怪しい一團の人影を認めた。

「誰だ。味方の兵か。」聲をかけたが、人影は只暗の高梁畑の中に動くばかりで答へない。

「うむツ、敵だ。」

いふより早く、我が兵に銃剣握り占めて命令を待つた。然し、敵は約一個中隊もゐるのである吉原特務曹長は、

「待てツ、敵は優勢だ。こゝは一と先づ退却するがよい。」

と、退却の命を下さうとした。しかし、その時はすでに遅かつた。最も先頭にあつた吉原特務曹長と岩崎上等兵とは敵兵のために退路を絶たれてしまつてゐたのだつた。

「よしッ、此の上はこゝに踏みとどまつて、日本男子の腕前を見せてやらう。」

「さうです。ロスケの膽玉を寒からしめてやりませう。」

勇み立つ岩崎上等兵 吉原特務曹長は用意の日本刀を振りかざし、凄じい勢で敵中に斬り込んだ

「エイッ、この野郎。」振りおろす白刃、敵は早くも八人、吉原特務曹長のために斬り倒された。

そして第九人目と渡り合つてゐる時、無慘！ 林の如く殺到して來た敵の銃剣に、特務曹長は胸元をグツとばかりに貫かれた。

「お、特務曹長殿。」岩崎上等兵は、駈け寄らうとしたが、群がる敵は仲々近よらせない。

「何を小癪なッ。」上等兵は、當るを幸ひ敵を鎗玉にあぐることに三人、勢ひ込んで突き込んだ時、突如として進みよつた敵兵は犂臂をのばして、銃身をぐつと握つた。

「何をするツ、生意氣な。」と、全身の力を籠めて引戻さうとした。然し相手は見上げるやうな大男だ。しかも馬鹿力がある。双方暫らく挑み合つてゐた所へ、バタ／＼駈けよつて來た五六の敵兵、互へに力を合せて岩崎上等兵にむかつてくる。如何に

鬼神の威力あり と、いへども、多勢を敵に只一人、遂に命ともたむ銃を奪はれて了つた。



「残念！」

上等兵は、むざ／＼と捕虜となつて了つた。よし、假令衆寡敵せずとはいへ、捕虜になるとは日本男子の最大の恥辱である。岩崎上等兵は無念の齒齧をして、天を仰いで身の武運拙さを嘆じた。しかし、

「このまゝむざ／＼捕虜となつてはならぬ。一死以て逃亡あるのみだ。」

と、心ひそかに機會を待つた。五人の露兵は、やがて岩崎上等兵を本陣へ護送すべく出發した

### 岩上の血書

道は断崖の小道に、さしかゝつた。岩崎上等兵は私かに護送兵の様子を窺つた。彼等は鼻高々と手柄話に泡を飛ばせ乍ら歩いて行く。上等兵は、

「うむ、今だ。」と、心に叫ぶと、不意に飛鳥の如く躍りかゝつて一兵の銃剣を奪ひとつて、

「えイツ。」

といひざま、只一と突きに刺し殺した。これに驚いた敵兵は、バタ／＼と逃げ出したが、早く

もこれに追ひすがつた上等兵は、又もや美事に刺し殺した。とこの時一人の敵兵は、あはやと見る間に銃剣をひらめかして岩崎上等兵の乳下肋骨をグサツと突いた。

「あッ。」

激痛にたへかねて上等兵は、俄破と倒れた。と、同時に敵兵も勢ひあまつて傍にバツタリ倒れる。死物狂ひの岩崎上等兵は、重傷にも屈せず、すぐさま起き上つて銃を振つて敵兵を殴りつけた。だが、後から後から敵兵の数は増してくるのである。いかに剛勇の上等兵でも、只一人で、この大敵を相手に戦ふのではたまらない。次第に上等兵は苦戦に陥つて行くばかりである。このまゝでわたなら、再び捕虜の恥辱を受けねばならぬ。おゝさうだ、幸ひ右手には千仞の断崖がひかへてゐるのだ。よし、

生死を天に任せ、と、岩崎上等兵は、断崖へ身を躍らせた。しかし、幸ひなことに、身は木葉微塵と思ひの外、何物にかふれたと思ふ時、軀は荆棘の繁茂の中にふんはりと落ちてゐたのであつた。

「ふい。」

岩崎上等兵は、露助の毒手から遁れ得た喜びに、思はず聲をあげた。四邊は水を打つたやうに静かである。だが、迂濶には身動きも出来ない。崖の上には未だ敵兵がある。崖下にも敵兵が三三五々と何物かを探す様子である。

だが、探しあぐねてか、崖下の敵兵は去つて行つた。

「しめたッ。」

天の與へと、岩崎上等兵は荊刺を掻き分け掻き分け、轉ぶが如く河原に下り立つた。だが、軀の疲れと、傷の痛みに堪へかねて、幾度となく打ち倒れた。

朝霧は深く立ちこめて、四邊は依然として静かである。上等兵は轉びつきつ河原を歩いて行く。

夜が明るのであらう。その薄明の光に川上の方を眺めると、確かに敵の大集團がある。下流はと見れば、そこにも徘徊する敵騎！

「駄目だ。これはとても逃げおはせることは出来ぬぞ。」

岩崎上等兵は草むらの中に腰をおろした。

「さうだ。かりなつては仕方がない。男らしく腹を切つて死んでやらう。」

上等兵は、草むらから少しづつ這ひ出した。だが待てよ、死しての後名もなき屍として取扱はれては残念である。上等兵はさう考へた。見ると一本の胡桃の青々とおひしげてゐる。その木かげに大きな石があつた。

「うむ、これだ、この石に書いてやれ。」

岩崎上等兵は、さういふと、傷口から滲み出す血汐を指につけて、

大日本帝國第二師團歩兵三十聯隊第一中隊上等兵岩崎吾吉此處に死す、と、

血書した。その血書を終へると彼は、敵から奪ひ取つた一刀を握りしめ、ザツクとばかりに下腹部中央に突き立て、左手を傷口にあて、靜かに右手の劍を抜きとつた。と、どくどくと流れ出す鮮血！ 忽ち四邊の青草は血汐の海と化した。

だが岩崎上等兵は死ななかつた。どうしたのか死ななかつた。死は岩崎上等兵に背を向けてゐたのである。

その時、何物かが彼の耳元でさゝやいた。

「死ぬのは卑怯だ。生きるだけ生きる。」  
上等兵は起き上った。そして傷口に三角巾を當て、腹巻にして、しつかり押へつけた。  
「大丈夫だ。」  
岩崎上等兵は歩き出した。

生死の境

二歩進んでは休み 三步登つては止まり、岩崎上等兵は前方の山を登つて行つた。そして、何時かの後には、瀕死の軀を山上にまで運んでゐた。四邊を見渡せば、敵か味方、確かに將士がぞわめいてゐる。

「まゝよ、一休みして。」  
と、その場に腰を下すと、急に眠氣がして來たので、岩崎上等兵は、ごろりとそこに寝ころんでしまつた。

何時間眠つたか。突如として起る銃聲に彼はハツと夢から覺めた。と、彼方の山に一隊の軍團

が動き、頻りに射撃をしてゐるのであつた。

「敵か、味方……」

岩崎上等兵は、側目もふらず、その動靜を見つめてゐた。と、この時一人の戦闘斥候が此方の山に向つて前進して來た。見るとそれは味方の服装！ 岩崎上等兵は歡喜に胸をこみ上げて、

「おー。」と叫んで、二足三足いざりよつた。

かくして岩崎上等兵は無事に味方の手に救はれたのである。この時の嬉しさは

到底筆紙に盡せる ところではなかつた。

戦闘の經過を語つて彼一句、我一句、時に看護卒は來つて手を旋らし、擔架に乗せて病院に送つた。

野戰病院 に送られて來ても、岩崎上等兵は苦痛からのがれることは出来なかつた。胸部の刺傷 左上膊の刺傷……殆んど死に瀕して居たので、二日三晩は一粒の食も咽喉を通らなかつた。

おまけにマラリヤ再發、胸膜炎を併發して非常に苦しめられた。しかし天は壯烈な岩崎上等兵をすてなかつた。やがて生死の境から救ひ出すこと三回、遂に彼は生還し得たのであつた。

あゝ勇敢凛烈、岩崎上等兵！

## 風流艦長千鳥の曲

敵艦の目を晦ます

我聯合艦隊の出動 明治三十七年、二月六日、午前一時、佐世保軍港に待機してゐる我が聯合艦隊に出動の命令が下つた。然しその前日の二月五日午後三時には、聯合艦隊司令長官東郷平八郎中將は、旗艦三笠の艦上に主だつた將星を集めて、重大なる軍議が開かれたのだつた。

當時ロシアの太平洋艦隊は旅順に集合して、その数は十六隻を越え、誠に威風堂々たる陣容を示してゐた。又その他としてはワリヤーク號コレーツ號の二隻が仁川にゐるし、ウラジオストツクにも別に三隻の有力なる艦隊が開戦の準備に餘念なかつた。そこで二月五日の軍議では、これらのロシア艦隊を如何にして撃滅すべきかといふ軍議であつて、その三笠艦上の軍議は五日の午後から六日の朝に至るまで鳩首續けられた。そしてその日（六日）の午前一時、正式の出動命令

が下つたのだつた。そして明るる二月六日、軍議成つた我が聯合艦隊は舳艫相俣んで威々堂々波を蹴つて進發を始めた。

ロシアを捕へる 七日の朝まだき、聯合艦隊が朝鮮海峡を西北に向つて進んでゆくと、前方に當つてのろのろと進んでゆく一隻の敵船に打つた。それは我が帝國艦隊に比べると問題にならない程の小つほけな船ではあるけれど、今の場合助けて置く譯には行かなかつた「おい！、待て！」といつて近よつて捕へて見ると矢張りロシアの汽船で、その名もロシア號（總噸數二千三百二十噸）といふ船だつた。

「これは幸先がよいぞ。戦ひの門出にロシアを捕へるなんて全く愉快だ。」全艦隊の將士は躍り上つて、その士氣はいやがる上にも奮ひ立つた。そして威風黄海を壓して尙も針路を北に取つて進んで行つた。そして豊島沖に差しかゝると司令長官東郷中將は、瓜生小將の率ゐる第四艦隊を仁川に向はせ、自分は本隊を引きつれて旅順に向けて突進していつた。

その頃、仁川には敵の巡洋艦ワリヤーク、装甲砲艦コレーツの二艦がゐて、その外にも敵の小艦が投錨して居り、そして我が巡洋艦隊の千代田もそこに碇泊してゐたのだつた。それで、

いち早く我が千代田艦を仁川から救ひ出し、然る後敵艦を撃滅するのが瓜生艦隊の東郷司令長官から受けた命令だった。

千代田うま／＼脱出 我が二等巡洋艦千代田は、三十六年の十二月から朝鮮海岸警備の任務を帯びて仁川に碇泊してゐる中、三十七年に至つて日露の風雲は急を告げ、いつ兩國の火蓋が切つて落されるか判らない状態に立ち至つたのだつた。それがためロシアの軍艦は、いつも千代田艦の兩側に挟むやうな位置をとつて、監視の目を怠らなかつた。千代田が少しでも動かうものなら、一度に兩艦から火蓋を切つて打ち沈めやうと狙つてゐた。然し千代田艦長村上格一大佐を初め、乗員の將士一同は、敵艦の示威運動なんかは屁とも思はなかつた。然し自分の方から手出しをしては損な位置にあるのでちつと我慢して、脱出の機会を狙つてゐたのだつた。

さうした状態である時、いよ／＼兩國々交斷絶の報が韓國にゐる日本公使からそつと傳へられた。と、村上大佐は「野郎共、今に見ろ、一泡吹かしてやるから。」かう呟いて武者振るひをしたのだつた。すると續いて我が秘密電報が村上大佐の許に届いた。「貴艦は速かに出港準備をして、第一地點まで来れ！」さうした命令だった。敵はと見ると、さうした秘密電報が村上艦長の手許

に達してゐるのも知らず、傲岸にもたゞ一隻の日本艦と侮つて、何の戰闘準備もせず、夜毎ダンスやら宴會で、いゝ氣になつて騒ぎまはつてゐた。

そこで七日の夜、村上艦長は全艦の灯をすつかり消し、靜かに錨をあげて、抜き足あし足で、そつと港から脱け出した。その時、港内にゐたイギリス軍艦が、殊更に電光を輝かして碇泊の位置を港の口元の方へ移していつた。それで機敏な村上艦長は、その英艦の蔭にそつと隠れるやうにして英艦と一緒に港口に出ていつたのだつた。そして港の口を一足出るや否や、千代田艦は全速力をあげて南に向ひ、牙山の南方で瓜生第四艦隊に出會つて合したのだつた。

### 逃げ込む敵艦

生のいゝ魚雷の御馳走 村上艦長から仁川港の敵艦の報告を聞いた瓜生司令官は、ニツコリ笑つて、直ちに仁川港に突進の命令を下した。脱出の千代田艦を先登にして、堂々の艦列を作つて大膽にも仁川港内に入つていつたのだつた。

と、その有様を見た港内のコレーツ號は、何を血迷つたのか、全速力で我が艦隊の方に立ち向

つて来た。然しこれは立ち向つて来た譯ではなく、日本艦隊来るの報に脅えて、いち早く旅順に逃げて行かうとしたのだつた。これを見ると我が艦隊では直ちに水雷艇隊に命じて、コレーツ號の進路を塞ぎ、コレーツ號の周圍を水雷艇隊でぐるりと取り圍んでしまつた。

それを見たコレーツ號は大いに驚いて、何を血迷つたのか大砲を打ち初めた。

「いよいよやりやがつたな。では一つ生のいゝ奴を一發御馳走してやらう。」待ち構へてゐた我が一水雷艇は命中率百分の魚雷を一發發射した。然し、その魚雷は敵艦の横に外れて命中しなかつた。

そこで旗艦浪速の瓜生司令官は新高、明石兩艦を引きつれて、コレーツ號の横に進み寄つていつた。それを見たコレーツ號は、全く度膽を抜かれてふるえ上り、港内にゐる僚艦ワリヤーク號に助けを求めながら、港内に走りこんで小さくちこまつてしまつた。

これまで仁川港内で倣岸不遜に振舞つてゐたワリヤーク、コレーツの二艦も今や四方から日本艦隊に睨みつけられてゐるので、全く手も足も出さずちつと小さくなつてゐる哀れさだつた。

嬌々たる千鳥の一曲 その日の午前七時瓜生司令官はワリヤーク艦長に書面を送つて、「本日午後

後一時までに貴艦は港外に出て來られたい。若し命を諸かなかつたら港内で砲撃するからその積りで——」かうした通告をやると同時に仁川港に碇泊してゐる各國の諸艦にもそれ／＼危険の通告を與へておいた。

それで今は逃れぬ處と観念した敵艦は、正午近くなるとおす／＼港を出て來た。敵の二艦はワリヤークを先頭に、コレーツ號を後にして、それでもマストに戰闘旗をあげてゐるのだつた。そして、敵味方の距離が五千メートルの間隔になつた。我が淺間艦の砲手は砲弾に弾を込めて發射命令を今や遅して待つてゐた。

その時ふと何處からとなく嬌々たる尺八の音が海上を這つて緊張した人々の耳に傳はつて來た。將に敵味方火蓋を切らんとするそのさなかに、海上を這つて聞えてくる一陣の尺八の音、そして然もその曲は波に戯れ遊ぶ千鳥の一曲だつた。緊張しきつた全軍の將士たちは、一度に嘖然として、その千鳥の曲の響いてくる方向に目を走らせた。

「將に兩軍火蓋を切らんとするの何といふ落付拂つた奴だらう。」かう將士たちは囁き合つて、その主の風流さと度胸に驚き呆れたのだつた。その尺八の音は常に風流艦長の名を謳はれてゐた

八代六郎大佐が、甲板に端坐して、敵を前にして悠々名残りの一曲を吹きすさんでゐたのだつた。今や八代艦長の念頭には、戦ひもなく、敵もなく、砲弾の音も何もなく、たゞ無念無想の境地にあつて、悠々と吹すさんでゐるのだつた。

しほの山、さしでの磯に鳴く千鳥

君が御代をば八千代とぞ鳴く

吹来り、吹去つて翳々たる餘韻は、全軍の將士たちを全く魅了し盡して、勇士達をして血腥い戦場にあるのを忘れさせるに充分だつた。暫くして一曲を奏し終ると八代大佐はニッコリ笑つて静かに尺八を手にして立ち上つた

「さあそろ／＼打つ放すかな。白石大尉、日露戦争劈頭の第一弾を君が打つ放し給へ！」

かう命令を與へた。その命令一下、勇躍した白石大尉は前部八吋砲の狙ひをきつと敵艦に向けて定めた。「撃てー」の號令一下、砲は轟然たる唸りを生じて、空を切つた。これぞ日露戦争の最初の一弾であつて。史上前古未有の大海戦の幕が、この白石大尉の一發の砲弾によつて切つて落されたのだつた。

このたつた一發の砲弾にすつかり血迷つた敵艦は、直ちに盲滅法に打ち初めた。然し全く逆上し切つた敵艦の敵艦は一發として我が艦に命中するものは無かつた。我が浅間艦の放つ弾丸は敵艦の周圍に水柱をあげて落下した。そして彼我が距離が近づくに隨つて、浅間艦はいよ／＼猛烈に攻めたてた。

と、我が後部八吋砲の一弾は、ワリヤークの前部の艦橋に命中し、續いて又白石大尉の指揮する前部八吋砲も、ワリヤークの烟突と艦橋との間に命中した。そして一大爆音と共に、眞赤な焔が敵艦の真中から吹初めた。一方コローツ號も初めの中は勇敢に戦つてゐたけれど、段々我が浅間艦の猛烈な攻撃に慄え上つて、次第にしどろもどろになつて來た。そして、撃ち出す弾丸も一發として我が艦には届かなく、反對に我が浅間の放つ弾丸はびゆん／＼唸りを生じて敵艦の各處に命中して、多大の損害を與へたのだつた。

堪らなくなつたワリヤーク號が火烟を吹ながら、跛を引いたやうな恰好で仁川港内に逃げこむと、これを見たコローツ號も、臆病風に誘はれて同じく仁川港内に逃げこんでしまつた。港内に逃げこんだものを砲撃すると他國の軍艦に迷惑をかけるので、我が浅間艦も追撃を中止した。け

れど、近よつて見ると二艦とも散々に撃ち崩されて、放つて置いてもいつかは自然に沈没しやうな状態だつた。それから間もなく、午后四時過ぎ、轟然たる爆音と共に二艦は海底に沈んで行つたこの序幕戦で働いたのは浅間艦たつた一隻で、後の我が艦隊は演習でも見物するやうな氣で、手を叩いて笑つて高見の見物をしてゐたのだつた。

## 浪間に轟く軍歌

### 悲壯なる運送船の最後

飾物の砲臺 卅七年の二月の末になるとロシヤの浦鹽艦隊がアスコルド島に根據地を設けて、盛んに何事かを目論んでゐるといふ風聞が擴がった。それから三月になるとそれらの浦鹽艦隊が元山沖に現はれたといふ情報が入つて來た。さういへばロシヤの陸軍が、續々朝鮮に入りこんでゐることが判明した。それに浦鹽艦隊が陸軍兵をこつそり元山の何處かに上陸させたとしたら、日本にとつては誠に都合が悪いのだつた。これを知つた上村司令官は急遽七隻の軍艦を率ひて三月六

日アスコルド島に出動し、更に進んで浦鹽の様子を監視すべく出かけた。その日は猛烈な寒氣で、各艦の舷側や甲板の上に飛び散つた海水は忽ちの中に凍りついて、海面も一大氷原を呈してゐた。然し我が艦隊は氷の海を突き破つて突進し、浦鹽斯德に迫つていつた。

浦鹽港の海岸から見上げると、四面は全部敵砲臺でがちり構へて、嚴重極まりない備へだつた。それで、その中一番備への薄い方面から近よつていつて、山越に砲撃を加へて見た。然し不思議にも敵砲臺からは何の影響もなく、ひつそりかんとしてゐる。それはまるで飾物の砲臺のやうに、構へは頗る嚴重だけれども、不氣味に押し黙つて一發の砲弾も打つてよこさなかつた。それで手答へのないのに業を沸かした我が艦隊は、尙も間近に迫つて再び砲撃を加へて見た。然しやつぱり砲臺は無氣味な沈黙を續けてゐるのだつた。すつかり張合抜けの上村艦長は、砲撃を中止して引き返すことにした。そして途中、シベリヤ、滿洲、朝鮮の要處々々を偵察しながら黄海にある根據地に立ち歸つて來たのだつた。

だが浦鹽艦隊はこの時、港内深く縮まつてゐた事が後になつて判つたのだつた。その時上村艦



隊がもう少し港口に頑張つてゐて、出て来た浦鹽艦隊を木つ葉微塵にしてしまつたなら、後になつて幾多の大きな悲惨事が起らなかつたのだつた。然しその時は、浦鹽艦隊は全く港内にゐないものと思ひこんでゐたし、それに上村艦隊としても浦鹽の港口ばかりにいつまでも頑張つてゐられない事情があつて引返したため、遂大きな獲物を取り逃して、大きな不幸が次から次と湧き起つて来たのだつた。

北海の惡龍現はる 三十七年四月の二十二日、上村中將は第二艦隊を引きつけて、元山沖から行く浦鹽艦隊を偵察しながら、北征の途に上つた。今度こそ浦鹽艦隊に目に物見せてくれんもの、と針路を東北に取つて進んでいつた。然し二十三日の日は北海特有の濃霧が猛烈に立ちこめて、一寸先も見えなくなつて、如何せん進行が出来なくなつてしまつた。

これでは敵艦が目と鼻の先に来ても判らない譯で、これ以上進むことも全く不可能だつたので艦首を廻らして歸路につくことになつた。然し海上一面に立てこめた猛烈な濃霧のため、三晝夜近く海上をさまよつて漸く元山の根據地に歸つて来た。然し立ち歸つた上村艦隊は留守の間に大事件が起つてゐたのを始めて知つた。それは上村艦隊が浦鹽に出動してゐる間に、浦鹽艦隊が元

山方面至る處で亂暴狼籍を働いてゐたのだつた。丁度四月二十五日に突然ロシアの艦隊が元山港に現はれて、同港に碇泊してゐた我が商船五洋丸を無警告で撃沈してしまつたのだつた。又同じ日、我が帝國の運送船金州丸が、我が守備兵を満載して元山から北の方利原に向つて出動した。そこで第十一水雷艇隊に護送された金州丸は、利原に到着して、利原の形勢を偵察した處、ロシア陸兵の上陸は噂に近く、大したことでもなかつたので、再び金州丸は守備兵を載せて歸航の途に就いた。

だが天候は遽に險惡を加へて来た。護衛の水雷艇隊は途中で止まることになつたので、金州丸だけが單獨で歸航すべく、新浦沖に差しかゝつたのであつた。

間もなく天候も収まつて、晴れた海上の空の眞上に月が靜かに輝かし初めた。と、金州丸の行く手に當つて堂々たる大艦隊が三隻、忽然と姿を現はし初めた。いや大艦隊ばかりではなく、近くには三隻の水雷艇までもニツキリ姿を現はして、次第々々に金州丸に向つて近づいてくるのだつた。これを見た金州丸の全員は、なつかしい我が上村艦隊の歸つて来たものと思つてなつかしさに、次第に近よつてゆくのだつた。然し、それはなつかしい我が上村艦隊の一行ではなかつ

た。接近するに随つて、それは北海に暴威を振ふ海の悪龍、浦鹽艦隊であることが判つた時の全員の驚きは誓ふるに物がなかつた。

## 兵員血みどろの血戦

露助をやつつける！ 金州丸は海の悪龍浦鹽艦隊の姿を見つけた時に、もう萬事休すと思つた。何といつても敵は堂々たる軍艦、こちらは非武装の一運送船、その勝敗は餘り明白りし過ぎてゐるのだつた。

この時、敵艦は空砲を放つて我が金州丸に停船を命じた。そして信號をもつて、

「全員一同の武装を解除して直ちに降服せよ、その間一時間の猶豫を與へる。そして一時間後は本船を撃沈するから承知せよ。」かうした我にとつては無禮極まりない信號を送つて來た。

それで到底勝算のないことを知つてゐた戦員や、又非戦闘員は、殘念無念の齒がみをしながら本船を離れたのだつた。然し勇武をもつて世界に鳴る大和男子の陸兵たちは、いかに勝算はないといふものの武装を解いて降服する氣にはなれなかつた。いや、そんな卑怯な軍人は日本人には

只一人としてないのだつた。それで陸兵たちは出來ることなら波の上を突撃して敵艦に迫り、敵兵を斬り倒して勇ましく死んで行きたかつた。然しそれも絶體に不可能な事だつた。然し中には血氣盛んな兵士が銃劍の儘突撃しやうとして舷側まで走り駆けよつて、今にも海中に飛び入つて泳ぎつかうとした勇士もあつた。

四月二十一日午前一時になると、露艦は信號通り魚形水雷を發射した。水雷はまるで生き物の如く停船してゐる金州丸めがけて、白波を切つて突進して來た。そして金州丸の舷に命中して、そこを破壊した。と、第二の魚形水雷も金州丸の船腹を貫いた。それが爲め金州丸の船體は二つに割れて、今にも折れんばかりの損傷を蒙つてしまつた。

「もうかうなつたらどうせ生命はないのだ。露助の一匹でもいゝからやつつける！」かうした叫びが兵員の間から發せられて、兵員は傾きかゝつた甲板の上から散兵線を敷いた。そして、「打て！」といふ指揮官の命令一下、どどどどどと猛烈な一斉射撃を敵艦めがけて浴びせかけた。

「彈丸を一發たりとも海に沈づめてはつまらない。全部打つ放してしまへ！」中にはかういひながら無茶苦茶に打ちまくる兵士もあつた。これを見た敵艦も、黙つてはゐなかつた。直ちに砲門

を向けて猛烈な速射を始めた。かうした不思議な戦闘が暫くの間堂々たる敵の軍艦と我が沈みかゝつた金州丸甲板上の陸兵との間に続けられた。

然し魚形水雷一發喰つたため大破してゐる金州丸は、次第々々に浸水していつて、刻一刻と海中に沈んでゆくのだつた。我が陸兵達は、乗つてゐる金州丸の沈みきらない中に、持つてゐる弾丸の最後まで打ち盡してしまはと、敵艦めがけて、必死になつて打ちまくつた。この烈しい應戦ぶりにすつかり面喰つてしまつた露艦は、これは少し當てが外れたと思つたのか、近よつて行つたら怪我をすと思つたのか一度は砲撃を中止したのだつた。そして暫く退いて遠くの方から金州丸の沈むのを見守つてゐるのだつた。

その中海水は次第に甲板を侵し初めた。それで甲板の上に伏射の姿勢をとつてゐた我が陸兵達は、膝打の姿勢をとらなければならなかつた。そして水が尙も深く浸入して來て膝を没し初めると、今度は膝打の形から立打の姿勢をとつて、尙も手を弛めやうとはしなかつた。

然し運命は將に迫つて來た。恨みを呑んだ我が幾多の將士たちは、水が次第に首の處まで迫つてくるに及んで、それにすつかり持つてゐた弾丸も打ち盡してしまつたので、やつと銃を敵から

空に向けて射撃を中止した。そして敵艦をぐつと睨みつけながら、聲を揃へて「日本萬歳！」天皇陛下萬歳！」を聲高らかに三唱した。そして三唱を終ると、いつも歌ひ續けてゐた自分の聯隊の軍歌を合唱した。その軍歌の合唱が波間に次第々々に細く消えてゆく時、我が忠勇極まりない幾多の將士達は、逆まく海中の中に沈んでいつたのだつた。

見守つてゐた露艦の全員は、餘りに悲壯極まりない日本軍の最後に、思はず砲撃の手をやめて、おつと無言で見つめてゐるだけだつた。

かうした悲壯極まりない情報直ちに上村艦隊に達せられたので、上村艦隊は急遽現場に向つて直航したけれど、時は既に遅かつた。敵艦の姿はどこにもなく、日本軍の一人の漂流する姿も見することは出来なかつた。

海ゆくかば水づくかばね大君の邊にてそ死なめかへりみはせじ——

噫、この時大阪三十七聯隊、第九中隊の勇將猛卒の、天佑によつて生を助かつたものは僅に二十名、後の全員は残らず元山沖の水底深く無念の恨みを呑んで沈んでいつたのであつた。

# 決死の閉塞隊員

## 血書志願者の殺到

狂瀾怒濤をついて 第一第二兩回に亘る旅順の閉塞の壯舉は、敵の心膽を寒からしめたと共に、日本武士の眞價を發揮して、世界の人々を驚歎させた。然しその二回に亘る旅順口の閉塞の壯舉も完く完全とは言はれてなかつた。敵艦も不自由ながら出入が出来て、いつ飛び出して来て我が陸兵輸送の邪魔をしないと限らなかつた。若しそんな破目になつたなら、陸軍の作戰にも手違ひが来るので、今度こそ愈々思ひ切つた第三回の閉塞を執行して、敵艦をして一隻たりとも旅順口から一步も外へ出さないやうにしやうとして企てた。

この第三回の閉塞執行が發表されると、我も我もと決死の志願者が殺到して、瞬く中に二萬餘人に達してしまつた。中には手足を斬つてその滴る鮮血で血書して志願した者も五百人を越す有様だつた。然しかうした多數の志願者では一々町寧に選んでゐる譯には行かないので、抽籤で二

萬餘人の中から百五十九名を選び出した。そして閉塞船も思ひ切つて多くして十二隻が、その任に當る事になつた。その船と指揮官の名を次にあげると、

- 一、三河丸 原盛大尉指揮官
- 二、佐倉丸 白石大尉指揮官
- 三、遠江丸 本田少佐指揮官
- 四、江戸丸 高柳大尉指揮官
- 五、愛國丸 犬塚大尉指揮官
- 六、小樽丸 野村大尉指揮官
- 七、相模丸 湯淺大尉指揮官
- 八、朝顔丸 向大尉指揮官

外に小倉丸、釜山丸、長門丸、新發田丸の四隻が加はつて、總指揮官としては林海軍中佐が決められ、八島、敷島、初瀬の三艦に守られ、第三、第四、第五の水雷艇隊の各艦に分乗して、三十七年五月一日午後五時、嚙喰たる軍樂に送られて、根據地を出發した。

時に狂瀾怒濤逆巻き、天候は勇士の出發を送るには餘りに險惡だつた。東郷司令長官もこの險惡極まりない天候と暴風とを心配せられて、「天候不良なるが、總指揮官の意見如何？」と三笠から信號をもつて訊ねられた。然し林中佐は「風強けれど旅順港の海は靜穩なるべしと信ず。今夜是非とも決行す。」と直ちに信號をもつて答へた。命は大君に捧げた決死の閉塞隊員一同は、少しい位の風や大波にはビクともしてゐないのだつた。そこで東郷司令長官も全員の決死の緊張を知つて、強ひては止めず林指揮官の意志通りに任せた。

そこで二日午後七時半、閉塞船隊は艦隊に別かれて十二隻列を正して、一直線に荒れ狂ふ怒濤突いて突進していつた。然し風は益々強く吹きつけて、山の如き怒濤は老朽の閉塞船をさながら木の葉の如く翻弄して、進退の自由思ふに任せなかつた。そればかりではなく、船に乗せてあるボートが大波の度に舷側から波に奪ひとられて、決死の覺悟をきめてはゐるものゝ、勇士達の心を一入暗くさせるのだつた。林中佐も餘りの荒れ狂ふ怒濤に閉口して「今夜の行動は中止、各船共根據地へ歸還せよ」と信號を發して知らせた。

先頭第一三河丸 然しさうした林總指揮官の命令も風浪の爲め、各船に達しなかつた。時既に遅

く各船共ちり／＼ばら／＼に荒れ狂ふ大波に吹きあてられて、さうした林中佐からの信號は徹底しなかつた。新發田丸、長門、釜山、小倉の四船にのみ通じただけで、残りの八船は一生懸命怒濤と闘つて港口目掛けて突進して行くのだつた。中にはその信號を受けとつた船もあつたけれど僚船がぐん／＼怒濤を突いて敵地に進んでゆくのをみると、自分だけ引き返すのもどうかと考へて、無二無三に突進して行くのだつた。

それを見るや林指揮官は満面に朱を注いだやうな顔付をして、「かうなつたら仕方がない。各個にぐん／＼進め！ そしてよい位置を占めろ！」かう大聲で下知を傳へるのだつた。

と、天は益々暗く狂瀾はいよいよ荒れ狂つて、その間にも早くも我が閉塞船の出動を知つた敵砲臺から砲彈の火蓋が切られた。これを知つた匠達大尉の指揮する三河丸「我こそ一番駆け！」とばかり、めり／＼と港口に突入して行つた。

敵は我が第一回第二回の勇壯極まりない閉塞振りにすつかり度膽を抜かれて、慄え上り、「この調子では第三第四といつやつてくるか判らない。港口を閉塞されては手も足も出なくなつて袋の鼠だ。それでは堪らなう。」

といふ譯であらゆる嚴重なる攻撃法と防備が施されてゐた。それで、高い處からの砲撃はうまく命中しないといふので、低地に大砲、小砲や機關砲を夥しく備へつけて、又港口の内外には二條の防材が嚴重に設けられて、これには直徑二尺、長さ二間位の丸太を結びつけて筏のやうに處々に浮かせて、それに突き當ると爆發するやうに水雷が仕掛けておかれた。さうした筏と水雷の仕掛が港の内外に二重に設けられて、先頭第一に突き進んで来た匪蹙大尉の三河丸は、こいつに打つかつて、めり／＼と音を立てたのだつた。

突進！突進！自沈！爆沈！

匪蹙大尉の剛膽 三河丸の指揮官匪蹙大尉は泉州堺の出身で、明治三十六年九月赤城艦航海長を拜命した頗る剛膽な勇士だつた。閉塞隊に加はる時、己れの頭髪を剃つて紙に包んで、その上に「お笑ひ草」と認めて赤城艦に残して三河丸の指揮に當つた決死の勇士だつた。

匪蹙大尉指揮のその三河丸は、三日の午前二時頃黄金山の南方六海里の處に達したけれど、その時は僚船の姿もなく、全くの一人ぼつちだつた。續く僚船の來るのを暫く待つて見たけれど、

仲々僚船の姿が見えないし、それに港口の方で盛んな砲聲がするので、「これはしまつた。取り殘されたわい。さあ急げ／＼。」といふ譯で、全速力で港口目掛けて突進していつた。丁度その時、向ふから味方の水雷艇が走つて來たので、「他の皆はどうしたのか？」と訊ねた。すると水雷艇からは「まだ／＼君の船が先頭第一番だ。しつかりやつて來い。」といふので、今まで感違ひしてゐた匪蹙大尉はすつかり安心して喜んでしまつた。

それで尙もぐん／＼進んでゆく中、敵弾のため舳の處から火災を起し初めた。然しそれも近くの水雷の爆發によつて、數丈の水煙をかぶつてその火災も消えた。そして筏に打つかつて、それを押し分けて進むと、やつと水道と覺しい處へ來たので、匪蹙大尉はそこで船を止めると、錨を海に投げこんで、首尾よく爆發を終つて船は都合よく水道に直角の形で横はつたのだつた。

そこで、全員はボートに乗り移らうとした。けれど一隻のボートは敵弾に碎かれて役に立たずもう一隻は波に掠はれて形も見えない。仕方なく最後の小さなボートに乗り移つて漕ぎ初めた。これを見た敵の哨艇は一齊射撃を加へながら追ひかけて來た。そこで全員は刀を抜いて近よつたら斬つて棄てやうと身構へたけれど、敵艇も味方の砲臺から打ち下す雨霰の如き彈丸に危険を感

じて近寄れなかつた。その間に匪徒大尉は大波の間に隠れて敵弾を避けながら、やつと危地を脱したのだつた。そして全員意気揚々と軍歌を歌ひながら漕いでゐると、我が四十一號水雷艇が突進してくるのに出會つて、こゝで匪徒大尉指揮する三河丸全員の決死隊員は無事に收容されたのだつた。その中只一人、十九歳の蝦谷三等機関兵だけが爆發する直前に、敵弾のため名譽の戦死を遂げたので、三河丸の犠牲者としては蝦谷機関兵一人だつた。

白石大尉の勇名 三河丸に續いて第二番に進んでいつたのは、剛勇無双をもつて全軍に鳴り響いてゐる白石大尉の指揮する佐倉丸だつた。この白石大尉はかつて日露海戦に於て最初の砲弾を打つ放して敵艦の膽を寒からしめた勇士で、それに付き随ふ十數名の部下も全く生命知らずの勇士ばかりだつた。この白石大尉の指揮する佐倉丸は、五月二日の夜半黄金山の砲臺の燈を目標に、荒れ狂ふ怒濤を突いて突進した。三日午前二時頃、港口より近く遽に烈しい砲聲が轟き初めて、暗を透かして見ると一隻の閉塞船が彈雨の眞只中を無二無三に突き進んでゆくのが見られた。「先頭一番は三河丸だ。三河丸に遅れて恥をとるな！進め〜！」と大聲を發して、三河丸の後を追ひかけた。と、港口に近く突き出た岩の邊まで進み來つた途端、無残にも敵の敷設した魚形

水雷に觸れたから埒らない。轟然たる一大音響と共に、船體は微塵に碎かれてしまつた。それがため全員一人残らず海中に投げだされて、激浪の間に見えなくなつてしまつた。我が軍では最初の間この佐倉丸の全員は激浪にさらはれて溺死したものと思ひ込んでゐたのだが、處がさうではなかつた。勇敢無双をもつて鳴る白石大尉以下二十數名の勇士達は、無事海岸に泳ぎついて日本刀を振り冠つて、敵砲臺に突撃したのだつた。そして縦横無心に暴れ廻つたが、終に刀折れて一人残らず勇壯極まりない名譽の戦死を遂げたことが、戦後敵軍の手記から判つた。

敵弾のため耳が聳になる 第二番目の佐倉丸に續いて乗りつけたのは本田少佐指揮する遠江丸だつた。この頃になると閉塞船もぞくぞく港口近くに姿を現はして來たため、敵の砲撃は益々猛烈になつて、閉塞船の前後左右に雨霰と降り注いだ。然し、決死の勇士を乗せた遠江丸は敵弾の雨など物ともせずぐんぐん進んでいつた。と敵弾の一つが遠江丸に命中して、忽ち船は火災を起してしまつた。だが乗員一同は船の火災などには少しも構つてゐられなかつた。たゞ無二無三に港口目がけて突進していつた。火災は段々大きくなつて來て、全部燃えてしまつては沈める譯には行かないので、「もうこの邊でよからう。」といふので、本田少佐の命令一下、忽ち爆沈してし

まつた。然し歸らうとしても六隻のボートは全部燃えて形を失つたので用に立たなかつた。たつた一隻残つたボートに全員が乗り移つて、さて漕ぎ初めようとした時、少佐は田中兵曹が艦橋に倒れてゐるのを見つけた。

「おい、誰か行つて田中兵曹を運んで来い……」かう少佐は大聲で部下に命じた。然し部下達は皆啞のやうに黙りこくつて、振り向いて見る者もない。少佐は不思議に思ひながらも、事は急を要するので近くにゐた一兵曹の肩を掴んで、田中兵曹を指示して命令した。すると一兵曹は驚いて走つていつて艦橋から田中兵曹を抱き運んで来た。そこで少佐は全員ボートに乗り移つたのを見るや、兵員の數を檢べるため「番號！」といつて大聲で叫びつけた。然し今度も不思議なことには誰一人番號をいふ者もなく、皆澄まし切つてボートに坐つてゐるだけだつた。愈々奇怪に思つた少佐は試しに近くの部下に話しかけて見ると矢張り返事がない。これは烈しい敵の砲撃のため、全員の者の耳が聾になつてゐるのだつた。いかに敵の砲撃の猛烈だつたかがこの一事でも想像がつくのだつた。

## 海上の血しぶき

無残上半身を射ち貫かれた指揮官 第四番目に續いたのは高柳大尉の指揮する江戸丸だつた。この江戸丸は頗る不運だつた。高い怒濤のため老朽船の江戸丸は仲々進行が思ふやうに行かず、船がまだ港口に達しない中に敵の巨弾は唸りを生じて江戸丸の後部を貫いた。それがため怒濤が瀧のやうに浸入して来て、船は少しく傾斜しながら、それでもやつとのことで港口の近くまで辿りついた。

そこで指揮官高柳大尉は、船を港口で横にしようとして部下に船の位置を更へるべく命令を與た。それで船はぎいつと音を立て、廻轉した。頃はよしと思つた高柳大尉は「錨の用意！」と再び大聲で命令を與へた途端、ぐわーんと鳴り轟いて飛び來たつた敵の巨弾が、無残にも上半身を打ち貫いて、甲板の上にはつたり倒れてしまつた。と見るや部下が大尉の傍らに駆け寄ると、「後をしつかり……頼むぞ……」かう一言を残して名譽の戦死を遂げた。そこで永田中尉が高柳指揮官に代つて江戸丸の指揮官となつてそこに錨を下して、目的通り江戸丸を爆沈してしま



つた。そして指揮官高柳大尉の名譽の死骸をボートに移して、淺間丸に歸つたのだつた。  
 大器は晩成、急ぐべからず 第五番目に港口目がけて進んで行つたのは犬塚大尉の指揮する愛國丸だつた。この愛國丸は初め高柳大尉の指揮する江戸丸と並んで一緒になつて港口さして進んでいつたのだつた。

すると江戸丸の高柳大尉から「風浪烈しくして速力遅々として頗る困難を極む。」といふ信號が愛國丸に達した。この信號を知つた愛國丸の犬塚大尉は、直ちに「大器は晩成に如かず、急ぐべからず。」と返信をしたのだつた。決死の覺悟で敵陣目がけて突進して行くといふのに、まるで平時の演習かなんぞのやうに、餘裕綽々たる勇士の態度だつた。そして、港外近くに達して敵砲臺から盛んに照す探海燈の光りで周圍を見廻すと、犬塚大尉の指揮する愛國丸の周圍にも他の四隻の僚船が、必死の意氣込み物凄く港口さして突き進んでゆくのが見られた。「大器は晩成、急ぐに及ばず。」と信號をして、ゆつたりして落付きぶりを見せた犬塚大尉も、やはり僚船の意氣込みを見ると、負けてはならない、遅れてはならない氣持が湧然と湧き起つて來るのだつた。それで夢中になつて進みゆく僚船の間を突き進んで、港口間近に迫つていつた。と、敵弾は雨霰より尙

烈しく降り注いで、港口近くになるに随つて、彈丸の命中率もいよ／＼確實になつて來るのだつた。それがため乗組員は負傷者が續出してくるのだつた。午前三時半、敵の放つた水雷は愛國丸の右舷を貫いて汽罐室に命中した。それがため愛國丸は、船體の眞中を二つに割られた形になつて、萬事休してしまつた。そして見る／＼中にく／＼と海底深く沈んでゆくのだつた。それがため内田大尉を始め八名の部下が名譽の戦死を遂げてしまつた。

敵に救はれて自決した勇士 愛國丸に續いて進んで行つたのは、第六番目の小樽丸だつた。この小樽丸の指揮官は野村大尉で、その部下には剛直な勇士岩瀬機關少監以下十數名の勇士が乗り組んでゐた。小樽丸の他の閉塞船と一緒に黄金山の探海燈を目標にして、雨の如き彈丸と逆巻く怒濤を侵して突進していつた。そして午前三時頃、港口近くの木材を突破して水道に向つて突つこんでいつた。

その時、砲臺から猛射する彈丸が小樽丸の舵機に命中して、それを粉碎してしまつた。それがため小樽丸は全く進退の自由を失つて、動かなくなつてしまつた。それを知つた指揮官野村大尉は、止むなくそこで自沈して、ボートに乗員を移乗させた。然し、ボートに乗つて漕ぎ初める頃

は全く敵の狙ひ撃ちの標的となつて、見る／＼中に烈しい敵弾の爲め打ち倒されるのだつた。その中ボートも大浪のため轉覆してしまつて、野村大尉以下の死傷者を出した。中でも最も不運なのは岩瀬機關少監及び部下七名だつた。岩瀬少監と他の七名は激浪に揉まれて、岩に打ちつけられ全く人事不省になつて浪間に漂つてゐる間に、敵の哨艦に発見されて救ひ上げられた。正氣づいてから之を知つた岩瀬少監以下七名の勇士は、切齒扼腕して無念の涙を流したが、遂に如何ともする術がなかつた。然し剛直と潔白とをもつて聞えてゐた岩瀬機關少監は、人事不省の状態であるとはいへ、敵に救ひ上げられたのを潔しとせず、遂に食を一切を絶つて悲壯なる餓死を遂げてしまつたのだつた。

### 壯烈無双勇士の死

大渦巻にまかれたボート 續いて進んでいつたのは湯淺大尉の指揮する相模丸だつた。この相模丸は小樽丸について港口外に達し、それから速力を少しゆるめながら行く／＼港口附近に機械水雷を敷設しながら突き進んでいつたのだつた。そして午前三時半頃、防材の漂ふ近くまで進

んで行つて、それから尙も防材を突き破つて進んでいつた。そして水道口の右半分を閉塞する様な好箇の位置に至つて爆沈してしまつた。「我が事既に終れり。」とボートを下さうとしたが、その中の一隻は来る途中敵弾の爲め粉碎されて、物の用に立たなかつた。もう一隻のボートを急いで下さうとしたが、どうした事かボートは鎖が絡んだやうに本船に喰つゝいたまゝ離れなかつた。これを知つた敵兵は黄金山の中腹に現はれて、近距離から機關銃で狙ひ撃ちにするので、乗組員は將棋倒しに打ち倒されるのだつた。

間もなく相模丸はごつ／＼といふ物凄いな音を立て、沈没していつた。本船の沈没と同時に大渦巻が湧き起つて、やつとボートを引き離して乗り込んだのも束の間、ボートは乗組員諸共、其大渦巻の中に捲きこまれて、あつといふ間に轉覆してしまつた。それがため湯淺大尉を始め全員は激浪の中に影を失つてしまつた。そして其中九名は激浪の中を漂ふ中、小樽丸の乗員七名と同じ様に人事不省になつてゐる處を、敵艦のために救ひ上げられて、無念ながら生き残つたのだつた。これも又花の中なり櫻草 最後の第八番目に突き進んで行つたのは向大尉の率ひる朝顔丸だつた。向大尉は出征に臨んで、

これも又花の中なりさくら草

と一句を詠じて、勇みに勇んで出發したのだつた。それで三日の午前三時半、向大尉指揮する朝顔丸は遮二無二港口外に突進していつた。そして港口外に達すると黄金山から打ち出した敵の砲弾は朝顔丸の舵機に命中したため、その進退の自由を失つてしまつた。然しこゝまでやつて來てその儘引きあげるのは無念極まりなかつた。

「舵機が利かなくとも構はん。ぐんぐん突き進め、一尺でも二尺でも進めるだけ進め！」

かう大尉は大聲で嗚呼つて部下に命令を與へた。そして、よろ／＼と蛇行するやうにして尙も進んで行くのだつた。然し不幸にも船は全力盡きて進まなくなつたので、港口には達しなかつたが思ひ切つて爆沈してしまつた。かくて残念にも朝顔丸には誰一人として生存者はなく全員悉く口外で壯烈無双な最期を遂げてしまつた。

かうした壯烈無比な第三回旅順口閉塞の快挙にしたがつた決死隊員は、全部で百五十名であつたが、その中無事に生還したものは僅かに五十名で、後の百名は全部敵弾に打ち碎かれたり、又は波浪に溺れて名譽の戦死を遂げたのだつた。又生還した者でも殆んど傷いて満足に生き還つた

といふ者は一人もないといつてもよい程だつた。それだけ大きな犠牲を拂つて決行したため、その第三回閉塞の結果はまづ完全に近いものといつてもよかつた。

聯合艦隊司令長官、東郷平八郎中將も「八艘の中、五艘は港口内に於て爆沈せしをもつて、港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し、充分閉塞せられたるものと認む。」と報じられてゐるのを見ても、その結果は壯烈極まりない決死隊員の犠牲によつて、立派な成功を見たといつてよいのだつた。そのため旅順港内にゐる敵艦は全く袋の中の鼠に等しく、無力なものになつてしまつて當分の間は大したことは出来なくなつて、たゞちつとしてゐるより方法がなかつたのだつた。それで仕方なくヒマに任せて、我が軍の沈めた閉塞船を爆破したりして、のんびり日を送つてゐるのだつた。

## 決死隊員と魚雷勇士

黒暗々の闇を衝いて

日露戦争感懐談

血書志願の勇士 日露海戦中に於ける最も華々しい壯舉は、何といつても旅順口閉塞の痛快事だつた。中でも廣瀬中佐と杉野兵曹長の一大美談は日本全國津々浦々は申すに及ばず、全世界の人々を驚歎させた悲壯美談で、餘りに知れ渡つてゐるので、こゝではそれは譲ることとして、矢張旅順口閉塞に伴ふ決死隊員の悠々たるエピソードを紹介することにする。

旅順口閉塞の壯烈な快撃の張本人は、八代六郎大佐、廣瀬武夫少佐、有馬良橋中佐の三人だつた。その中有馬中佐は熱心に東郷司令長官を口説き落して、愈々その賛成を得て二月二十八日にその決死隊員を募集することにきまつた。

一度閉塞決死隊員募集の報が全艦隊の間に傳はると、さあ大變、我も我もと應募者殺到の状態で、僅か五十餘名を選ぶのに何千名といふ勇士が立ち處に集つてしまつた。その中でも旗艦三笠

日露戦争感懐談

艦の林二等兵曹や、八島艦の梅原一等機關兵、富士艦の赤松三等兵曹及び數十名の勇士などは、鮮血をもつて志願書を認めて、是非共採用して欲しいと願ひ出たのだつた。そこで司令官を初め當局の者も二十人の中から五十名を選抜しなければならぬので、その選抜方法にほと／＼閉口してしまつた。そこで先づ血書志願の勇士を先にとつて、それから指揮官として有馬、廣瀬、齋藤、正木、島崎の諸勇士をとつて決定したのである。然し中には選抜に洩れたといつて喧嘩腰に選抜掛に喰つて掛る者もあるし、又甲板にどつかと坐りこんで採用して呉れなければ動かないといふ者も出てくる有様だつた。

愈々決死隊員と閉塞船と指揮官の部署が決定すると、東郷司令長官は有馬、廣瀬以下の決死隊員を旗艦三笠の艦上に招いて、別れの祝宴を催した。そして

「御苦勞ちやが國家のためしつかりやつて貰ひたい。」と言葉は短いが意味深い激勵の言葉を贈つた。最後に有馬中佐が決死隊員を代表して、

「誓つて成功を期します。然し閣下や諸君と再會出来るか否かは疑問であります。」と答へた。そしてその夜（二月十九日）天津、報國、仁川、武揚、武州丸の五船に分乗を終つた

のだった。

名譽の戦死唯一人 明くれば二月二十日、五船に分乗した閉塞決死隊員は笠置、吉野、千歳三艦に護衛されて、旗艦三笠の勇壯な軍樂隊に送られて出發した。そして二十四日午前一時、旅順港外に達した。そしてそこから護衛艦に別れて天津丸を先頭にして、黒暗々の闇をついて港口めがけて突進していったのだつた。然し、間もなく敵砲臺の發見する處となつて、亂射亂撃の的となつてしまつた。それに無數の探海燈に縦横上下から照し出されて、閉塞船は全くその光りの中に露出されてゐるため、閉塞隊員の苦戦は形容の出來ない程甚だしかつた。苦戦といつても敵の亂射に對して應戰する譯ではなく、唯敵の各砲臺、諸艦からの亂射を浴びながら、船を最もよい目的の場所に運んで爆沈させるのが各自の任務だつた。

先頭第一に進んだ有馬中佐指揮の天津丸は、敵の探海燈に方角を誤つて、港口よりはぐつと外れた老鐵山の東岸に沈んでしまつた。續く廣瀬中佐指揮の報國丸は、無數の砲彈を浴びて、目茶々々の損傷を受けながらも、尙も突進して港口數十メートル手前の尖岩に衝突して坐礁した。第三番目の仁川丸は港口近くまで侵入して、そこで爆發して沈めた。そして全員ボートを下さうと

する途端、飛來した敵彈は、ボートを木つ葉微塵に粉碎して、同時に梅原二等機關兵を打ち碎いた。續いて進んだ正木大尉指揮の武揚丸は矢張探海燈の光りに眩惑されて、天津丸の外側で沈んでしまつた。最後の島崎中尉指揮の武州丸は敵彈のため舵を粉碎されて、饅頭山の下で自沈してしまつた。

かくして第一回の閉塞は終つたけれど、この第一回閉塞に名譽の戦死を遂げたのは、仁川丸の梅原機關兵唯一人で、負傷者も僅かに三人にしか過ぎなかつた。そして結果は完全なる閉塞とは云へなかつたが、その探つたやり方は壯烈極まりない快舉といつてよかつた。それがため敵の諸艦は、我が軍のかうした快舉に度膽を抜かれて、それから暫くの間は港口深く縮まつてしまつた。

### 突 飛 な 壯 舉

丸坊主になつた齋藤大尉 然し決死隊員の人々は、結果の不完全だつたことを恥ぢて口惜しがつた。

「あんな不成功でおめく生きて歸つたのは面目もない。恥かしい次第だ。」

かういつて隊員の中齋藤大尉と外数名の士官は、頭を丸坊主にくり／＼に剃つてしまつて、失敗を恥ぢ口惜しがつた。

然し決死隊員はその場に臨んで逆上してゐたかといふと、さうではなかつた。出發に當つて、「皆圖太く落ち付いて目的を果たさなくては——」

かういつて、誰いふとなく、畢丸の伸び縮みで度胸を試すことにきめてゐたのだつた。そして船を自沈させて、ボートに乗り移ると、皆は股の間に手を突こんで、その延び縮みを試したのだつた。中には畢丸を探りながら、

「伸びてる／＼。序に小便でもしちまへ。」

さういつて敵砲臺に向つて、シヤア／＼ホースを向けたのんきな者もあつたのだつた。

横尾少尉の突飛な計畫 富士艦乗組の一少尉に横尾敬義といふ少尉があつた。横尾少尉は佐賀の生れで奔放と大膽をもつて知られてゐた。

この横尾少尉が頗る奇抜な計劃を思ひついて、是非これを實現しようと思つた。それは第三回の旅順閉塞の壯舉が行はれて間もない頃のことだつた。そして横尾少尉の實行しようといふ奇抜

な方法といふのは、魚形水雷を抱いて、旅順口の港内に潜りこんで、港内に浮んでゐる敵艦の大い奴を目掛けて、その魚形水雷をぶつけて、自分の體と一緒に敵艦を粉碎して沈没させてしまはうといふ、頗る突飛極まりない計畫だつた。

そこで横尾尉は或る日、この計畫を富士艦長松本大佐の處へいつて、熱心に物語つた。

「艦長、この方法でしたら自分一人の犠牲で、敵の大艦を見事に沈めて御覽に入れます。たつた一少尉と何萬噸の一大戦艦との相打でしたら、決して損ではありません。是非共日本海軍のために僕の計畫を實現させて下さい。」

横尾少尉はかういつて熱心を面に現はして松本艦長を説いたのだつた。ちつと聞き終つた松本艦長も突飛極まりない彼の計畫を初めは危んだけれど、餘りに眞剣な横尾少尉の態度に、

「お前のいふ事はよく判つた。君のその眞剣さは何事をも成し遂げるかも知れない。然し俺とはすぐ許可を與へる譯には行かない。まあ暫く考へて見る事にしよう。」

かういつて、その場では横尾少尉の壯舉に許可を與へなかつた。然し松本艦長はそれから間もなく東郷司令長官に、横尾少尉の計畫を話した。

然し東郷司令長官も「そんな突飛な事が出来るものか。」といつて、一言のもとに斥けてしまつた。これをきいた横尾少尉は承知しなかつた。

「私も日本帝國の軍人です。必ず見事やつて見せる確信があつて申し上げた事です。是非共一度やらせて下さい。」かういつて斷固として譲らなかつたので、その熱心さにすつかり動かされた松本艦長は、再三東郷司令官を口説いた。

「それ程横尾少尉に確信があるなら、一度やらせて見るがよい。」  
かういふ譯で、或日その試験が軍艦三笠と富士との間で行はれた。

魚雷勇士横尾少尉 この日になると横尾少尉は大いに勇み立つて、渡された魚形水雷を小脇に抱かへるや、眞裸體になつて、荒れ狂ふ海中にさんぶとばかり躍りこんだ。三笠、富士艦は申すに及ばず、見張の水雷艇の全員は、甲板から横尾少尉の姿を發見しようとして水面を覗んでゐた。然し、どうしたのか横尾少尉の姿は何處にも現はれず、誰の目にも入らなかつた。その中富士艦上から飛ひこんだ横尾少尉の姿は、すつと先にゐる三笠の向ふ側に、水雷を抱いてほつかり浮んだ。これを見た一同が驚いて呆然としてゐる間に、再び少尉の姿は海中に沈んでしまつた。

そして今度は富士艦の左舷に現はれた。この人間離れした早業を見た一同は、やんやの喝采で彼の甲板の上つてくるのを迎へた。

これを見た東郷司令官も、餘りの見事な彼の離れ業にすつかり相好を崩されて、「うまくやりおつた。それならやつてのけるだらう。では横尾しつかりやつて来！」といふ譯で愈に横尾少尉のこの突飛な壯舉が決行される許可がおりたのだつた。

それから數日の後、暗夜を選んだ横尾少尉は、例によつて魚形水雷をひつかへて、富士艦上から水中に躍り入つた。そして山のやうな港外の怒濤を潜り抜けて、旅順港口に泳ぎ迫つていつ然し、旅順港口には防材やあらゆる障礙物が組んであつて、我が潜水艇水雷艇の侵入を防いでゐるのだつた。それがため横尾少尉は非常なる苦心と努力とをもつて、さうした第一の防材をくり抜いた。然しうまく第一の防材をくりぬけた少尉は、第二の防材にがっちり遮られてしまつた。又第二の防材をくりぬけたにしても、第三、第四の防材ががっちり水中に設けられてゐるため流石の横尾少尉もすつかり持て餘してしまつた。第一の防材を潜り抜けるにも萬難を排したのだつた。それで無念の恨みを呑んだ少尉は、再び魚雷を抱きかへた儘、富士艦として泳ぎ歸つ

たのだつた。  
横尾少尉のこの突極まりない壯舉は例へ不成功に終つたとはいへ、魚雷と共に敵艦諸共自分を粉砕しようとした大膽極まりない元氣に至つては、誠に懦夫をして立たしめずには置かないものだつた。肉弾勇士以前に現はれた魚雷勇士、横尾少尉の如き日本海軍の誇りといつてよいのだつた。

## 北國健兒花と散る

### 母に無斷で出征

泣いて立ち去る孝行兵士 新潟縣古志郡長岡町の町端づれに、佐藤精四郎といふ豫備兵の家があつた。この精四郎には一人の母親があつて、ずつと前から病床に呻吟してゐるため、精四郎が働かなければ二人の生活の糧は得られなかつた。  
今日も精四郎は野良から疲れ切つて歸つて來た。

「お母さん今歸つたよ。體の具合はどうでした？」かう優しく訊ねた。母は優しい我が子の言葉に嬉しさに起上つて「イエ何も變つたことはなかつたが、先刻役場の小使さんが見えて、これを置いて行かれたが、若しかすると戦でもあればお前も行かんといくまいかな——」といつて一通の封書を差し出した。精四郎はハツと思つて手にとつて見ると、それは紛れもない召集令狀だつた。これを見た母親は「精や役場の用事はなんだね。若しや戦さの呼び出しではなかつたかにかう再びいふのだつた。

「お母さん、大丈夫ですよ。そんなに早く戦争があるものですか。そんな事は心配せず早く治つて下さい。」といつて精四郎は母の前に嘘を言つたけれど、内心では困つた事が出来たものだとつくづく思つた。それに今夜か明日の中に出立しなければ間に合はないし、それにたつた一人の病人の母を後に残して出征するのが堪らない氣掛りだ。自分の出征することは名譽であり、國家の爲に當然の務めであるけれど、病み衰へた母親を残して行かなければならないと思つた時、全く思案に暮れたのだつた。そして若し自分が戦場の露と消えたら、杖とも柱とも頼んでゐる母親の悲しみ、考へただけでも精四郎の胸は張り裂けるばかりだつた。暫く思案の末、精四郎は母親



に自分の出征を知らせて若しも體に觸つて、取り返しをつかない事にでもなつたらと思つて、不孝には違ひないがこの儘に母に黙つて出て行かうと決心したのだつた。そしてその夜母の肩を撫でたり藥を煎じて飲したりして徹夜母の看病をして明かした。そして幾度か涙を拭ひながら一夜をまんじりともせず明かしたのだつた。そして夜が明けると今日を別れとする悲しい粥を病母のために煮るのだつた。

そして何氣なく「お母さん昨日役場から今朝来てくれといふから、一寸行つて來ますよ。」といふと、何事も知らない老母は「あゝいつておいで。」と快く言つてくれるのだつた。

精四郎はこの母の言葉に胸も張り裂けんばかりだつたけれど、ちつと堪へて外に出た。彼は病むたつた一人の母の事を考へて、戦さの門出にも一言の別れも告げずに出て行かなければならなかつた。彼は暫く行つたものゝ、足は鐵のやうに重く、拂ふても拂ふても溢れ出る涙をどうともすることが出来なかつた。二三丁行つたものゝ、後で母が殘念に思ふであらと思つた時、堪まらなくなつて再び我が家の裏口まで歸つて來た。そして竊と戸の隙間から覗くと、病む母のやつれた姿が薄い蒲團の上に見えた時、彼の胸は一杯になつてしまつた。然し精四郎は一大決心で立ち

上つた、噫、然しこの別れこそ母子一生の生別れであり又死別だつた。

巡察將校と彼 その日の眞夜中に彼は新發田歩兵第十六聯隊へ到着した。集合時に遅れては一大事といふ譯で晝夜走り續けてやつと夜中に到着したのだつた。それに餘り時刻が遅かつたので營門の處へいつてマゴクしてゐる處へ、營門から二人の將校が出て來た。

それは巡察將校で手に赤い提灯を下げてゐた。それを見ると彼は走り寄つて「今夜はもう入れませんでせうか。」

と訊ねた。すると將校は提灯の光りで彼を眺めて「おゝ、お前は佐藤伍長ぢやないか？」その將校の言葉に佐藤もよく見ると、それは品田少尉のなつかしい姿だつた。「ハア、品田少尉殿でしたか。かういひながらも佐藤伍長の目からは涙が流れ落ちるのだつた。「よくやつて來た。」かういふ品田少尉の言葉に、佐藤伍長は今迄の一切の事を打ち明けた。聞き終つた品田少尉も涙を浮べながら首肯くのだつた。そして品田少尉の後から續いて營門を潜つた佐藤伍長は、それから第十中隊の一員に加へられた。そして翌日、佐藤伍長は病む母に宛て一通の手紙を書いた。

——お別れの言葉も申しあげず参りましてお宥し下さい。今になつて見るとなぜ一言申しあげ

なかつたかと残念に思つております。私も只今から戦争に参りますが、誓つて立派を手柄を立てる決心でおりますから、安心して丈夫でいつまでも長生して下さい——

さうして孝行兵士佐藤伍長は出征したのだつた。

悲壯なる将卒の最後 明治卅七年七月十七日、突撃の命令が静寂な空気を揺がした。勇躍して無二無三に突進する我が北國健兒の勇敢さには、流石剛勇をもつて鳴る敵兵も僻易した。そして敵は忽ちにして樞要なる中央地を我が軍の蹂躪するの任せたのだ。然しそれも僅かの瞬間だつた。敵は大兵を率ひて逆襲に轉じて来たため、此處に猛烈なる一大血戦は繰返された。それがため中隊の兵卒は算を亂して打ち倒され、悲運は我が軍を見舞つた。中隊長末松大尉は重傷を負ひ、續いて小隊長後藤中尉も飛び来る敵弾のため無残にも斃された。

それがため形勢は益々不利になつて、今や第六中隊の運命も刻々迫つていつた。この時、田村大尉の率ひる第十二中隊が風を捲いて突進して来た。そして新銳の第十二中隊の救援を得た第六中隊は、亦も激烈極まりない血戦を續けたのだつた。然し敵は二大隊に餘る有力なる部隊で、味方は一中隊と疲労し切つた少數の残兵、その惡戦は殆んど形容に盡されないものであつた。

品田中尉の少隊は第六中隊の右翼にあつて猛烈に敵と奮戦してゐた。間もなく第十二中隊長田村大尉も敵弾に名譽の戦死を遂げたため、品田中尉も重傷の身を起して中隊長に代つて陣頭に立ち奮戦を續けるのだつた。然し剛勇無双の品田中尉も夥しい出血のため遂にばつたり倒れてしまつた。そして昏々たる眼りに落ちて行くのだつた。

この時、烈しい戦の真只中を、聲を限りに品田中尉の名を呼んで探し求めてゐる一人の兵士があつた。やがてその兵士は倒れてゐる中尉の姿を見つけて、走りよつて中尉の體に飛びついた。

「中尉殿やられましたか、しつかりして下さい。」かういつていきなり中尉の體を抱きかゝへた。その聲に中尉も昏睡から目覺めて「おゝ佐藤か、俺はやられた……」かういつて苦し氣に喘いだ。その間にも烈しい敵弾は二人の周圍に雨の如く降り注いでゐた。

「佐藤、お前は俺に關はず早く敵を撃退して呉れ！」

かう中尉が苦しい息の下からいつた。その途端、風を切つて飛來した敵の一弾は、佐藤伍長に命中した。「うーん」と喘いだ佐藤伍長は、その儘品田中尉の體の上に倒れかゝつた。

勇敢なる二勇士の死 中尉の上に倒れ掛つた佐藤伍長の姿に、中尉はびつくりして「佐藤、お前

もやられたな。」といつて我を忘れて中尉も佐藤を顧みた。

「中尉殿、大丈夫です。」

「どこをやられた？」

「胸を一寸やられたやうです。」かういつて佐藤伍長は自分の胸を押さへた。

「ひどくやられたか？」

「いえ、大したことはありません。それより中尉殿は如何でありますか？」

かういつて中尉は部下なる佐藤の身を氣づかひ、部下の佐藤伍長は親にも勝る慈愛深い品田中尉の身を氣づかつて止まないのだつた。

「中尉殿、苦しくはありませんか。確かしてゐて下さい。」

苦しうな中尉の息使ひに、佐藤は我が身の苦痛を忘れて、かういひながら中尉の顔を覗きこむのだつた。

「いゝや大丈夫だ、心配するな。」かう中尉は強いて力強く言ひながら、ふと思ひ出したやうに、

「佐藤、お前の母親が病氣でたつた一人で寝てゐるといつたつけな……」

その中尉の言葉に佐藤は首肯して見せた。その時、佐藤伍長は田舎の破れ家に薄い蒲團にくるまつて寝てゐるやつれた母の姿を寂しく思ひ浮べたのだつた。烈しい戦ひの修羅場でありながら佐藤伍長は暫くの間、母の姿をなつかしく浮べた。

すると品田中尉は、佐藤伍長の顔を凝視めながら、

「佐藤、お前も母一人子一人の家庭だつたが、俺も家には母がたつた一人しかゐないのだ。」

かういふ品田中尉の言葉は、佐藤伍長へツとして中尉の顔に見入つた。そしてちつと見入つてゐる佐藤を淋しく眺めながら中尉は、手に持つてゐた軍刀を上にして、

「佐藤、俺はもうだめだ。この傷では到底助かりやう筈はない。若しお前が助かつて生命があつたなら俺のこの軍刀を持ち歸つて、俺の母に俺からの遺品だといつて渡してくれないか。そして俺はかういふ場で立派に戦つて名譽の戦死を遂げたといふことを話しくやつてくれ、これが俺の君に頼む最期の願ひだ。」

かういふ中尉の目からは母を思ふ涙が潸然と流れ落ちてゐた。これをきいた佐藤伍長は、

「中尉殿、確かに承知致しました。きつと〜お傳へします。」

かう答へながらも佐藤の胸はいつばいになつて、後の言葉もつゝかず、たゞ中尉の體をしつかと抱かへるばかりだつた。

それから間もなく中尉の魂はは、中尉の肉體を去つて昇天していつた。

「中尉殿、品田中尉殿！」

悲壯な佐藤伍長の呼ぶ聲が暫らく續いてゐたけれど、それも僅かの間で、重傷の佐藤伍長もそれから一刻の後、品田中尉と抱合つた儘息が次第に絶えていつた。

### 雪の墓標にぬかづく貞婦

苦戰聯隊に一人の佐官なし

虚空に尾を引く曳光彈 明治三十七年九月三日は歩兵第二十聯隊の永切に記憶すべき大激戦の日だつた。激戦に次ぐ惡戦、既にして桂聯隊長、森大隊長を失つて、間もなくまた今井少佐が傷つて倒れ、續いて代る八木下聯隊長も負傷して歩兵第二十聯隊には一人の佐官もなくなつてしま

つたのだつた。

夜來の降雨な名残なく晴れた曉の午前五時、全戦線は未だ静まり返つてゐて何等の物音もしなかつた。然しその無氣味な静けさも、間もなく破られた。ズドンと鳴り響いた敵歩哨の警報は、行軍中の味方の士氣を緊張させた。間もなく激烈な砲戦は静かな朝霧を破つて開始された。そして前面の敵が午前七時頃から猛烈なる亂射を始めたので、我が軍は丘から一步も進むことが出来なかつた。味方の散開を遙かに見下してゐる敵の砲兵は、頻りと砲撃の雨を浴びせる。空中に白く尾を曳く曳光彈を見る人の膽を冷すのだつた。と、第二大隊の眞上で曳光彈が破裂した。アツと思ふ間もなくうーんと唸る者、ばたつと倒れる者、奇怪な響き、そして敵の猛射は愈々烈しさを加へるのだつた。天には砲弾の破裂する響き、地には硝煙の煙、その間にわつと擧がる突撃の喚聲、然し敵は地の理を占めて頗る優勢だつた。味方は一步も退かず苦戦につぐに惡戦だつた。

硝煙の中に消えた大槻傳令 大槻藤吉上等兵は大隊長の傳令として彈丸雨下の間を必死となつて奔走してゐた。脚部と腰に二ヶ處の傷を負ふてゐた大槻上等兵は戰場を阿修羅の如く走り廻つて

わた。不屈の彼、決死の彼、重傷にも屈せず、いつかな戦線を去らうとはしなかつた。雨の如き機  
 關砲彈の落下する處、右から左から無茶苦茶に浴びせかける敵の十字火、その間を上等兵は屍  
 を乗り越へ、飛び越して馳せ廻つた。間もなく憎や敵の一彈は空を切つて飛來した。あつといつ  
 て避くる間もなく彈丸は上等兵の頭部に命中した。硝烟消え去つた時、大槻上等兵の姿は無残な  
 最後を遂げて地上に横たはつてゐた。最も重い傳令の任務に従つて、二度負傷しながら些かも屈  
 せず、遂に一死と共にその任務を完全に全うしたのだつた。噫、勇敢極まりない彼の最後よ。  
 旅順陥落を裏前に報告 旅順港陥落の一月二日は、朝から雪が五寸以上も積つた。京都府下何鹿  
 郡中筋村宇中筋にある戦死者大槻藤吉の妻女は、その時子供を背負つて、降る雪の中を出て行つ  
 た。村人も旅順陥落の報を聞いて雪の中を歡呼をあげながら通つていつた。雪は益々烈しく降り  
 しきつて次第に四邊は暗くなつて來たけれど、藤吉の妻女は歸つて來なかつた。爺さんはたつた  
 一人で炬燵に炙りながら、藤吉君の妻女の立ち戻るのを待つてゐた。一體妻女はこの大雪に子供  
 を背負つて何處へ出かけたのか？ 村の知人の宅へ行つたにしては餘りに遅すぎる。かう思ひな  
 がら妻女と孫の歸りを待ちくたびれてゐるのだつた。然し幾ら待つても嫁と孫とは歸つて來なか

つた。爺さんは餘りの心配に傘をさして迎へに出かけるのだつた。  
 雪は盛んに降つてゐた。もう外を通る者は一人もなかつた。方々を探し廻つた爺さんは力なく  
 又家に戻らなければならなかつた。失望した爺さんは家に歸つて、雪の降る音にちつと耳を傾け  
 てゐた。

それから一時間ばかりして嫁は歸つて來た。そして濡れた足を洗つて土間に上つて來た。

「この大雪に何處へ行つたのか、わしやえらく心配になつて方々を探して行つただが、まあよく  
 歸つて來てくれた。」

爺さんはかういひながら、嫁の髪の上に散り掛つてゐる雪片を手で拂ひ除けるのだつた。する  
 と嫁はそこにきちんと坐と、

「お父さん御心配かけてすみませんでした。私は旅順が陥落したと聞きましたので、堪まらなく  
 なつて、お墓へお知らせに行つたのです。この子を背負つてお父さんのお墓へいつて暫くゐて  
 來ました。」

これをきいた老爺は思はずハラ／＼と涙を流して、

「さうか、よく知らせに行つてくれた。嗚、草葉の蔭で悴も喜んでゐたらう。」  
かういつて、餘りにいちらしい嫁の心盡しに聲も惜しまず泣くのだつた。第二十聯隊第五中隊  
故陸軍歩兵上等兵大槻藤吉の墓前に子を背負つて戦捷を報告した貞婦お定、夫藤吉の墓標もその  
時確かに微に動いたかも知れない。

神様の仲間入りした悴

忠勇なる大橋伍長

陸軍歩兵伍長大橋吉太郎君は新潟縣新潟市本町通り十一番地に呱呱の聲をあ

げた。

「自慢ではないが家の悴は誠によく出来た奴です。親の口からいふのも可笑しいが、性質は柔順  
で、親孝行の確りした奴でした。」  
と父君はいつも口癖のやうに語るのだつた。そして尙も言葉を續けて、

「悴は忍耐強かつたので人と争ひなどした事は滅多にありませんでした。高等小學を卒えると商  
業學校の速成科に入つて勉強してゐましたつけ、そして勉強の暇には祖父さんから擊劍や水泳な

どを教へて貰つてゐましたから、詰らない遊びなどはやりませんでした。そして學校を出ると有  
名な大阪の海産物問屋の田中傳兵衛さんの店で働かせて貰ひました。そしてお店の仕事にも人  
倍精を出して働きましたので、御主人は信用して下さつて、半年経つか経たない中に番頭格に採  
用されました。その中徴兵のためお店を辭あることになりましたが、その時も御主人の言はれる  
のに「店の爲にも吉太郎さんの行かれるのは誠に惜しい、けれど國家の爲にはお喜びしなければ  
ならない。」かういつてつくづく惜しまれました。それに悴の親思ひといつたら一通りのものでは  
ありません。我が子ながらどうしてかうもよく親の面倒を見てくれるものかと、心の中でいつも  
禮をいつてゐる位でした。實際我が子ながら感心な奴でしたよ。」  
かういつて話す父親だつた。そこで人が「御子息は只今どちらにゐられますか。」と訊ねると、  
吉太郎君の父君は、意氣揚々としながらも、然し兩眼には熱涙を湛へながら、次のやうに語るの  
だつた。

「え、吉太郎の肉は滿洲の原つばで土か何かに變つてしまひました。然しあの子の魂は立派  
に招魂社に祭られて、今ちや神様の仲間入りをしてゐます。我が子といつても立派な神様と思つ

てゐます。倅は名譽の戦死を遂げて日本武士の手柄を立派に示して呉れました。勿論、金鵝勲章も頂きまして、畏れ多くも天皇陛下から天盃まで頂きました。然しかうなると親の愚痴で一日でいゝからあの勇ましかつた倅の姿を見たり、倅の口から勇ましい手柄話が聞きたいと思ひますが又そんな女々しいことでは倅の恥辱であり、名折れであるとも考へてゐます。」

かういひながら父君の目から熱涙の滂沱として流れ落るのが見られるのだつた。

子を見ること親に如かずで、流石に父君は吉太郎の凡てをいひ盡してゐるのだつた。吉太郎は出征に際して白山神山の拜殿から見送りの人々に告別の挨拶をした。

「此の度日露の國交は破れて、戦端を開始するは我が國歴史初まつて以來の大事であつて、帝國の興亡もこの一擧に掛つてゐます。私も従軍の一員として國恩の萬分の一を報ずるのは誠に光榮とする處であつて、欣快至極に堪へません。私も征途に上る以上斷じて生還を期してゐません。然し諸君は本國にあつて出征する我々の身の上等には些も懸念することなく、一意陛下の聖旨を奉戴して、日本國民たるの自分を盡さんにとを望んで止みません。」

かゝる強い決心をもつて吉太郎は故國を去り征途に上られたのだつた。

我身を顧みず戦友を救ふ 五月一日、九連城攻撃に際して、吉太郎は露河の渡渉地點偵察の命を受けた。勇敢極まりない吉太郎は、その命を受けるや直ちに勇躍して出發した。そして逆巻く激流に溯つて徒渉地點を偵察してゐる中、突然飛來した敵の一弾は彼の左腕を貫通した。然し彼は屈しなかつた。

「こればかりの傷におくれてなるものか。まだ右手があるから敵をやつつけるには困りはしない」かういつて、味方を勵ましながら激流の中を突き進んでいつた。然し流れは岩をも動かさんばかりの激流で、その激流に危く足をとられて溺れんとしてゐる戦友を見ると、君はいち早く走り寄つて助け起して共に又前進するのだつた。暫く行く中に又も我が一兵士が將に溺れんとしてゐるのに出會つた。彼は之を見るや己れの負傷を忘れ、直ちにそのそばへ走りよつて一兵士をも救ひ上げたのだつた。さうした彼の機敏と勇敢なる行動によつて、我が兵の數名は無事に溺死を免れる事が出来たのだつた。

かくて中隊を誘導して、尙も進んで九連城北方高地に向つて前進していつた。血汐流るゝ身をも物ともせず、眞先に進んで行く彼が姿の勇ましさ。それは繪巻物に見る緋緘の鎧に身を固めた

若武者の痛手に屈せず突き進む面影にさながら相似たものがあつた。そして尙も勇ましく前進つとけつゝある時、又も敵の一弾は彼の腹部を貫いた。

「大日本帝國萬歳！」この一語は、戦友の耳に残した彼の最後の悲壯な叫びだつた。そして同時にどろどろと大地に倒れてしまつた。誠に悲壯極まりない最後であつた。

家にあつては親に孝なる子は、出でては主人に忠實であり、又君國にとつては忠勇極りないものだつた。そして今や彼は曠茫たる滿洲の土と化してはゐるけれど、彼の雄魂は幾百萬の日本國民欽慕の的となつたのである。

## 夫の戦死に微笑する妻

藤岡中佐の感化

大阪師團は柔弱にあらず 大阪師團の第三十三聯隊長藤岡歩兵中佐は、常に部下を戒めて、「世には我が大阪師團を柔弱なりといつて輕んずる者があるけれども、それは大なる間違ひであ

つて、日清戦争の時は既に戦争は休戦となつた後だつたため、遂に我が師團日頃の腕を試みるこゝとが出来なかつた、めであつて決して大阪師團は柔弱ではない。齊しく帝國軍人たる以上どうして他の師團に劣る譯があらうか。」

といつて勵ましてゐた。そして日露間の戦端が開かれるといち早く出征を希望して、一旦戦場に向つたなら奮つて敵を打ち破つて、第四師團の汚名を雪がんと固く誓つてゐたのだつた。そして諄々として部下にこの意を訓してゐたため、一旦出動の命を受けると部下一同は勇躍して征途に上つたのだつた。そして中佐の夫人も中佐日常の訓戒を知つて、中佐が南山の激戦で先頭第一に敵陣を打ち破つて天晴名譽の戦死を遂げられた通知を受けられたけれど、夫人は豫て覺悟してゐたことゝ少しも驚かず、美しい頬に微笑を浮べて、夫の訃音を聞いたのだつた。

平田大尉母訓を奉ず 第三師團の平田泰道歩兵大尉は越中の生れだつた。幼少にして父親に死別したため、母君の手一つに養育せられた。母君は日常泰道氏を誡めて、「父の無い子は世人から往々にして侮られ易いものである。お前はこの事を肝に銘じて決して世人から侮られるやうな振舞をしてはなりません。」かういつて訓育されて來たのだつた。それで泰道君は、この母の言葉を胸



に刻みこんで、立派な行ひをして名を擧げんものと心に期してゐたのだつた。そして遂に士官學校を卒つて衆を抜いて出世して行つた。  
日露の開戦に際して勇躍して出征し、南山占領の時勇敢極まりない奮闘をして、天晴名譽の戦死を遂げたのだつた。誠にこの母にしてこの子ありで、郷里の人々は今でもこの母子の行爲を讃歎してゐるのだつた。

初陣に勝つて目出たき五月かな 豊橋聯隊の一等卒に後藤信太郎といふ兵士があつた。信太郎君は武道の嗜みも深く中隊の猛者としても知れてゐた。けれど又風流の道にも嗜みが深かつた。奥司令官に従つて出征し、明日は金州城突撃といふ日に、故郷に次ぎのやうな手紙をかいて送つた。小生金州の總攻撃に初陣として出征しました。雨霰と飛び来る彈丸の中を進軍いたし、遂に目出度敵陣を占領して、君ヶ代のラツバ吹奏し天皇陛下萬歳を三唱せし當時の愉快さは、口には言へず、筆にもかけません。而して戦友も若干即死或は負傷せしが小生は擦り傷一つさへなく生き残り、此の後の戦線に加はる事の出来申候幸福といふものゝ、不思議より他御座なく、アラ不思議々々、全く天佑の外無之と喜ぶ居り候、其の他愉快な戦況は他日ゆる／＼御報知

可申候。

初陣に勝つて目出たき五月哉  
君ヶ代のラバ肅たり五月晴

肌に縁の黒髪を祕す 南山の激戦で花々しい戦死を遂げた勇士は無數にあつたけれど、その中にも花も實もある一人の上等兵があつた。第四師團に豫備歩兵上等兵に松好嘉三郎といふ兵士があつた。その松好上等兵も南山で名譽の戦死を遂げたので、その死體を檢視したところ、肌縁の黒髪を着けてゐた。明治の遠藤武者か又は袈裟御前の身許は如何なる者かといふので、檢べてみると、それは借老の契淺からぬ妻の黒髪だつた。松好上等兵の妻は上等兵が出征する前日、病のため死んだのだつた。それで彼は死なば諸共といふ譯で妻の黒髪を切りとつて肌にびつたり着けて軍装勇しく征途の上つたことが判明したのだつた。誠に勇士情あり、花も實もある上等兵の心根だつた。

孝行中尉の酒脱ぶり 卅七年の五月の初め、我が第二軍は遼東半島に上陸し、一枝隊は鐵道電信破懷任務を帯て、三十里堡の東北約一里半の地點にある敵兵を撃つて之を走らせた。この戦ひに

於いて率先第一番に名譽の戦死を遂げたのは中尉(勇喜)だつた。中尉はかつて秋野禪師に參して修養に努めたことがあつた。後に士官學校を了へて、中尉に進級したけれども、資性孝心深く、常に俸給の一部を割いて両親に送つて慰めてゐた。そして四月に征途に上る時、家に送つた書中に次のやうな俗語があつた。

泣いてくれるな今船が出る

烏なきさへ氣にかゝる

孝心なれど誠に洒脱で、禪悟に達してゐるのがこの一首で窺知されるのだつた。

絶域花稀なり 第四師團の石津(完造)歩兵中尉は大阪の生れだつた。出征に臨んで知人達は中尉のためにその行を壯んにして祝宴を張つた。その時中尉は談笑の間に、スラリと秋水を抜き放つた。そしてこれを一閃して鞘に収めた上、それから劍櫛を知人達に見せ示した。人々がその劍櫛を熟視すると、そこには「絶域花稀」と刻してあつた。知人の一人がその意味を中尉に訊ねた。すると中尉は容を正しくして、

「絶域にはもと花なし、我行いて花を咲かしめんののみ」と答へたので、人々は中尉の心中死を期

してゐることを知つて感歎したのだつた。

戦友美談約を果たす 第一師團の第三聯隊第三中隊に坂本龜次郎、關口源次郎といふ仲のよい一等卒があつた。南山攻撃の開始せらるゝ前、二人は互ひに約束を結んで、二人の中でどちらが先に戦場の露と消えたにしても、その戦死の様子をお互ひに故郷に通知することを誓ひ合つたのだつた。すると間もなく坂本一等卒が武運拙く名譽の戦死を遂げたので、關口一等卒は生前の約束を守つて、細々と坂本一等卒の戦死の様子をその家郷の令兄に報じたのだつた。次ぎにその書状の一節をあげて見る。

拜啓陳者貴君御舍弟龜次郎君は残念ながら去る廿六日、金州城南山激戦の際、午後二時頃敵弾の爲に胸部を貫通され、同時に名譽の戦死をなされ候。本人の遺骨及び毛髪は中隊より昨日お送り申候事として、不日到着仕可と存じ候。遺骨及び毛髪は小生第三聯隊の第三中隊の朋友に頼み、他人の遺骨毛髪と混ぜざるやう厳しく頼み置候へば、貴弟の物に相違なく、この儀は御心配なき様念のため御知らせ申上候。

野村少尉國旗を城壁に掲げる 野村素一少尉は貴族院議員野村素介氏の令息だつた。早くから剛

勇をもつて鳴り響いてゐた。

金州城攻撃に際して、第一聯隊の第一中隊に属して勢ひ鋭く突撃して城門に迫つた。その時野村少尉は身を挺して門扉の小孔から闖入して大喝軍刀を揮つて敵兵を縦横に斬りまくつたのだつた。そして續いて闖入して来た平井一等卒をさしまねいて共に城壁をよち登つて行つた。そして素早く國旗を懷中から取り出して、平井の持つてゐた銃劍の先きに結びつけて、之を城壁の上から掲げて、味方の來るのを待ち構へたのだつた。誠に剛勇と機敏とを兼ね備へた少尉の行動に、敵も味方も嘆賞しない者はなかつた。

鈴木少尉決死の和歌

歩兵少尉鈴木禮吉は豊橋聯隊に属して出征した。そして南山及び至る處の戦線に従つて奮戦して勳功を立てた。金州城總攻撃の命令が下つた時、出發に際して郷里から持参した香水を軍帽とシャツに注ぎかけて、

とこしへに御旗守らん大君に

捧げし命今絶ゆるとも

と、一首の和歌を詠じて、旭旗に認めた上、それを頭につけて出陣した。五月二十五日の夜半、

徐家屯の敵陣に向つて進んでいつた。その時敵は光弾を烈しく浴びせかけて、行手を照したので全く進みかねた。然し少尉は決然として勇氣を奮つて突進し、勇躍敵壘を襲つて遂に之を占領してしまつた。幸ひにして少尉は擦り傷一つ負はず、それがため決死の和歌も徒になつてしまつた周到なる益子大尉、松樹山の突撃の際、奮戦して名譽の戦死を遂げた益子義三少尉は、歩兵第二聯隊の中隊長だつた。大尉は初め、中尉をもつて同聯隊に属して征途に上つて、それより各所に轉戦して赫々の武勳を立てたのだつた。時の大隊長は益子大尉の攻勞を賞して、敵から捕獲した駿馬を一頭大尉に贈つたのだつた。この時大尉は大ひに喜んで之を受たが、それからは常に己れの馬にのみ乗つて、贈られた駿馬には決して乗らなかつた。之をを見た同僚が異しんで、これを大尉に訊ねた處、大尉は莞爾としていふのに、

「馬の性といふものはよく道を暗じて舊を忘れないものである。若し自分が之に乗つて馬のために敵陣に不覺にも飛びこまると、如きことがあつたなら、忽ち犬死してしまふ。大隊長から賜はつた馬は如何にも良馬ではあるけれど、それは萬一凱旋した曉に乗用にする考へである。」と語つたので、之を聞いた人々は少尉の用意の周到なのに感服したのであつた。

叱敵將を罵る 歩兵第九聯隊四中队に田中胤義といふ一上等兵があつた。南山の役には勇を奮つて先頭第一の殊功を立てたばかりでなく、砲臺の最も高い司令塔に駆け登つた時、逃げ遅れた敵兵の中にあつて、罵詈雑言して部下に號令をかけてゐる一敵將を見つけた。と、上等兵は矢聲に大喝して躍りかゝつて一刀の下に敵將を斬つて落した。

ロスケ三人を倒つて一す 第一師團の寺田歩兵中佐は南山の激戦で、傳來の名刀を揮つて手づから敵兵を斬つて落し、自分も又傷を負つた。中佐が家に寄せた手紙の中に、「例の刀の斬味は頗る無類、七尺位のロスケ三人をやつた。痛快く！」  
中佐の罵詈雑言の状がこの短い一文に躍如としてゐる。

### 悲報を父◇に知らす勿れ

鮮血の中にむつくり起き上る

重傷に神色自若 池田中尉は明治卅八年一月十二日海軍中尉に任官した。そして任官と共に鎮海

海防備隊副官代理を拜命したのでつた。そして三月二十八日に驅逐艦雷乗組を命ぜられたので勇躍してその日雷に乗艦した。

當時の雷艦長は海軍少佐齋藤半六氏であつて、驅逐艦雷は矢島驅逐隊に配属されることになつた。

五月二十七日、この朝例の哨艦信濃丸の「敵艦見ゆ」の信號が我が艦隊に知らされたので、全艦隊は思はず飛び上つて喜んだ。そして引き続き敵艦の序列その他の報告が詳細に知らされて来た。そして且つ我が第三艦隊が敵艦隊に接近して、充分敵艦隊を操てゐる事を知つて我が艦隊は愈々安心したのでつた。「天氣晴朗なれども浪高し」とある如く、この日は全くひどい波だつた。それがため各驅逐艦共大波に揉まれてまるで木の葉の様に翻弄された。そして愈々敵艦と砲火を交へる距離に近づくと、東郷長官から「各隊豫定の如く行動せよ。」といふ信號が出た。この少し前に出た信號が有名なあの「興國の興廢此の一戦にあり」の信號であつて、それから後は何の信號も出なかつた。それから有名な東郷長官の敵前急角度方向轉換が行はれたのだつた。そして敵に並行しながら、敵を押さへてゆく形をとつて進んだ。そしてそれから間もなく世界海戦史上未